
とおい日のうた

大希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とおい日のうた

【Nコード】

N4462M

【作者名】

大希

【あらすじ】

『とおい日のうた』と『あの青い空のように』は

二人が過ごした時間と二人の想いを綴っています。

中学の三年間なんて、クラス替え毎に好きな人が新しくできたって不思議じゃないよ。

そう友達は言っていたけど・・・

突然好きになる恋もあれば、気がついたら好きになっていたなんてことも。

今思えば、この恋も、もうずっと前から始まっていたのかもしれない……。

あなたと出会った中学二年の終わりから、卒業までの日々。

大切なことを教えてもらった。

1・ともだち（前書き）

中学二年の秋だった。

「すごい、きれいな絵。」

美術室の前に写生大会で描かれた生徒の絵が張り出されていた。

その中で一枚の風景画に目が留まった。

「めぐちゃんー、行くよー。」

校舎や校庭や体育館といった皆が題材にしたメジャーなものとは違い、そこには小さな庭が描かれていた。

一目見ただけではこの学校のどこを描いたのか判らないほどの。

三年間を過ごすこの学びやにも、知らない場所が存在するのだと思っ

1・ともだち

「ちゃん、萌ちゃん。」

名前を呼ばれる声に気づいた。

「は、はい。」

「萌ちゃん？聞いてた？」

「あ、ごめん・祐也。聞いてなかった。」

「大丈夫？熱でもある？」

そう言つと祐也は手を額に当ててきた。
なっ！

みるみる間に顔が赤くなるのが自分でもわかる。

「熱はなさそうだな。」

心配してくれるなんて嬉しかった。
私に触れてくれることが嬉しかった。
でも、優しくしてはダメよ。

「大丈夫だよ、祐也。ボーっとしていただけ。」

「ならいいけど。」

「ごめんね。私のせいで仕事遅くなって。」

「何言つてんの。萌ちゃんのお陰で今日中に委員会の仕事終るのだよ。」

そう言つと祐也は笑顔を見せた。

優しい笑顔。

優しい言葉。

放課後の教室には二人だけ。
静けさの中に響く祐也の声。

今は、今だけは独り占めできる祐也の声。

「祐也くん。」

教室へ響くもう一つの声。

「智美ちゃん。」

「終りそう?」

「うん、もう少しで終るよ。」

「じゃあ、玄関で待ってるね。」

「うん。」

私だけの時間はそう長くは続かなかった。
わかっていたことなのだけだね。

「祐也、あと私がやっておくから帰っていいよ。」

「え?」

「かわいい彼女を待たせたらダメだよ。」

「ちゃん、それとこれとは・・・」

「いーから。はいっ、帰った、帰った。」

そう言っつて祐也に無理矢理鞆を持たせる。

「じゃあ・・・この埋め合わせは後でするから。」

「はいはい。今度早く上がらせてね。」

「ありがとう。」

「うん、バイバイ。」

祐也を見送る。

再び静けさを取り戻した教室へと一人戻る。

私だけの祐也の声・・・か。

今までそんなこと考えもしなかった。

こんなにも声を聞けることが嬉しいなんて。

こんなにも一緒にいられる時間が嬉しいだなんて。

こんなにも・・・好きだったなんて。

今さら自覚してももう遅いよね。

この想いはどこへ行けばいいのかな。

こんな想いを知らないあなたの変わらぬ優しい態度に私は忘れてしまう。

あなたのことをあきらめると決めたことを。

優しくしないで。

心配なんかしないで。

そう思う反面、それとは反対のことを望んでいる私もいる。

三月の朝の校庭はまだ冷え込む。

「おはよー。」

「おーっす。しーな。」

「あれ？ヒロアキだけ？」

「悪いかな？」

「ううん。」

「寒いものね。皆朝練はしないか。」

「自主性だしな。」

ランニングを終えるとコートへ入る。

「お、祐也だ。」

ヒロアキの目線を追うとそこには祐也と智美の姿があった。

「おはよう。」

「おっす。」

最初に祐也とヒロアキが挨拶を交わす。

「早いな。二人とも。」

今度は祐也の視線が私に移る。

「萌ちゃん、おはよう。」

「お、おはよう。」

「めぐちゃんおはよう。」

「おはよう、ともちゃん。」

挨拶が済むと二人はランニングへ行った。

コートにはヒロアキが入った。

「しーなさあ。」

「うん？」

「大丈夫なのか？」

「なにが？」

壁打ちで練習をしているとヒロアキが話しかけてきた。

「なにつて・・・祐也の事。」

「うん・・・」

「顔、やばいぞ。」

「そ、そうかな？」

「泣きそうな顔してる。」

「そ、そっかあ。」

思わずボールを打つ手かとまる。

「バレバレかな？」

「オレにはな。」

「やっぱり？」

ヒロアキは手を止めることなく返ってくる球を打ち返し続けている。

「まあ、祐也本人にはバレてないと思うぞ。」

「それならいいのだけど。」

次の球は大きく反れて後ろへ転がった。

「でもまあ、祐也の前では泣くなよ。」

「うん。がんばる。」

とはいうものの。

実際問題、祐也とは同じクラス、同じ部活、おまけに同じ委員会と見事に一緒にいる時間が多いのが現状である。

祐也に彼女が出来たのは冬休みが明けた頃だった。

以前から彼女、栗原智美との仲の良さは有名だったのだが。
その彼女智美と同じクラス、同じ部活なわけで。

あと一ヶ月・・・

三年のクラス替えて別々のクラスになることを今は祈るばかり。
やっぱり、やりにくさはある。

正直、祐也とクラスが別れるのは寂しいけれどこのままずっと一
緒にいるのもまた辛い。

祐也に彼女ができたと思った直後は、ご飯が喉に通らないほどシ
ョックだった。

たくさん涙を流した。

周りの人からも声をかけてもらった。

大丈夫？

元気を出して。

落ち込まないで。

誰にでもあること。

仕方ないよ。

そう言われて、

ああ、これが失恋なのかなんて思った。

でも・・・

失恋てなに？

好きな人に彼女が出来たから失恋なの？

直接振られたわけでもないのに失恋なの？

失恋てなに？

この想いはどこへ行けばいいの？

「めぐちゃん、プリント提出した？」

「プリント？」

「三年生の選択授業の。」

「ああ、まだだ。」

慌てて引き出しの中からプリントを出す。

「三年でめぐちゃんとクラス別れても寂しくないように選択授業は一緒がいいのねん。」

「ちなっちゃん、嬉しい。」

そう言つと千夏^{ちなつ}と抱き合つた。

「で、めぐちゃん何にする？」

「うゝん、今年は音楽だったからね。変えてみようかな。ちなっちゃんは？」

「そだね、美術なんてどう？」

「美術ね。」

「絵、下手だけど。」

「私も。」

「毎年音楽は大人気だからね。美術は落ち着いて授業できるかもねん。」

「そうだね、美術にしようか。」

「じゃあ、決まりねん。」

「うんうん。」

「じゃあオレも。」

二人の会話にヒロアキが入り込んできた。

「ヒロアキが？」

「美術？」

「なんだよ。悪いか？」

千夏と二人顔を見合わせて笑ってしまった。

「ははは。ヒロアキが。」

「美術。ははは。」

「イメージな〜い。」

「おまえらひでーよ。」

「はははは。」

ちなっちゃん、ヒロアキ、私。

そこにはいつも笑い声があつて、賑やかな日々を過ごしてきた。

ちなっちゃんとヒロアキの二人は小学校から一緒に家も近所の幼稚園。

そんな二人の明るい笑顔にいつも励まされてきた。

でも・・・

ほんとはね、もう一人。

祐也。

二年生の大半はいつもこの四人で過ごしていることが多かった。

昨日見たテレビの話、好きな音楽の話をしたり、部活の帰りに寄り道をして、もんじゃ焼きを食べたりもした。

朝から帰りまでいつも一緒に笑っていた。

もう祐也が戻ってくることはないのかな。

そんな風に思うと、また涙が出そうになる。

友達としてでもいい。

祐也と話しがしたい。

と、思いつつも、いざ二人になると緊張してしまって上手く話せなくなる。

「萌ちゃん、六組戸締りOK。」

「はい。六組OKと。」

祐也とは委員会が一緒。

前期・後期共に生活委員を任された。

主に生徒達の風紀問題や校内整備の確認を行っている。

放課後、全教室の戸締りをチェックするのも任務の一つである。

「最後六組で終わりだな。」

「うん。」

祐也と二人になれるこの時間は、私にとって嬉しい時間のはずなのだが。

今では複雑な想いで心が痛い時間でもある。

知らないのなものな。

祐也は。

私の気持ちなんて。

だから、時々切ないことを言ってくる。

「もうすぐ三年だなんてな。萌ちゃんとクラス別れるの寂しいな。」

「そ、そうだね。」

「あ、今の本心？無理言った？」

「そ、そんなことないよ。」

慌てて首を横に振り否定すると、祐也は笑って言った。

「ならいいのだけだね。俺だけが寂しく思っているのかと思ったよ。」

「と、ともちゃんと同じクラスだといいね。」

言ってしまったから自分で自分を殴りたい衝動に駆られた。
もゝ、何言っているのよ私。
そんな余計な事じゃない。
はあ。どうしよう。

祐也変な風に思ったよね？

「そうだね。そういえば萌ちゃん、三年の選択授業何にしたの？」

「え？あ、美術にしたよ。」

「へえゝ、美術か。」

意外にも祐也はあっさり交わして話題を変えてくれた。
助かった。

六組までの戸締りチェックが終った。

日誌への記入も全て終ると祐也が言った。

「俺も美術にすれば良かったな。」

「えっ？」

「日誌出しとくね。お疲れ。」

そう言うつと鞆を持ち教室を後にした祐也。
祐也の発言の意味はわからなかったけど、
これが祐也との最後の当番だった。

2

校庭の桜が咲いた。
ちやうど見ごろを迎えた頃。

中学三年生になった。

「めぐちゃん！」

「おはよう、ちなっちゃん。」

「めぐちゃ・・・はっ、はっ。」

登校してきたに大きく手を振って走ってきた。

「ちなっちゃん、そんなに息切らして。」

「だってえ。」

「どうだった？」

「んー、残念。やっぱり別れちゃった。」

「そっかあ、残念。」

「めぐちゃん五組、あたし三組。」

「三年五組か。」

「でもめぐちゃんのクラス良いよ。にのと、タケさんと亮ちゃんとかいーっぱい知ってる人いるの。」

「え？にのも一緒？」

「もーえっ！」

「うわぁっと、にの！」

嬉しそうに弾んだ声と共に後ろから頭を撫でられた。

「にのっ！一緒のクラス？」

「おうっ、もえと一緒にのクラスだなんて小学生以来だな。」

「うん！やったあ。」

「あんたいい加減めぐちゃんの呼び方どうにかならないの？」

隣にいた千夏が少し不機嫌そうな表情で話しかけた。

「なんだ、千夏、やきもちか？」

「誰があんたなんかにっ。」

「そっか、そっか。千夏は俺とクラスが離れて寂しいのだよな。」

「寂しくない。」

「じゃあ、千夏も呼び方変えてみるか？二宮英典、ヒデくんと呼んでいいぞ。」

「ばっかじゃないの！」

「まあまあ、ちなっちゃん。にのも。」

二人のやり取りを宥めようと間に入る。

「いいんだよ、俺は昔からもえって呼んでるんだから。なっ、もえ。」

「う、うん。」

「始業式を始めます。各クラス出席番号順に並び待機してください。」

「

放送が入る。

「じゃあ、めぐちゃんまたね。」

「うん、後でね。ちなっちゃん。」

「よし、俺達は五組のところに行こうぜ。」

「うん。あっ！」

「もえ？どうした？」

「私五組って言っても出席番号知らないのだった。見てこなきゃ。」

「なんだ、もえ掲示板まだ見てなかったのか。」

「そうなの。にの先に行つて。」

「おう。」

「めぐなら私の後ろで九番だよ。」

掲示板を見に行こうとしたその時、後ろから懐かしい声が聞こえてきた。

「けいちゃん！」

「おお、恵子も同じクラスだったな。」

「にの、『も』ってなによ？また私と同じクラスじゃ不満？」

「いえ、斉藤恵子さんと三年連続同じクラスで光栄です。」

「よろしい。」

「うわー、けいちゃんと同じクラスだなんて。やったあ。」

「めぐ、久しぶりに遊べるわね。」

「うん！」

始業式が始まった。

長い校長先生の挨拶。

にの、けいちゃん、タケやんに亮ちゃんと、三年五組には小学校の時に仲が良かった友達が揃っていた。

蓮田中学全六組は、蓮田小、蓮田第二小と、二つの小学校の合併。ちなつちゃん、ヒロアキ、祐也は蓮田小出身。

私、にの、けいちゃん、タケやん、亮ちゃんは蓮田第二小の出身なのである。

クラス発表の掲示板を見ていない私は、友達がどこのクラスにいるのかを探した。

あ、ヒロアキ見つけ。

左隣の四組の列に並ぶヒロアキの後姿を発見した。ヒロアキとは二年間一緒のクラスだったが、最後の一年は別々になったか。

と、その隣女子の列に智ちゃんを見つけた。智ちゃんとヒロアキは同じクラスか。

祐也・・・は？

三組に並んでいる祐也を見つける。

ちなつちゃんと同じクラスなのだね。

皆、クラスは別れてしまったけれど、それぞれの三年生がスターとする。

三年の教室は一階になった。

同じく一階にある美術室の前を通った時、思わず足を止めた。

「めぐ？どうかした？」

「あ、ちよつと・・・。」

「何？絵？」

「うん。」

美術室の前の絵が張り替えられているところだった。

「ああ、新しい学年になったしね、張り替えているのか。」

「うん。」

「何？めぐの絵でもあるの？」

「ううん。あれ。」

指差した方を見る恵子。

「なあに？誰の絵？」

「わからないのだけどずっときれいだなって思っていたの。」
「ふん。」

そう言つと萌は絵に近づいて行った。

「なんだ。穂高のか。」

「えっ？」

「ほら、名前書いてあるじゃん。」

恵子に言われて見に行く。

「ほんとだ。穂高・・・」

「あいつの絵が張られていたとは知らなかった。」

「けいちゃん知っているの？穂高って人。」

「うん、去年同じクラスだったよ。」

「そうなんだ。私知らなかった。」

「だろうね。あいつ目立たないから。」

「そうなの？」

「うん。」

「何部の人？」

「さあ？」

「えっ、部活もわからないの？」

「うん、知らない。」

「えー、同じクラスなのに？」

「知らぬものは知らぬ。」

「そうなんだ。」

「あ、めぐ急がないとHR始まるよ。」

「あ、やばいね。」

走って教室へ戻った。

HRでは簡単な自己紹介をした。

三年になったとは言え、全六クラス、一学年にすると約二百人。

うち、三分の二が蓮田小出身、残り三分の一が蓮田第二小出身なので、未だ名前を知らない人もたくさんいる。

「あーあ、松岡君と同じクラスになりたかったな。」

「三年間一度も同じクラスになれないなんて。」

「誰がクラス決めてるんだろねー。」

そんな女子達の会話が聞こえてきた。

確かに。一年に一度のクラス替え。

三度目になるが、不思議なものである。

三年間同じクラスの者、別々の者、一年の時同じで三年でまた同じクラスになった者。

成績？部活動？何をもつてクラスを決めているのかな。

そんな風に思うのは誰でも同じである。

ただ、

三年間一度も同じクラスにならなかった者、部活動も異なり、委員会も異なった者。

そんな廊下ですれ違うだけで顔も名前も知らない者がいる。

そして知り合うことのないまま卒業。

なんて事があるのかもしれない。

そんな事を考えていたら廊下側の窓から声をかけられた。

「タケ呼んで。」

ずばり、顔も名前も知らない人だった。

「タケやん、呼んでるよ。」

「おお。」

竹田のところへ呼びに行くと、二宮とがいた。

「もえは選択授業何にしたの？」

「美術だよ。」
「もえと一緒にだ。やったー！」
「にのも美術？」
「おうっ！」
「亮ちゃんは？」
「俺も美術。タケヤンも美術。」
「うっそ。そんなことあるの？」
「俺も美術だよ。」

驚いた顔をしていると一人の男子が話しかけてきた。

「おお、関君もか。」
「すごいぜ、このクラス美術多いな。」
「もしかして選択授業でクラス決めたのか？」
「にの、それじゃあ選択授業の意味ねーじゃん。」
「それはそうだな。」
「あははは。」

関というクラスメイトはもうすっかり皆に馴染んでいた。
ふと、竹田のいる方を見る。
さつき廊下で竹田を呼んだ男子と二人、話していた。
そこには私の知らないタケヤンがいた。
男の子同士、何を話しているのかな。
なんだか楽しそう。
タケヤンも小学生の時とは変わったのだな。
そんな当たり前のことを思ってしまった。

三年生か。
どんな一年になるのだろう。
最高学年になり、新入生が入ってくる。

行事では修学旅行、夏季大会、引退試合。
そして夏休みには受験生になる。
良い一年になるといいな。

その前に、クラスの皆の顔と名前、覚えなきゃね。

翌日のHRでは前期の係り決めを行った。

学級委員と生活委員は推薦で数名の名前が挙がった。

去年生活委員をやっていたというだけで私の名前も挙がっていた。

「めぐは？このまま生活委員やるの？」

「うーん、やるのは良いのだけれどね。違う委員会もやってみたい
気もする。けいちゃんは？」

前の席の恵子が後ろを振り返って話しかけてきた。

「私は修学旅行委員やってみたいな。」

「いいね、けいちゃんに合っている。」

「関君は？」

恵子は隣の関に話しかけた。

「俺は体育委員がいいな。椎名さんは去年生活委員だったの？」

「うん、そうなの。」

五十音順の出席番号順に並んだ座席には、斉藤恵子、竹田雅史と
顔見知りが揃っていた。

恵子の隣の関とも話すようになった。

「椎名さんて真面目そうだね。」

「そうかな？」

「うん、そう見えるけど？」

「めぐは意外とおっちょこちょいの忘れ屋さんよ。」

「けいちゃん。」

「方向音痴ですぐ迷子になるし。」

「そんなことないもん。」

「去年も教科書やら辞書やら何度貸したことから。」

「けいちゃん、貸し借りはお互い様だよ。」

「あはは。でも本当の事でしょ。」

「もぉーけいちゃん。」

「うそうそ、ごめんって。」

「ははは。椎名さんって面白いのだね。」

「でしょ、関君わかる人ね。」

「けいちゃん。」

からかって楽しんでいる。

そんな二人を笑顔で見ている関。

結局、その日の係り決めで私は生活委員になった。

放課後、皆それぞれ部活へ行く準備をしていた。

「関君、」

「四時からミーティングになったから。」

「おお、わかったー。」

廊下から関を呼んだ男子の顔には見覚えがあった。
確か……

昨日竹田を呼んでいた男子と同じだった。

そう思っ て見て いると、その男子のところに竹田が向かった。
二人で話している。
やっぱりそうだ。
昨日の男子だった。
名前、知らないな。

3

新学期が始まり三週間がたった。
三年生になり、最高学年になり、部活も、委員会でも任されるこ
とが多くなった。

去年までは祐也と出席していた委員会も、新しくメンバーががら
りと変わっている。

部活動では新入生の勧誘をして、新入部員が増えた。
それぞれの場で、新しい出会いがはじまり、人間関係が築かれて
いく。

新しいクラスにもだいぶ慣れた。

三年五組のクラスメイト全員の顔と名前を覚えた。

この時期、新しい環境にソワソワする。

ワクワク期待している気持ちと、今までと変わってしまう寂しさ
のような、そんな感情が入り混じってなんだか落ち着かない。

変わることは良いこと？

新しいものを取り入れて、古いものはさよなら。それでは寂しい
から、古いものの上に新しいものを築いていけたらいいな。

思い出は、積み重ねていく方が良い。

良いことも、そうでないことも色々あったけれど、新しい一年が
動き出している。

そんな環境の変化があり、この時期、変わることには慣れはじめて

いた。

でも、変わらないものもあつた。

「萌ちゃん。」

「祐也。」

「帰るところ？」

「うん。」

「途中まで一緒してもいい？」

「え？ともちゃんは？」

「ははは。今日は委員会だから。」

「そ、そうなんだ。」

突然話しかけられてびっくりした。

驚きからとはいえ、また余計な事を言ってしまった自分が情けない。

「久しぶりだね、萌ちゃんと帰るの。」

「そ、そうだね。」

「クラスも別れちゃったしな。」

「うん。」

そういえば、本当に久しぶり。

こうして祐也と話すのも。

新学期が始まってバタバタしていた。

部活は一緒といえども話す時間はなかった。

「萌ちゃん生活委員になったのだね。」

「うん。これで三期連続。」

そういえば、二年の終わりに祐也は生徒会に入った。

転校が決まった副会長の代わりを、祐也が務めることになった。

「でも良かったよ。萌ちゃんが生活委員で。」

「え？」

「生徒会と生活委員は同じ活動があるからね。」

そう言って笑顔を見せる祐也。

変わらない祐也の笑顔。

やっぱり・・・まだ祐也のこと好きだなんて思ってしまう。

でも・・・

複雑な気持ちで、祐也から目を逸らしてしまう。

「祐也、生徒会は忙しい？」

「そうでもないよ。なにせ優秀な生徒会長様がいるからね。」

「それって僕のことかな？」

「聡、^{そう}いるなら最初から出てこいよ。」

後ろから現れたのは生徒会長、^{まつおかそついち}松岡聡一。

「二人の邪魔をしてはいけないと思ってね。」

「後ろ歩いていたのバレバレだったぞ。」

「やあ。椎名さん。」

「こ、こんにちは。」

「あれ？、萌ちゃんと知り合いだった？」

「まあね。祐也の知らないところで椎名さんと出会っていたのさ。」

「なんだ？それ。」

「あのね、祐也実は」

説明しようとしたその時、

「危ないっ！！！」

シュツとものすごい速さで何かが目の前を通過していった。

祐也が手を出してかばってくれなかったら、そのまま歩いていた私に当たっていたに違いない。

そう考えると今になって恐怖感が襲ってきた。体が震えている。

「萌ちゃん、大丈夫？」

「椎名さん、怪我は？」

二人が心配そうに顔を覗きこむ。

「だ、大丈夫。」

「なんでこんな所にまで野球の球が飛んでくるんだ？」

「学校からは離れているのにな。」

「まあ、怪我がなくてよかったよ。」

「そうだな。」

そうかもしれないけど、良くもないかもしれないよ。

ゆ、祐也の、

てっ、手が・・・

か、肩に・・・

突然飛んできたボールから私を庇ってくれた祐也の手は、背中を回して肩に触れていた。

勿論、とっさの判断。

祐也にとつては、助けてくれようとして伸ばしただけの手。でも・・・

私にとつては、温かくて、忘れられない温もり。

祐也に触れられたところが熱いよ。

久しぶりに話した祐也との時間も、最初の緊張とは違う意味で印象の深い日となった。

選択授業が始まった。

二週に一度、選択授業が設けられている。

音楽、書道、美術、家庭科、英会話、体操、社会調査、パソコン、ボランティアから選ぶことになっている。

一選択が二十名前後の定員での活動となる。
同学年の生徒がクラスに関係なく少人数で同じ授業を行う機会となっている。

美術に集まったのは十六人。そのうちの半数が顔見知りだった。
美術といっても、絵を描くだけでなく、彫刻や版画、イラストや漫画作成等幅広く自分で課題を決めて取り組んで良い時間となっている。

もちろん成績に反映されないこの時間は、生徒一人一人がのびのびと取り組めるといふ長所がある。

いつもの美術室も少人数で使うと広い空間へと変わる。

「では、このプリントをまわしてください。」

担当の先生からプリントが渡される。

適当に座っている生徒達がプリントを受け取ると他の人へと順次渡していく。

萌の前にプリントの束が差し出された。

受け取るうとした時、

「あっ！」

「ご、ごめんなさい。」

手を滑らせてプリントを落してしまった。

「なにやってんだよー。」

「めぐちゃん大丈夫？」

近くにいた千夏が声をかける。

「ごめんね、拾う」

落ちたプリントを拾い集めてくれた男子がいた。

「あ、ありがとう。」

お礼を言うがその人は何も言わずに席に戻っていった。
顔を見た。

「あれ？」

見たことのある顔だった。

そう、いつも竹田のところへ来ている・・・

「しーな、プリント。」

「あ、ごめん、今配る。」

「しーなはおっちょこちよいだな。」

ヒロアキが笑う。

プリントを読み終えると皆それぞれの課題に取り組み始めた。

外へスケッチに出掛ける者、粘土を捏ね始める者、絵の具を出す者、バケツに水を用意する者。

私は外へ足を伸ばすことにした。

「美術選んで良かったねん。外は気持ちいい。」

「サボれるな、この授業。」

後ろから千夏とヒロアキがついて来ていた。

「二人とも・・・」

違う意味で捉えてる二人にかける言葉、それは飲み込むことにした。

だって・・・

中庭を、足取り軽く走ったり、回ったり、振り返るとそこには千夏の思いつ切りの笑顔。

そこにいるのが自然なヒロアキの存在。

こうして三人でいれる時間も久しぶり。

今年クラスが別れて、唯一、三人で過ごせる時間となった選択授業。

なんだか嬉しくて。

新しいはじまりの多い時期だけど、こうして変わらず積み重ねていけるもの、これからも大事にしていきたい。

放課後。

教室にあの人が来た。

今度は直接竹田の席へ向かっていた。

そばにいた二宮に話しかける。

「ねえ、にの。」

「ん？」

「タケやんのところにいる、あの人、誰？」

「ああ、晃君？」

「あきらって言うんだ。」

「もえ、どうかした？」

「ううん。なんでもない。」

「なんだー、もえ、ひよつとして晃君に・・・」

「ち、違うよー、そんなんじゃないって。」

ニヤニヤしながらからかってくる二宮。

「なんだよー、そうならそうと俺には言えよなー。」

「だから違うってば。」

「なにが違うの？」

そう言って話しかけてきたのは松岡だった。

「椎名さん、ちょっといいかな。」

「はい。」

「にの、違うからね。」

「はいはい。いってらっしゃーい。」

まだ笑顔で楽しそうにしている二宮に再度告げながら松岡と教室を出た。

「これ、僕の分提出してもらっていいかな。」

一冊の大学ノートを受け取る。

「今日生徒会で遅くなりそうなんだ。お願いできる？」

「あ、はい。わかりました。」

「ありがとう。助かるよ。」

「はい。」

「椎名さん、前から言おうと思っていただけ・・・」

「松岡君、ちよつといい？」

「うん、今行くね。」

教室の中から女子に呼ばれた松岡は、笑顔で応えていた。

「じゃあ、椎名さんよろしくね。」

「はい。」

生徒会長の松岡くん。

もちろん成績も優秀で、いつも順位は上位。

一年の時からずっと学級委員を務め、人脈も厚く、おまけにルックスもかっこいいから女子からも大人気。

そんな松岡くんと話す時は当然緊張してしまう。

憧れだし、尊敬に値する人。

松岡の後姿を見つめながらそう思った。

「めーぐつ。」

「けいちゃん。」

「見たわよー。なあに？それ。」

教室へ戻ると恵子がノートを指差した。

「あ、これは・・・その・・・」

「あんたまさか松岡と？」

「ち、違うよー!」

慌てて否定するが声が大きかったのかクラスの数人がこつちを見ていた。

「違うのよ。これはね、」

今度は小さな声で話す。

「塾の宿題なの。今日松岡くん遅くなるから代わりに私が。」

「めぐ、松岡と同じ塾なの？」

「けいちゃん声大きい。」

「あ、ごめん。」

慌ててが声を潜める。

「めぐの塾、松岡と一緒にだった？」

「ううん、最初は違ったよ。」

「いつから？」

「あのね、この間の春休みから松岡くんが入ってきたの。」

「なるほど。」

「それでね、松岡くん、私と同じ塾に通っていること、皆には内緒にしておいてって。」

「そっか。」

「だからけいちゃん、他の人に話さないでね。」

「話さないわよ。話せるわけ無いじゃない。それより、あんた大丈夫なの？」

「何が？」

「何がって・・・」

「ん？」

きょとんとした表情の萌に、恵子が再び小声で話し始めた。

「松岡ってさ、モテるじゃない。」

「うんうん。」

「熱狂的なファンがいるらしく松岡としゃべる女子には目をつけているらしいのよ。」

「えーっ！」

「けっこう有名な話よ。知らなかった？」

「知らなかった。」

「あたし奴とは去年同じクラスだったからそういう子、何人か見たのよ。」

「ほんとなの？」

「まあね。」

「えーっ、けいちゃんどうしよう。」

「でも今まで松岡とは仲良くなかったのだし、めぐはノーマークのはず。今は大丈夫だと思うよ。」

「これから？」

「なるべく・・・学校で話すのは避けたら？」

「うん、そうする。」

「女の恨みは怖いからね。」

「けいちゃん。」

「はいはい。冗談は抜きに、気をつけてね。」

「うん。」

知らなかった。

松岡くんと話すだけでそんなことがあるだなんて。

偶然、そう偶然なの。松岡くんが塾に入ってきたのは。

元々、学区外の塾に通っていた。

勿論、うちの中学から通っているのは私だけ。

そんなところに松岡くんが入ってくるなんて思いもしなかった。

でも・・・
気をつけなきゃね。
学校ではあまり話さないようにしよう。

4

五月になった。
ゴールデンウィーク明けに中間試験。
試験明けには部活再開。
五月から新入部員を迎えた。
汗ばむ陽気となった日。
今日は午前で授業が終る。
午後からは部活がある。
久しぶりに千夏とヒロアキと一緒に弁当を食べていた。

「やっぱめぐちゃんと食べるお昼はおいしいねん。」
「そうかあ？別に味は変わらねーぞ。」
「ヒロアキは素直じゃないのねん。」
「どーという意味だよ、北川。」
「はいはい、二人とも、仲良く食べようよ。」

相変わらずの二人のやりとりに間に入る。
でも、三人で食べるお昼はやっぱり嬉しい。
去年まで同じクラスだったから三人で食べるお昼は当たり前だったけどね。
皆クラスが別れたけれど、こうして時々一緒にお昼を過ごしている。

そんな事を思っていると竹田達が教室に入ってきた。

あの人も一緒だ。

「最近、よく会うよね。」

「誰と？」

「あの人。タケさんと一緒にいる・・・」

「ああ、晃君？」

「あれ？ヒロアキ知り合い？」

「知り合いって同じクラスだぞ。」

「えっ？そうなの？四組だったの？」

「ああ。」

「そうだったんだー。」

「めぐちゃん、知らなかったの？」

「うん。」

「晃君を？」

「うん。」

「うそお。」

「ほんと。名前を知ったのもつい最近。」

「あら。」

「三年になつてからよく見る顔だなーとは思っていたのだけど。」

「めぐちゃん、マジですか？」

「まじですよ？」

「めぐちゃん前からよく会ってたじゃない。」

「えっ？」

「あんな風に、去年めぐちゃんがタケさんやにのいる三組に行く
と晃君いつもいたよ。」

「ええっ？」

千夏の話に驚いた。

「タケさんとにのと同じクラスだったの？」

「そうだよん。」

「ほえ。思い出せない。」

「今までめぐちゃんが晃君という人を知らなかったからそう思うのかもね。」

あ・・・そっか。

今ちなっちゃんに言われてわかった。

私が今まで知らなかったんだ。

私が気づいていなかっただけで、きっと去年、ううん、中学生になつてからもう何回も、何十回も会つたりしていたのだ。

タケやんやにのしか見ていなかった私。

周りを見ようとしていなかった私。

そんな自分がなんだか恥ずかしくなった。

あの人だけに限ったことではない。

もっと周りを見て、色々な人とかかわりながら過ごしていけたらいいな。

中学三年生。今年で卒業するのだから。

この一年はしっかり周りを見てたくさん成長していきたいな。そんな風に思った。

翌朝だった。

下駄箱で、なんとあの人に会った。

「おはよう。」

思い切って声をかけてみた。

が・・・

なんとその人はこっちを見ただけで何も言わずに行ってしまった。せつかく話しかけたのに。無視とは。

私がにのやタケさんと話している時にいたのなら、あの人だって私の事を知っているに違いない。

だからせめて挨拶くらいは。話すきっかけになるかもしれない。そう思った私が間違っていたのだろうか。

なんだか腹が立ってきた。

「おはよう、椎名さん。」

「おはよう、関くん。」

教室に入ると皆登校していた。

「椎名さん昨日のお笑いリーグ見た？」

「うん、見たよ。」

「あれ、面白かったよな！。俺後半戦ずっと笑い止らなかった。」

「うん、うん。」

関くんとはだいぶおしゃべりをするようになった。

色々な話題を持ちかけてくれて、笑顔で話してくれて、話しやすい。

いい人だなって思う。

「めぐ、おはよ。」

「けいちゃん、おはよー。」

「掲示板見た？」

「ううん。」

「中間テストの結果、出ていたよ。見に行く？」

「うん、行く！」

と一緒に教室を出た。

先日行われた中間テスト、成績上位三十名の名前が掲示板に貼り出されていた。

「めぐ、すつごーい十一位！」

「頑張りました。」

「一位はやっぱり松岡か。」

「すごいよね。ここのとこずっと一位を取り続けているよね。」

「化け物だな。」

掲示板の前には大勢の生徒が集まっていた。

自分の六つ後ろの順位に祐也の名前を見つける。

祐也、順位少し落したかな。

生徒会が忙しいのかな？

去年はよく祐也と二人でこの掲示板を見ていたな。

順位を競っていて。勝った方がジュースをおごる。なんてしていた頃もあったな。

なんだか懐かしい。

そんなことを思い出しながら順位表を見ると、ある名前に目が留まった。

「あれ？」

「どうした？」

「けいちゃん、あそこ・・・」

「うん？」

「五位の人・・・」

「五位？」

掲示板に目を凝らす。

「ああ、穂高ね。」

「けいちゃん、穂高晃って・・・」

「穂高がどうかした？」

「前に美術の絵で。」

「絵？」

「ほら、始業式の日、美術室の前で見た絵。」

「ええ？思い出せないなあ。そんなことあったっけ？」

「うん・・・」

思い出そうと考えている恵子。

穂高晃。

印象に残っているあの絵を描いた人。

こんなところで名前を見つけるだなんて。

もしかして今まででもずっと名前、載っていたのかな。

「ねえ、けいちゃん。」

「思い出さないわよ。」

「うん、そうじゃなくて、けいちゃん穂高って人と去年同じクラスだったよね。」

「そうだったっけ？」

「言っていたよ。」

「そうだったかな、そうだったような、そうでないような。」

「まあ、けいちゃん。」

「はいはい、ごめんて。でもね、穂高って忘れてしまっくらい目立たない奴だったのよ。」

「穂高って人頭いいの？」

「そうね、そういえば・・・良かったかもね。」

「かも？けいちゃん。」

「だって穂高に興味ないし、思い出せないのだから仕方ないでしょ。」

半ば投げやりになってくる恵子の答え。

「なあに？めぐ、まさか穂高に興味あり？」

「そんなんじゃ・・・」

「ん？ん？」

面白そうにからかってくる。

いつものように慌てて反論してくるのを楽しみにしている。

「興味ある。」

「!?!」

が、予想に反し返ってきた言葉に絶句していた。
自分でも驚いた。

なぜ、興味あるだなんて言ったのか。

恵子は苦笑いで、

「今度いたら教えるから」と言っていたが。

最近ね、自分の周りをよく見ようと思ったから。

だからかな。

だから。

名前も顔も知らない人。

名前は知っている人。

あの素敵な絵を描いた人。

気になっているのかもしれない。

生活委員の当番がまわってきた。
同じく生活委員になった猪原と全クラスの戸締りチェックをしていた。

「五組戸締りOK。」

「はい、OK。」

日誌に確認の印を記入していた。
すると唐突に猪原が話しかけてきた。

「椎名さんてさ、」

「うん？」

「聡君の事好きなの？」

「ええっ？」

驚いて大きな声を出してしまった。

放課後の教室に響き渡る。

「なに？猪原くん、突然・・・」

「いや、そんな噂が流れてるからさ。聞いてみようと思って。」

「う、噂?!」

「そ。噂。」

「そう。」

「で？本当なの？」

「ち、違うよ。」

「否定するところがまた怪しい。」

「もう、猪原くん、違うつてば。誰がそんな事言ったの？」

「噂だからね。」

「だれ？」

「だから、ただの噂。はい、六組戸締りOK。」
「もー。」

「悪いけど椎名さん、日誌の提出お願いしてもいい？俺部活急がないとまずいんだ。」

「いいけど。」

「サンキュー。次は俺がやるから。じゃあお疲れ。」
「お疲れさま。」

そう言つと猪原は行つてしまった。

日誌を生徒会室へ提出しに廊下を歩いた。

噂かあ。

私が松岡くんの事を好きだなんて。

誰がそんな噂を流したのだろう。

そんな噂、もし・・・

松岡くんのファンの子達に知られたら・・・

”バシヤッ“

「ひゃあ！」

突然、体に冷たさを感じた。

何？

なにこれ？

水？

渡り廊下を歩いていたら突然上から降ってきた水。

間違えて誰かこぼしたのかな。

上を見るが誰もいない。

それなら一言謝ってくればいいのに。

悪いと思つたから逃げたのか？

そんな事を考えているうちに生徒会室の前まで来た。
少し、緊張する。

だって、このドアの向こうには祐也がいるのだから。
大丈夫。日誌を出すだけ。

いつも通り、日誌を出すだけ。

「失礼します。」

ドアを開けると祐也の姿が見えた。

「萌ちゃん。ご苦労さま・・・ど、どうしたの？」
「えっ？」

祐也の言葉に自分が驚いた。

「どうした？その頭・・・」

「ああ、その廊下で上から水が。」

「水がって・・・」

「誤って撒けちゃったのじゃないかな。」

「撒けるか？普通。」

「大丈夫。日誌はこの通り濡れてないから。」

「別に日誌なんてどうでもいいよ。それより萌ちゃんの方が心配だ。」

「

そう言って祐也がタオルをかけてくれた。

髪に・・・

祐也の手が私の髪に触れて。

ドキドキした。

ドキドキして、とまらなかった。

心臓の音が大きくて、祐也に聞こえてしまうのではないかと。
でも・・・

優しくしてはダメだよ。
優しくしないで。

でないと私、まだあなたの事が・・・

「萌ちゃんてさあ。」

席に戻った祐也が言った。

「な、なに？」

「好きな奴とかいるの？」

「えっ？」

突然の事に心臓を打つ音が速くなった。

「な、何？いきなり。」

「いや。いるのかなって思って聞いてみた。」

ど、どうしよう。

こんな質問されるだなんて。

思ってもみなかった。

いないって言おうか。

それとも・・・

笑って、

「祐也の事が好きだったんだよー」って言うちやおうか。

でも・・・

「い、いないよ。今はいない。」

「今はってことは前はいたの？」

「う・・・」

言葉に詰まってしまった。

まさか自分の発言の裏を取られるとは。

「いたの？」

「う、うん。」

苦し紛れに答えた。

すると、祐也は何も言わずに日誌の確認を始めた。

そんな祐也を見て、私も借りたタオルを元に戻した。
改めて祐也を見る。

日誌に目を通している祐也。

久しぶりに見る祐也の横顔は・・・

なんだか私の知らない顔をしていた。

日誌の確認が終り、生徒会室を出ようとした時、祐也が言った。

「そいつは幸せ者だな。ちゃんに好かれているだなんて。」

そいつはおまえの事だぞ。

なーんてね。

そう言えたら良かったのに。

好きだったよ。

そう言えたら良かったのに。

あなたの事が・・・好きでした。

あ、あれ？

やだな、涙出てきた。

生徒会室から教室へ戻る途中、いつの間にか目から涙が落ちていた。

今でも祐也の事、想っている。

嫌いになんかなれない。

あきらめることなんてできない。

そんな自分が情けなくて、悔しくて。

祐也に気がつかれないようにって、泣かないように我慢して。

必死に隠そうとしていた。

でもね、

隠すことが大事なの？

最近、そう思うようになってきたんだ。

「おい。」

「おいっ。」

教室で一人机に顔を伏せていた。

泣き顔のまま部活にはいけない。

そう思っただけだった。

「おい。」

誰かに呼ばれている。

顔をあげた。

「椎名。」

“ガタンッ”

驚いて立ち上がると、勢いで椅子を倒してしまった。

顔を上げた目の前にいたのはなんとあの人だったから。

「な、なに？」

「いや。」

「何か用？」

「べつに。」

「べつにつて・・・」

呼んだのはあなたでしょ。

そう言いたいところだったが、そんな元気は私に残されていなかった。

あ。

泣き顔、見られたかな。

慌ててうつむいた。

すると何も言わずに立ち去ろうとしたので、

「ちょっと、あきらくん。」

思わず声をかけてしまった。

立ち止まり振り返った。

「あきらくん、だよな？」

「そうだけど、晃くんって・・・」

そういえば、この人さつき私の事「椎名」って呼んだ。

やっぱり知っていたのか。私の名前。

私の事。

それなのにこの間朝挨拶を無視するだなんて。

「だって私あなたの苗字知らないもの。皆があきらくんて呼んでい
るから・・・」

「穂高。」

「えっ？」

「穂高晃。」

う、うそお。

今、なんて？

ま、待て。

よく考えるんだ。

穂高・・・晃。

私はしばらく頭の中が混乱していた。

2・予感

穂高 晃。

ほだかあきら。

あの絵を描いた人。

タケやんの友達。

けいちゃんと元同じクラス。

成績上位。

選択授業の美術が同じ。

関くんと同じ部活動。

ヒロアキと同じ四組。

最近よく顔を合わせた人。

挨拶を無視した人。

二ヶ月足らずで集まった彼の情報。
整理していた私。

ああ。

なんであの人が穂高晃なのだろう。
まさかあの人が穂高晃だったとは。
なぜにあの人が穂高晃だったのか。

「めーぐっ」

「けいちゃん。」

「何考えてるの？」

「べつに・・・」

「うーそ。その顔は考えている顔よ。」

「さすがけいちゃん。長い付き合いなだけある。」

「さあ、話さない、めぐ。奈良まで来て、何を考えているの？」

そう、今は修学旅行で奈良へ来ている。

二泊三日の奈良・京都旅行。

初日の今日は五重塔で有名な興福寺や東大寺を見学。

各クラスの集合写真を撮り終え、今は自由行動で奈良公園へ来ている。

「穂高晃。」

「穂高？」

「うん。」

「穂高がどうかしたの？」

「穂高晃だったの。」

「そりゃそうでしょ。めぐ、頭大丈夫？」

「けいちゃん。」

「はいはい、ごめんて。」

恵子は萌をからかうのが楽しくて仕方ない。

「で、穂高がどうしたの？」

「なんかしっくりいかないの。」

「あら。どの辺が？」

「穂高晃はあの絵を描くイメージじゃないの。」

「絵？めぐまだ絵の話しているの？」

「だって。すごく素敵な絵だったのだから。」

少々ふてくされ気味な萌に、やれやれといった表情の恵子。

「もえー、恵子、写真撮ろっぜー。」

「ほら、めぐ、行こっ！」

二宮に呼ばれ、そこで会話は終った。

「鹿だ！鹿と一緒に写真撮るぞ！」

「にのゝそれ難しくない？」

「恵子 行けー！チャレンジ！」

「無茶だよ。」

「もえも！笑って笑って！」

「撮るぞ。」

「めぐ、ちゃんと笑ってよ。」

「ハイ、チーズ！」

「恵子ナイスショットが撮れたぞっ！」

「カメラマンがにのじゃあ、期待は出来ないけどね。」

「いやいや、鹿さんも恵子の威圧感に撮影を許してくれたよ。」

「なんか言った？にの。」

「いえいえ、恵子さんすばらしいですって。」

「もーにの！」

鹿とはしゃぐ二宮と恵子を見ると、なんだか悩んでいた自分が小さく思えた。

せつかくの修学旅行に来ているのだから、楽しもう。

中学最後の旅行。

この旅行が終れば夏には受験生になる。

この時期、皆と過ごせるこの三日間を楽しい時間にしないとね。

写真を撮って、お土産を買って、美味しいものを食べて、たくさん

思い出作らなきゃ。

旅館に戻り、夕食が終ると温泉に入った。

「やっぱ温泉は気持ち良いね。」

「いっぱい歩いて疲れた。」

「よく食べたしね。」

「あ、次ドライヤー貸して。」

「ほいつ。」

「あ、八時までだっけ、私達。」

「そうそう。」

「そろそろ交代の時間だね。」

クラスごとに入浴時間が決まっていた。

皆で入る温泉もゆったりしていて気持ち良かった。

「お風呂上りはやっぱりジュースよね。」

「買って帰ろう。」

「じゃあ、先に自販機行っているね。」

「あ、私も行く。」

「めぐは髪乾かしてからおいでよ。」

「めぐちゃん髪長いものね。風邪引かないでね。」

「ん・・・でも・・・」

「大丈夫よ、ちゃんとめぐの分も買っておくから。」

「めぐちゃんは何飲む？」

「オレンジジュース。」

「了解！」

「じゃあね、先に部屋戻っているから。」

そういつと恵子を含む同じ部屋の女子達が風呂場を後にした。

慌てて髪を拭いて準備をした。

「あれ？」

おかしいな。

やっぱりさっきと同じところに出た。

こっちから来たから・・・

“ドンッ”

「おっと。」

廊下を曲がったところで人とぶつかった。

「ご、ごめんなさい。」

「椎名さん。大丈夫？」

慌てて謝り、顔をあげるとなんとぶつかった相手は松岡だった。

「は、はい。ごめんなさい。」

「強く当たったよな、腕の辺り平気？」

そういうと、松岡は萌の右腕を手に取った。

「大丈夫かな、後から赤くなったりしないといいけど。」

「い、いえ。全然平気です。」

お風呂上り、半そでハーフパンツ姿などろを見られるのはなんだか恥ずかしくて顔が上げれない。

ただでさえ、松岡と話すとなると緊張する。

「平気なら良かった。」

笑顔を見せる松岡。

「椎名さんどこに行くの？」

「えっと、あの・・・その・・・」
「うん？」

「実は・・・部屋に戻りたいのだけど場所が・・・」

「え？部屋？」

「は、はい。」

「それなら、あっちの階段を使わないと行けないよ。風呂場は別館だけど、宿泊部屋は本館だから。」

「え、あ。そうだったのか。」

「ははは。紛らわしいよね。」

「い、いえ。ありがとうございました。」

「いーえ。気をつけてね。」

「はい。」

笑顔で手を振る松岡に見送られ、本館への階段を急いだ。

は、恥ずかしい。

修学旅行に来てまで迷うだなんて。

しかも見られたのがあの松岡くんなんて。

呆れただろうな。

恥ずかしいところ見せてしまったな。

あ。

そっといえば、松岡くんに腕触られてたっけ。

太いって思われただろうな・・・

ガン。

利き腕の右だったし、テニスでついた筋肉あるし、って言い訳してももう遅いか。

部屋に戻ると同室の女子が全員いた。

「あ、めぐちゃん、遅かったじゃない。」

「めぐ、まさか迷ったりしてないよね？」

恵子の鋭いチェックが入る。

「だ、大丈夫だよ。」

「迷う？」

「めぐは方向音痴だからね。小学校の時の旅行も宴会場から部屋に戻れずに迷ってたの。」

「えー、めぐちゃんが？」

「うそー、旅館で？」

「け、けいちゃん。」

「ははは、めぐちゃんて面白いのね。」

「明日の班別行動もはぐれないでよ。」

「けいちゃん、大丈夫だってば。」

恵子の話にも皆も笑っていた。

小学校の時の恥ずかしい話しに穴があったら入りたかった。

「そういえばめぐ、明日の班別行動で使うガイドブックは？」

「あつ！にのに貸したままだ。」

「ほら、もうおっちょこちょい。」

「けいちゃん、どうしよう。」

「どうしようじゃないわよ。取ってきなよ、まだ消灯時間まで時間あるし。」

「ええっ？一人で？」

「そうよ。行ってこれるでしょ。」

「でも・・・」

「それともまた迷う？」

「ははは。けいちゃんめぐちゃんには厳しいのね。」

二人の会話を聞いた周りがまた笑っていた。

「い、行けるもん。」

「よしつ、じゃあ行つて来い。」

「わ、わかった。」

「じゃあめぐが迷う方にジューズ一本！」

「え、じゃあ、私帰つてこれる方にポテトチップ一袋！」

「私は、迷う方にポッキー一箱！」

「もー、みんなまでひといよあ。」

「ははは。いつてらっしやーい。」

同室の女子達に見送られ、部屋を出た。

別館と本館の階段、もう間違えないもんね。

階段を上っていると、前から降りてきた人と目が合った。

「あ。」

思わず口に出してしまった、あ。

飲み込めばよかった。

「なに？」

「い、いえ。別に。」

穂高晃だった。

相変わらず無表情で冷たい態度。
その場を去ろうと階段を進んだ。

「どこ行くんのだ？」

意外にも呼び止められた。

「に、にののところ。」

「そっちじゃないぞ。」

「えっ？」

「上は自販機しかないぜ。にのの部屋ならこっち。」

指を指された方向は、まさに今通り過ぎて来た所だった。

「じ、ジュース買ってから行こうと思ったの。」

なんだか負けを認めるのが悔しくて変な意地を張ってしまった。
不自然な行動だったかもしれない。

自動販売機の前に立つとあることに気がついた。
そしてなぜか穂高晃もいた。

「買わないのか？」

「・・・コーヒーと炭酸飲めないの。」

こんな状況でさえ自動販売機は味方してくれなかった。ジュース類は全て売り切れのランプが点灯していたのだった。
ついてないな。

歩き出した穂高晃に、仕方なくついていくことにした。
ま、迷ったわけではないもの。

上に行って部屋がなければ下に降りたもの。

自分でにのの部屋まで行けたもの。

穂高晃がいなくても、自分で行けたもの。

なんだか悔しさを覚えた。

「にーのっ。」

「おっ、もえ。どうした？あれ、晃君も一緒？」

「た、たまたま会ったのよ。そこで。」

「そうか。まあ、入って、入って。」

慌てて言った言葉に多少無理があったが、二宮は笑顔で迎えてくれた。

ちらつと横目で穂高晃を見る。

すでに部屋の奥へ入って、竹田や、関と話し込んでいた。

「もえ、よく一人で来れたな。迷わなかったか？」

「こ、来れるわよ。」

「え？旅館で迷うの？」

不思議そうに関が聞いてきた。

「もえは昔からよく迷う奴だな。」

「にーのっ。」

「そうそう、小学校の時の修学旅行でも迷っていたよな。」

「亮ちゃん！」

「ほんとのことだろー。」

「へー、椎名さんてすっかりしていると思ったのに。」

「関くん、もえは意外とおっちょこちよいだぞ。」

「もー、二人とも変なこと言っのやめて。」

つい先ほど、女子の部屋でも同じ会話が起こっていたことを思い出す。

はあ。

これでは私が皆から変な風に思われてしまうではないか。

せつかくの修学旅行に来ているのに、なんだか恥をさらしにきている気がする。

「にのに預けたガイドブックを取りに来たの。」

「おお、そうだったな、今出す。」

二宮が荷物を取りに行った。

再び穂高晃を見る。

さっきの会話で皆笑っていたのに、穂高晃だけは笑っていなかった。

表情、変わらない。

どうしたら変わるのかな。

笑ったり、呆れたり、怒ったり、ふざけたり、しないのかな。変な人。

でも素敵な絵を描く人なのだね。信じられないな。

穂高晃がこんな人だったなんて。やっぱりなんだか違うのだよな。

「穂高くん。」

「穂高。」

「晃くん。」

「晃……さん……」

声に出してみたもののやっぱり何かが違う。

もはや穂高晃とは分けてしまいたいというか……

「椎名さん、どうしたの？」

不思議そうに隣にいた関が声をかけた。

「呼び方。」

「呼び方？」

「そう・・・あ！あきちゃん。」

発言と共に穂高晃に向かって指をさした。

「あきちゃんにしよう。」

「なんだよ、あきちゃんって。」

それまで黙っていた穂高晃が口を開いた。

「私がつけたの。今からあきちゃんて呼ぶことにしたの。」

「ははは、あきちゃんか。いいね、それ。椎名さん良いよ！」

「あきちゃんね。うん、いいんじゃない。」

関と亮が笑いながら言っている。

当の本人は少し呆れた表情になっていた。

あ、変わった。

この人表情変えるんだ。

でも・・・

すぐにまたいつもの無表情に変わっていた。

「ほら、もえガイドブック。」

「ありがとう。」

二宮からガイドブックを受け取った。

「あ、もえ髪濡れたまま。ちゃんと乾かしたのか？」

そう言つと、持っていたタオルを萌の頭にのせ、拭きはじめる二宮。

その様子を見ていた、同室の男子達が声をかけた。

「おまえらつて仲良いな、付き合つてんの？」

「まさか。」

「それはない。」

慌てる様子もなく、きつぱりと答えた二人に男子達は期待外れといった感じであつた。

「こいつらは小学校の時からこんな感じ。」

そう言つたのは竹田。

「へー、そうなんだ。」

「確かに、にのお父さんみたいなものな。」

「おいつ、父はないだろ。せめて兄にして。」

二宮の答えに笑いが起こる。

「ははは。」

「じゃあ椎名さんの好きな人つて誰？」

「誰？」

「俺も聞きたいー。」

「えっ、何でそんな話に・・・。」

突然振られた話に今度は思い切り慌ててしまう。

「君だろ？」

「えー、まじで?! 松岡？」

「っていう噂聞いたよ。」

「なにそれ? ほんとに？」

「ち、違つよ。」

話の展開が速くなっていた。

男子達が次々と色々なことを言ってくる。

「その噂なら俺も聞いたことあるー。」

「マジ？」

「じゃあ、ほんとなのか？」

「そっか、椎名さんは君が好きなのかー。」

「女って結局顔のいい奴が好きなのかよ。」

「おまけにやつは頭もいい！」

「生徒会長だしなつ。」

「椎名も面食いなんだな。」

「ちょ、ちよつと待ってよ。みんな勝手にそんなこと・・・。」

もはやの話など聞かずにその場は絶好調に盛り上がっていった。

「で、告つたのか？」

「告つたのか？」

「まだならオレ言つてやろうか？」

「松岡君、あなたのことが・・・ずつと・・・。」

「ヒューッー」

なんでそんな話になつていいのか。

わからなくなつて、どうしたらいいのか・・・

「おいっ、いい加減にしろ！」

一瞬で静かになった。

「そんなん噂だろ、もえが違うつて言っただからやめろよ。」

二宮の低い声が静かな部屋に重く響いた。
皆の表情が変わった。

「に、にの。わかったよ。」

「わ、悪かったよ。」

「ごめんな、椎名さん。」

「違うんだよな。」

「にのも、そんな怒んなくてもな。」

周りの皆が空気を換えようとしているのが判った。

「だって俺は“お父さん”だからなっ。」

そう言った二宮の笑顔に、その場の雰囲気は更に変わっていった。

「もー、にの驚かせんなよ。」

「あせったー、まじキレさせたかと思ったー。」

「ははは、俺はいつでもマジだぜ。よろしく。」

いつの間にかまたいつもの空気が流れていた。
そう、いつもの。

穂高晃の顔を見たが、彼の表情もいつもと変わっていなかった。

その夜は眠れなかった。

穂高晃の無表情。

晃くんとか穂高君って呼ぶとどうしてもイメージが合わないから。「今からあきちゃんて呼ぶことにしたの。」そう言っても、変わらなかった表情。

うん。

笑ってくれたりしないのかな。

タケやんとか関くんとかと話す時は違うのにな。

男の子同士だから？

もしかして女嫌いとか？

そういえば女子と話しているところとか見たことないな。

それにしても・・・

あの時、にのが怒った時も変わらなかったな。他の男子達はやっぱりって顔、していたのにな。

別に興味がない話しだったから？

自分に関係のない事だったから？

私の好きな人・・・か。

なぜに松岡くんなのだろう。

噂で聞いた・・・か。

あれ？

前にもそんな事言われた気がするな。

いったいそんな噂誰が言っているのだろう。

二日目の朝。

昨夜よく眠れなかったからロビーのソファでボーっとしていた。

「めぐちゃん、おはよん。」

「おはよ、ちなっちゃん。」

「どうしたの？眠そう。」

「ん、なんか眠れなかった。」

「考え事？」

「ん・・・」

「あ、いたいた！しいな、写真撮ろうぜー。」

ヒロアキがカメラを手に元気にやって来た。

「めぐちゃんとヒロアキの二人で撮ってあげるよん。」

「ヒロアキ、悪いけど写真後でにして。朝は顔が変だから。」

そう言つとロビーの席を立つた。

迎えに来た恵子と朝食会場へ向かった。

「残念だったね、ツーショット撮れなくて。」

「べつに。」

「大好きなめぐちゃんとツーショット。」

「・・・。」

「今日と明日、チャンスはまだまだあるわよ！がんばれっ！」

「べつにつて言つてんだろ。」

「あたしも朝食行こつと。」

「北川。」

修学旅行二日目は一日班別の自由行動。

京都市内をバスや地下鉄を使って観光。

班毎に先生から説明事項を聞いての出発となる。

「椎名さん、これありがとう。助かった。」

「あ、いいえ。」

関から貸したテレホンカードを受け取った。

隣の列に並んでいた晃の姿を見つける。

「おはよう。」

声をかけてみた。

目は合ったのだが、返事は無かった。

「おはよう？あきちゃん？。最初どこ行くの？」
「金閣寺。」

今度は返事があった。

「あのな、関くん。」
「やめて、？あきちゃんー？。」

返事があったのも当然だ。

あきちゃんと呼んで質問したのは関くんだったのだから。
もつとも、関くんは楽しそうにあきちゃんと呼んでいる。
そんなからかわれているのにもかかわらず、表情を変えない晃。

「おい、うちの班出発するぞー。」
「はい。」

関と二人で返事をする。

「じゃあね、？あきちゃん？」

関の挨拶で晃と別れた。

「よーしっ、京都一日観光に出発！」

「オー！」

「もえははくれるなよ。」

「にの、わかってるってば。」

「ははは。椎名さん信用ないね。」

「よし、めぐ、ちゃんについてきなさいね。」

「けいちゃんまで・・・はいはい。」

二宮を班長とする行動班には、恵子、竹田、関の五名が揃った。旅館を出発し、京都駅前バスターミナルへと向かった。六月は修学旅行シーズンの為、学生で混んでいた。清水寺へと向かうバスに乗り込む。

「あちーっ。」

「蒸すな。」

「盆地だからね、京都は。」

「盆地？」

「陸に囲まれているってこと。」

「海がないってこと？」

「そうゆうこと。」

「さっすが、物知りタケヤン。」

「小学校の頃さ、タケヤン物知り博士みたいだったよね。」

「そうそう、栽培委員とかで花壇で花育ててた。」

「うそ、タケヤンが？」

「そうだよー。」

「理科の実験とかさ、妙に張り切って準備してたよね。しかも手際が良い！」

「あははは。そうそう！」

関を除く班の四人が同じ小学校の、同じクラス出身だった。話は小学校の思い出で盛り上がる。

小学校の違う関が皆の話を興味津々に聞いている。

「あとは？にのはどんなだったの？」

「にのは・・・」

「まんま。」

恵子が即答する。

「まんまって、それだけ？」

「今と変わらずデカイだけ。」

「恵子、それはないだろ、もっとないの？かつこ良かった話とかさ。」

「身長も態度もデカイのは変わりません。」

「ははは。」

「椎名さんは？」

「えっ？あたし？」

「もえはなー、」

「はい、ストップ。」

「おいおい、恵子止めるなよ。」

「にのにめぐの話しさせると長いから。ほら、次の停留所降りなきや。」

「あ、ほんとだー。」

「早かったな。」

「俺のもえの話は？」

「いつかね。」

「いつかって、いつ？あとでねとかならわかるけど、いつかっていつ？」

「はいはい、うるさい班長はほっておいて降りましよ。清水寺までは歩きよ。」

バスの車窓からは清水寺へ続く長い坂道が見えた。

三年坂。

バスを降りた後、高く上った太陽の熱い日差しを浴びながら、清水寺へと向かった。

清水の舞台でも知られる有名な観光地。

抹茶ソフトクリームを食べたり、八橋を試食したりと楽しい観光のひと時を過ごした。

「何？」

「落し物？」

同じく、時間を経てから清水寺へのバス停を降りた穂高晃の班。

「いや。」

足元に落ちていたテレホンカードを拾い、自分のポケットへと閉まった。

清水寺の後、金閣寺へ行った。

こちらにも有名な観光名所とあってたくさんさんの人がいた。

うちの学校の生徒も数名いた。

園内を回っているうちに、前を歩く人山の中に祐也を見つけた。

こんなにたくさんの方がいる中で、見つけてしまうなんて。

やっぱりまだ好きなのだな。

そう思ってしまう。

徐々にその距離が縮まって行き、祐也と同じ班の千夏が振り向いた。

「めぐちゃんだ！」

見つけると嬉しそうに走ってくる千夏。

「めぐちゃん、写真撮ろっ！」

「千夏、俺も一緒に撮るっ！」

「あんたはダメ。」

「そんな拒否することないだろー。」

「嫌。あたしはめぐちゃんと二人っきりで撮りたいの。」

「ダメならまだしも、嫌って。傷つくな、その言い方。」

「はい、にのシャッター押して。」

「はいはい。」

「撮るぞー、チーズ。」

千夏と笑顔で写真を撮り終えた後、ふと祐也を見る。

祐也、こっち向かないな。

気づいてないことはないのにな。

なんだか表情も硬い。

怒っているのかな？

なにかあったのかな？

まあ・・・

私には関係のないことだよな。

最近、祐也と会っていなかったし、会話すらしていない。

そういえば、前に祐也にも聞かれたっけ。

生徒会室で、

私の好きな人誰かって。

その時はシヨックのあまり泣いちゃったっけ。

あ、

でもその後穂高晃があの穂高晃だと知って。

更にシヨックを受けたわけで。

そういえば忘れてたな。

穂高晃の印象が強くて、祐也との事、忘れていた。

それはそれで、もしかしたら、

お陰で忘れられたことになるのかな。

最近、祐也の事悩まなくなったのも、穂高晃の事でいっぱいだったから。

いつの間にか、祐也の事でめそめそ泣いたり悲しくなったりすることがなくなっただな。

あいつの事を考えてというのがなんだか悔しいのだけれどね。

あれ？

ちよつとまつて。

穂高晃の事考えていた？

穂高晃の事でいっぱいだった？

それって……

それではまるで私があいつの事気になっているみたいじゃない。
ま、

まさか。

そんなことは。

ありえない。

ありえない。

その後も嵯峨野へ行ったり、太秦映画村を観光したりして一日が
終った。

お土産もたくさん買った。

旅館へ戻ると皆部屋で寝そべっていた。

暑い中、一日中歩き回っていたのだから疲れも出たのだろう。

「めぐー、ジュース買ってきて。」

「けいちゃん、なぜ私が？」

「だって昨日にのの部屋行くのに迷ったのでしょ。」

「うう、な、なんでそれを知って。」

「どうせめぐの事だから迷うわよ。カマかけてみただけ。」

「ひっどーい、けいちゃん。」

「ははは。めぐちゃんはけいちゃんには敵わないみたいだね。」

「私の勝ちよ。だからジューズ。」

「もー、わかったよ。」

「めぐちゃん、自動販売機の場所は大丈夫？」

「ちゃんまでそんなこと言うー。」

「ははは。めぐちゃんと話していると面白いからついね。」

「大丈夫。二日目は迷いません。」

そう言っ て部屋を出た。

本館の階段を上がり、自動販売機のある階を目指した。

階段の踊り場で、すれ違う人に突然髪を引っ張られた。

「いたっ！」

顔を上げるとそこにいたのは晃だった。

「な、なに？いきなり。」

「にのの部屋なら下だぞ。」

「し、知ってるわよ。ジューズ買いに行くの。」

「ふーん。」

相変わらず無表情な晃の顔から視線を外すと、ワイシャツの胸ポケットに見覚えのあるテレホンカードが入っていることに気づいた。

「あ！それ。」

指を刺してアピールした。

「これ？拾った。」

「私のだ。今日の朝使った後、失くしたと思って・・・」

晃の手からテレホンカードを受け取ろうとする。

ところが晃はその手の位置を上へと上げた。

「拾ってくれてありがとう。」

お礼を言っただけで受け取ろうとするが再び晃の手が上昇した。

「え?!」

「返してくれないの?」

不思議そうな表情のに対して無表情のまま届かない位置へと移動させている晃。

「?!」

「返して・・・」

今度は少し不機嫌な表情をする萌。

しかし晃の表情もテレホンカードの位置も変わらない。

「返してよー。」

そう言っただけでジャンプをして取ろうとした。

が、なかなか届かない。

何度もジャンプを試みていると面白そうに眺めているだけの晃。

「ちょっと、返してよ。届かないよ。」

「ずるいよ、身長差があるのだから、届かないよ。」
「もー、返してよ。」

真剣に取り返すことを考えていた。
何度ジャンプしても届かないゆえ、意外と身長が高いことに気がついた。

「返してよー。」

「ねえってば。」

「ねえ、返してー。」

「返して、あきちゃん。」

「あきちゃん。」

「あきちゃん。」

そう呼びながら何度も飛んでいるうちに、自然に笑顔が戻ってきた。

笑っていた。

いつの間にか、晃の表情にも笑みが浮かんでいた。

「あつ、タケちゃん。」

が指差した方を見る晃。

その隙についてテレホンカードを取った。
指差した方向には誰もいなかった。

「嘘つき。」

「いじわる。」

晃の発言に即答でそう返した。
二人の目が合ったまま沈黙が続いた。

先に目を逸らしたのは晃だった。

「じゃあな。」

そう言つと階段を下りていく。

「あ、待つて。」

足を止める晃。

「あの・・・この間の事、誰かに話した？」

「いつのこと？」

「前に、放課後教室にいた時の事。」

「覚えてない。」

「そ、そっか。」

それだけ言つと再び晃は下りて行つた。

覚えてない・・・か。

この間の事、教室で会つた時、泣いていたのに気づかれたかと思つた。

興味ないか。私の事なんて。

覚えるまでもない出来事だったってわけか。

私にとつてはかなり印象的な出来事だったのだけだな。

穂高晃の正体を知つて。

あれ。

やだな、私。またあいつの事考えていたんだなんて。

もう今日はこればかりだよ。

どうしたのだろうな。

気になっている・・・？

「あとウーロン茶にポカリっと。」

自動販売機に辿り着くと皆の分も合わせて五本を買ったことになった。

両手に二本ずつ、持ったところであと一本が残ってしまった。

一度には無理だったかな。

そうも思ったが、なんとか残りの一本も上に乗せて抱えるように立ち上がった。

「椎名さん。」

「わああ!」

突然話しかけられたことに驚いて缶のバランスを崩してしまった。

「ごめん、驚かせるつもりじゃ・・・」

後ろから現れたのは松岡だった。
落したジュースを拾ってくれる。

「あ、いいよ、松岡くん。」

「持つの手伝うよ。」

「へ、平気です。」

「落したの僕のせいだしね。」

「ち、違います。」

「まあ、持たせてよ。一人じゃ難しい量でしょ。」

松岡の笑顔に押されて、素直にお願いすることにした。

「あ、ありがとうございます。」

「その間椎名さんとしやべれるから僕は嬉しいのだけだな。」

「え？」

「椎名さんとは学校ではほとんどしやべらないからね。」

「はあ。」

それは私が意図的に学校ではしやべらないように気をつけているからなのだけだね。

とは言っても塾でもほとんどしやべった覚えも無い。

「僕、椎名さんに嫌われているのではないかってね。」

「い、いえいえ、それはないです。」

「敬語だし。」

「こ、これは、その・・・」

言葉に詰まってしまっても、優しく笑顔で会話をする松岡。思わずこちらも顔が笑うしなくなってしまう。

「昨日、ぶつかったところ大丈夫だった？」

「えっ？」

何のことかすっかり忘れかけていた自分が恥ずかしい。

「あ、はい。あ、じゃないや、うん。全然平気でした。」

「良かった。」

しどろもどろに喋る萌を、松岡は優しい眼差しで見つめていた。

「椎名さんはどうしてあの塾に？学区外でしょ？」

「は、はあ。前の小学校の友達がいるので・・・」

「椎名さんて転校生なの？」

「はい。」

「それは知らなかったな。」

女子部屋へと続く廊下に差し掛かった時、ふと何か変な空気を感じた。

なに？

なんだか違和感を感じる。

周りがザワザワしているのに気がついた。

女子の視線。

こ、これかー、松岡ファンクラブ。

や、やばいなー、二人で並んで歩いているだけでこれなのか。参ったな。

早くこの場をなんとかしないと、視線が痛い。

「ま、松岡くんありがとうね。もうここで大丈夫。」

「そう？あ、女の子の部屋に入るわけにもいかないよね。」

「う、うん。ありがとうございました。」

「いいえ。椎名さん、また色々話そうね。」

そう言つと完璧な笑顔で帰っていく松岡様。
一気に疲れが出た。

この夜は消灯時間を過ぎても皆起きていた。
修学旅行最後の夜に、女子達の話は終らなかった。
いつの間にか恋愛の話になっていた。

「ね、めぐちゃんは好きな人いるの？」

「えっ、私？」

「そっうえば聞いたことないね。」

「私あるよ。」

同室の敦美が言う。

「えっ、誰？誰？」

同じく同室の加奈子。

「めぐちゃんて松岡君の事好きなんだよね？」

「ええっ？」

「うっそ、そうなの？」

「ちょ、待ってよ。なんでそうなるかな。」

「え？違うの？」

「松岡君は競争率高いよねー。」

「だからね、違うの・・・」

「敦美、それ、誰から聞いたの？」

それまで黙って聞いていた恵子が口を挟む。

「え？誰って噂だよ。そういう噂が流れているよ。」

「ふーん、噂ねえ。」

「なに？恵子怒ってるの？」

「べつに。」

「怒ってるじゃない。なんで？私何かまずいこと言った？」

「けいちゃん・・・」

「だから言っただでしょ、めぐ、気をつけなさいって。」

「はい。」

急に小さな声になる。

敦美と加奈子は二人で顔を見合わせている。

これまでの経緯を二人にも話した。

「なるほどね。」

「それはめぐちゃん、目つけられちゃったかもね。」

「うう・・・どうしよう。」

「私も聞いたことあるけど、嫌がらせみたいのは一時的なものだから時間が解決してくれると思うよ。」

「うん・・・」

「とにかく、この間から言っているけど、学校で松岡としやべつちやだめよ。」

「わかった。」

「よしっ。」

とはいえ、今日も話していたとはさすがに言えなかった。
気をつけなければ。

松岡の話ですっかり場が冷めてしまった。

「気を取り直して。」

「で、めぐちゃんの本命は？」

「えっ、まだ話すの？」

「だって松岡君じゃないってことはわかったから、ほんとには？好きな人誰？」

「い、いないよお。」

「嘘だ。」

「ほんと。」

「失恋したからは当分はいいの。」

「そうだったの？」

「うん。」

「ごめん、めぐちゃん知らなくて・・・」

「ううん、けっここの前の事だしもう平気よ。」

「タイミング悪いなあ。」

「ほら、私の話だと盛り上がらないから皆の話聞かせてよ。敦美ちゃんは何？」

「敦美は重野君でしょ。」

加奈子が言う。

「有名よね。その話も。」

恵子が続く。

「違うの。」

「ええっ?!」

二人同時に驚いた。

「重野君の事好きだったのは本当なのだけど、石塚君の事いいなっ
て思っって。」

「ええー、石塚?いつから?」

「今日かな。」

「きよ、今日?!」

今度は萌も加わって三人の声が重なった。

「うん。班が同じでね、修学旅行って学校よりも皆と過ごす時間が
長いでしょ、朝も、夜も、ご飯も一緒に食べて。だから今日一日、
一緒にいたら好きになっった。」

「す、すごいね。」

「その気持ち、わからなくもないね。」

「旅行中の恋かあ。」

「でもあるよね、そういうの。最初は好きでもなんでもないので、気がついたら一緒にいる時間が増えていて気になる存在、みたいな。」

加奈子が言う。

「確かにあるね。そういう加奈子はどうなの？」

今度は恵子が聞く。

「私は一途に板橋君よ。」

「すごい、加奈ちゃん一年の時からずっとだよな？」

「そうよ。」

「ずっと好きなんだあ。」

加奈子の一途な想いは尊敬してしまう。

「一途なのは良いけど、いい加減告らないの？」

「うーん、考えてないな。板橋君は私の事あまり知らないと思うし。」

「じゃあ、板橋に彼女が出来たらどうするの？」

敦美が言う。

「それは・・・仕方ないよ。それでも好きだと思うし。」

「へー、ほんとに一途だね。」

「そういう恵子はどうなのよ？」

今度は加奈子が恵子に話を振る。

「私はいいよ、今はいいし。」

「うっそー、恵子いないの？」

「ほんと。」

「前のを引きずっているとか？」

「うるさい。」

「凶星。」

加奈子と美に当てられた恵子は普段見せない恥ずかしそうな表情をしていた。

女の子同士の恋愛の話。

皆、それぞれに、それぞれの想いを抱えている。
人を好きな想い。

それは時には苦しくて切なくて、悲しくて。

加奈子が言っていた事を思い出す。

「仕方ないよ。それでも好きだと思う。」と。

私と同じ。そう思った。

例えば相手が別の人を好きだとしても、

結果的に誰かと付き合ったとしても、

そう簡単に終われる恋なんかではないと。

一途な想いも、叶わない事もある。

長いはずの夜も、あっという間に過ぎていった。

修学旅行三日目。

最終日はクラス毎のバス観光となっている。

旅館を後にしたバスは二条城へと到着した。

高さを誇る石垣と、雄大な緑の敷地が続いていた。

庭園にかかる石橋。

橋の上からは池を泳ぐ鯉が見渡せた。

「しーなっ!」

「うわっ!」

呼ばれたと同時に背中を押され、池に落ちるかと思われた。

「ヒロアキ。脅かさないでよ。」

「写真、撮ろうぜ。」

「いいよ!」

「いくぞ!。せーのっ!」

ヒロアキが右腕を伸ばし、自分でシャッターを押す。

「この池、人面魚がいるらしいぞ。」

「ほんとに?」

「さっき、ガイドさんが言ってた。」

「どこどこ?」

ヒロアキと二人で池の中を覗いていた。

「うわあっ!」

再び後ろから背中を押され、驚く。

そして後ろを振り返ると更に驚いた。

「あきちゃん!」

意外にもそこにいたのは男だった。

「落ちるぞ。」

「押したのはあきちゃんですよ。」
「あっ！」

続けて大きな声をあげる。

「写真、写真撮ってない。あきちゃんと。撮ろっ。」
「やだよ。」

思い出したので明るく提案してみたが、即答で断られてしまった。

「えー、撮ろっよ。」
「やだ。」
「撮ろっよ、ねっ、いいでしょ？」
「いやだ。」
「写真の一枚くらいいいじゃない。あきちゃんのけちーっ。」
「あのなー。」

けちという言葉に少し表情を変える晃。

「わかった。じゃあヒロアキも入れて三人で撮ろっよ。それならいいでしょ。」

無言の晃。

近くのクラスメイトにカメラを渡す。

「二条城バックに撮ってもらおう。はい、入って入って。」
「はい、あきちゃん撮るよ。」
「チーズ！」

半ば無理やり写真に入れられた晃。

笑顔のとヒロアキと無表情の晃の三人で写真に写った。

「ありがと。あきちゃん。」

そう言つと、満足そうな笑みを浮かべて五組の列へと戻っていく。

「写真、二日間あれほど嫌がっていたのに今日は撮るんだな。」

晃と同じ班の男子が来て言った。

「椎名か。そういえばあいつ松岡の事好きらしいぜ。晃君知ってた？」

「へー。」

それ以上何も言わない晃だった。

帰りの新幹線。

おしゃべりをしようと座席を回転させてボックス席にしたが、旅の疲れからか三十分も経たないうちに皆ウトウトと居眠りを始めていた。

座席を回転させた為、進行方向とは逆向きに座ることになった。

さっきまでいた所がどんどん後ろへと遠ざかっていく。

静かに車窓を眺めていた。

消えていく山々。

いくつものトンネルを越えて走っていた。

時折すれ違う列車は、今来た方向へと向かっていく。

そんな風景に見とれていると、

突然、額を叩かれた。

“パシッ”

そんな鈍い音がした。

「あきちゃん。」

振り返ると晃がいた。

背中合わせの席に座っていたのだった。

「前の席だったのだね。タケちゃんなら寝ちゃったよ。」

「おまえは寝ないのか？」

「うん。昨日そんなに遅くなかったしね。」

「寝たの何時？」

「一時くらいかな。」

「勝った、二時。」

「あきちゃんは眠くないの？」

「全然。いつもそんなくらい。」

「えっ、二時？！あ、もしかして勉強？」

「は？」

「だって、あきちゃん頭良いでしょ、見たよ中間テストの順位。」

「起きてるのはゲーム。」

「えっ？ゲーム？勉強じゃなくて？それで五位？」

「おまえもいつも入ってるじゃん。」

「えっ？」

いつも？

知ってる・・・の？

私の順位。

私が穂高晃を知らなかっただけで・・・

穂高晃は知っていたの？

私の事。

「ねえ、あきちゃんて私の事いつから知っていた？」

「は？」

「ねえ、いつから？」

「いつからって、おまえずっとタケんとこ来てたじゃん。」

「ずっとって？」

「一年の時から。」

「い、一年?!」

驚いて声をあげてしまった。

「ちょ、ちょっと待って。一年の時って……。もしかしてあきちゃん一年生もタケやんと同じクラス？」

「ああ。」

「一年も、二年も、タケやんと同じクラス……」

そこまで言うと言葉を失ってしまった。
穂高晃は一年の時から私を知っていた。
私は名前さえも知らなかったというのに。

「何で？」

「い、いえ、べつに。」

慌てて発した言葉は声が裏返っていた。
そして笑顔も引きつった。

「タケ起きた。」

そう言う竹田のところへ行って話しを始めていた。

晃の表情に笑みが出ている。
竹田と話す晃に視線が向いてしまう。

最近の私、驚いてばかりだな。
穂高晃の事に関してだけ。

特に修学旅行のこの三日間。晃の事、色々知った気がする。
ふいに、昨夜の話を思い出した。

「修学旅行は皆と過ごす時間が長いから・・・一緒にいる時間が増えて」と敦美が言っていた。

穂高晃と話す時間が増えたこの修学旅行。

皆のそれぞれの想い。

色々な出来事。

少し変わった印象。

観光地での思い出にのせて、三日間の修学旅行が終わった。

2

修学旅行から帰ってくると梅雨入りをした。

毎日シトシトと降り続ける雨。

テニスコートに溜まる水が引けることはなかった。

部活は各自、室内での筋力トレーニングとなった。

「あれ？」

「めぐちゃん、どうかした？」

「靴がない。」

「えっ？靴？」

「うん。」

「さっきここで脱いだ？」

「そう。誰か間違えて履いて行っただのかなあ。」

「えー、間違えるかな？」

「うーん……」

室内トレーニングが終わり、部員達が次々と靴を履き替え、外へ出て行く。

「奈緒ちゃん先に行っていていいよ、私最後まで見てから行く。」

「わかった。」

数分が経ち、全員が出て行ったがそこに靴はなかった。
変だな。

誰か間違えて履いたとしたら一足残るはずのだけだな。

次にトレーニング室を使用するバレー部員達がぞくぞくと入って来た。

顔をあげると穂高晃の姿を見つけた。

「椎名さんだ。」

声をかけてくれたのは関だった。

「椎名さん、今終わり？」

「うん。今日も雨だからね。」

「いいなー。オレらこれからだもん。」

「頑張ってね。」

「うん、また明日。」

穂高晃とすれ違っが何も言わなかった。

教室へ戻ると、今度は傘立てにあるはずの傘が無かった。

毎日雨が降っているのだから持って来なかった人なんていないはず。

今朝も雨が降っていた。

名前も書いてあったのに。

仕方なく、ロッカーに置き傘してある折りたたみ傘で帰ることにした。

だが。

ロッカーの中にも異変が起きていた。

そこに折りたたみ傘はなく、

常備しているタオルやポーチ、ノート、ペンケース、ポケットティッシュまでもが無くなっていた。

まるで、一足早い夏休みを前に、全て中身を持ち帰ったかのように。

ロッカーには何も無かった。

翌日。

「で、しーなそのまま帰ったのか？」

「うん。上履きで。」

「傘は？」

「余っていた物を借りたよ。」

「他の物は、見つからなかったの？」

「うん。今朝もう一度よく探してみたのだけどね。」

ヒロアキと千夏に昨日の靴とロッカーの事を話した。

「靴は誰か間違えて履いて帰ったのか？」

「私も最初はそう思ったのだけどね。でも皆帰った後一足もなかった。」

たのよ。」

「ロッカーはしーながうつかりして隣の人のに入れていたとか？」

「それならすぐに見つかるでしょ。」

「ミステリーだな。消えた靴の行方は？傘は？ロッカーの中身は？次号に続く。乞ご期待！」

「まあ、ヒロアキ。」

「よし、じゃあ北川はどう思う？」

ふざけて楽しんでいるヒロアキの隣で一人強張った顔をしている千夏が口を開いた。

「めぐちゃん、最近他に何か変わったことはない？」

「えっ？」

「おっ！、名探偵北川千夏、登場か？」

「物が無くなった他に、おかしいなって思うこと。どんな小さな事でもいいから思い出して。」

千夏表情は真剣だった。

そんな千夏の表情に改まって考えてみることにした。

「なんだ、無視かよ。つれないな。」

「そういえば・・・、前に渡り廊下歩いていたら上から水が降ってきた。」

「雨じゃねーの？」

「うつん、晴れていた。」

「その時は、誤って二階から水を捨てたのだと思っていた。」

「まあ、よくあることだな。水道まで捨てに行くのがめんどいとするよな。ん？ってことはしーな、それ汚ねー水かもしれねーぞ。きつたねー。」

「あとは・・・帰りに野球のボールが飛んできたことがあったな。」

「そりゃあるだろ。野球部のだろ。」

「でも、学校からはけっこう離れていたの。」

「じゃあ、近所の野球少年だろ？」

「めぐちゃん、その時の様子詳しく話して。」

「野球少年は謝りに来たのか？」

「ヒロアキは黙ってて。」

「はいはい。」

千夏に鋭い視線を送られ、それまではしゃいでいたヒロアキが口を閉じる。

「その時は、祐也と松岡くんが一緒に・・・あ、松岡くん。そう、松岡くんの話だ。」

「くん？」

「うん。ちなつちゃんあのね、三年になってから、私の好きな人は松岡くんなのかって聞かれる事が何回かあったんだ。松岡くんとは塾が同じなだけなのけど、なんか松岡くんには熱狂的なファンがいるらしくて、学校では話さないように気をつけていたのだけれど・

・・・

「それだ！」

千夏表情が変わった。

「めぐちゃん、君のファンの子から嫌がらせをされてるね。降ってきた水、飛んできたボールも、靴や傘が無くなったのも。」

「うー・・・そっかあ。気をつけていたつもりだったのだけだな。」

「

「女のいじめか。怖えーな。」

「ただ、この嫌がらせの目的がどこにあるのかわからないのね。」

「目的？北川、難しい話してわからん。」

「聡一君と仲良くしているのが気に入らないだけの嫌がらせなら、一時的なもので終わるかもしれない。けど、わざわざめぐちゃんが君の事を好きだなんて噂を流すのはおかしいと思わない？」

「そおか？」

「めぐちゃんがただ目をつけられただけの単なる嫌がらせ。」

「北川、何が言いたいんだ？」

「うーん、なんだか嫌な予感がするのよ。これだけでは終わらないような・・・」

千夏はそのまま険しい表情をして考え込んでしまった。

「まあ、しーな、これからも何かあつたら言えよ。」

「うん、わかった。」

それから松岡くんととの接触を避けた。

嫌がらせの原因が松岡くんと話したり一緒にいたりすることにあるのならば、話さなければいい、会わなければいいと思ったからである。

ところが・・・

「えーっ！」

「悪い、椎名さん。今日は夏季大会のレギュラー発表だから、悪いけど日誌お願い。」

「うん・・・わかった。」

「サンキュー、椎名さん。いつも日誌任せてごめんな。」

「いいよ。レギュラー発表は大事な事だもの。」

「感謝してます。じゃあ、お先に！」

「うん、お疲れさま。」

はあ。

この結果だけは避けたかったのだけれどな。

同じ生活委員の猪原くんと当番の仕事を終えたが、最後日誌を生徒会室へ持って行かなければならない。

でも、生徒会室といえば、この時間、生徒会長が滞在しているのは当たり前で。

生徒会長といえば松岡聡一なのも当然で。

会ってしまうのはもはや避けられないのだろうか。

生徒会室の中なら誰かに見られる心配はないのではないか。

そうも考えたが、前に生徒会室へ行く途中、

この道で、この時間に、このタイミングで水をかけられたことがあった。

もし、あの時の事が嫌がらせの一つだったとしたら・・・

今日も誰かに見られているのではないか。

生徒会室に、松岡くんに会いに行く私を。

そんな事を考えていたら生徒会室の前に着いてしまった。

一呼吸する。

ドアをノックした。

と、ここで良い事を思いついた。

生徒会室のドアを開ける。

「こ、こんにちは。祐也いますか？」

ドアの先に見えたのは奥に座っている松岡。

手前に座っていた祐也の名前を呼び、出てきてもらう。

そうすれば私は生徒会室に入ることではなく、生徒会長と話すこともない。

この作戦で行くことにした。

「萌ちゃん、どうした？」

幸い、祐也は出てきてくれた。
ラッキー！作戦開始！

「ちょっと事情があつて、ここで日誌見てもらえないかな？」
「うん？いいよ。」

ホッ。

祐也は何の疑いもなく日誌を受け取ってくれた。
ドアの外で。

よしっ！

この勝負もらつた！
そう思つた瞬間だつた

「あれ？椎名さん、入らないの？」

「えっと、そ、その・・・」

「入りなよー。」

そう言つて笑顔で向かえ出てくれたのは紛れもなく生徒会長様でした。

「きよ、今日はこ、ここで。」

「そんな事言わずに、さあさあ。」

松岡の手が肩に触れ、背中を押されて中へと促された。

い、いや、

う、うそでしょ？！

話を・・・

うつん、話さないとか会わないとかではなく、既に松岡くんので

っ、手が、私に触れているではないか。

こ、これはまずい。

これはまずい。

これはいけない。

これは危険だあー！！

「聡、萌ちゃんが困ってるだろ。」

祐也が松岡の手を振り払ってくれた。
た、助かった。

「ほい、萌ちゃん日誌確認したからこれで良いよ。お疲れさま。」
「う、うん。ありがとう・・・じゃあ、そういうことで。」
「あ、椎名さ・・・」

松岡の呼びとめる声も掻き消される程のスピードで走った。
逃げ帰るかのように。

そんな萌を見てため息をつく松岡。

「はあ。僕は嫌われているのだろうか。」
「？」

小さな声で呟きながら生徒会室へと戻る松岡に祐也が声をかける。

「聡、萌ちゃんと何かあったのか？」

何も言わずに座る松岡。

「聡、嫌われるってなんだよ？」
「なんでもないよ。」

「おい、なんでもないってなんだよ。気になるだろー。」

「気になる・・・ね。」

「聡、答えるよ。何だよー。」

再び口を閉ざした松岡に、祐也はしつこく聞いていたのだった。

はあ、はあ、はあ。

し、心臓に悪い・・・

渡り廊下を一気に走って教室へと戻ると息が切れていた。

作戦失敗。

参ったな。

誰かに見られていなかったかな。

はあ。こんな状態、いつまで続くのかな。

こんな状態、いつまで続けなければいけないのかな。

その答えは

目の前に出ていた。

“塾を辞める”

教室に戻ってくると自分の席に一枚の紙が置かれていた。

そこに書かれていた言葉。

“消えろ”

“調子に乗るな”

“ブス！”

などの中傷文だった。

なんでこんなことになっちゃったのかな。

私の何がいけなかったのかな。

私、そんなに嫌な子なのかな。

私、どうしたらいいのかな。

いつの間にか涙が出ていた。

悲しい。どうして悲しいの？

悔しい。何が悔しいの？

わからなかった。

一粒・・・また一粒、涙が頬を流れていく。

「萌ちゃん？」

その声を背後から聞いた時、まるで金縛りにあつたかのように体が動かなくなった。

祐也。

泣き顔見られたくないなら泣き止まなきゃ。

泣き顔見られたくないなら隠さなきゃ。

泣き顔見られたくないなら早く笑わなきゃ・・・

えっ！？

ええっつっ！！？

教室に入って来た祐也は、萌の顔を覗き込むと泣き顔に気づいた。そしてそのまま萌を抱きしめたのだった。

「涙、止まった？」

耳元で祐也の声がする。

「う、うん。」

突然の事に驚いて涙はすっかり止まっていた。

離れようとしたが背中に戻っている祐也の手には力が入っていて動くことが出来なかった。

「落ち着いた？」

「う、うん。」

「萌ちゃんが泣くところ初めて見た。」

萌を離すと椅子に座らせた。

顔から首、そして体全体が熱くなっている。

「何かあったの？」

下を向いたまま顔が上げられなかった。

「聡と・・・つきあってるの？」

「えっ？」

顔を上げると祐也の表情が悲しそうに見えた。

「さっき、二人ともおかしかったからさ。それで様子見に来てみたら萌ちゃん泣いているし。」

「聡の事、好きなの？」

まっすぐ見つめてくる。

「ち、違うよ。こ、誤解しないで。」

「本当に？」

「う、うん。」

「聡の事好きじゃないの？」

「うん。」

「じゃあ、ちゃんの好きな奴って誰？」

「えっ、」

「誰？」

真剣な表情の祐也。

「誰？」

祐也の顔が近づいてくる。

「なんか、こんなこと聞いてると俺がちゃんの事好きみたいだな。」

更に近づいてくる祐也の顔。

えっ！

ちよっ、

ちよっと、まっ たあゝ！

な、なに？

なにこれ？

ゆ、祐也の顔が近いっ！

再び金縛りのように体が動かなくなる。

祐也が目を閉じた。

か、顔が。

く、唇が近づいてくる。

えっ、どっ、なっ、まっ、

わー
！！

“キーン、コーン、カーン、コーン・・・”

静かな教室に大きく響くチャイムの音。

祐也の顔が遠ざかっていく。

再び下を向く萌。

沈黙が走る。

「萌ちゃんの泣き顔見た時、抱きしめたいって思った。」

少し微笑んだ顔になった祐也が言った。

「萌ちゃんの好きな奴が俺だったら良かったのに。」

これは夢？

これは夢？

きっとそうだわ。

そうにちがいない。

でなければ祐也が私のことを好きだなんて・・・

私も祐也のこと好きだったよ。

あれ？

好きだった？

だった・・・

好き？

今は？

前は好きだったよ。

じゃあ今は？

今でも祐也のこと好き？

目の前にいる祐也のことが好き？

今言えるの？

ここにいる祐也は・・・

うつん。違うね。

だって、祐也には彼女がいるじゃない。

「だ、だめだよ、からかつちゃ。彼女可哀想だよ。」

精一杯の笑顔を作って言ったつもりだった。

その言葉に祐也の表情も変わった。

険しく・・・なった。

「ごめん、困らせるつもりは無かったんだ。忘れて。今の忘れて。」

そして、次の言葉は笑顔で言った。

「部活、先に行くね。」

と言うと祐也は教室を出て行った。
一人教室に残された。

また、涙が溢れ出てきた。

忘れて。今の忘れて。

二回、言われた。

忘れての言葉。

冗談だったのかな。

からかわれていたのかな。

変なの、私。

「萌ちゃんの好きみたいだ。」

あれほど聞いたかった言葉なのに、今は苦しくて、悲しくて仕方がないの。

忘れて。

忘れよう。

いまは。

忘れよう。

翌朝。

下駄箱の前で晃と会った。

「おはよう。」

声をかけたが挨拶は返ってこなかった。

修学旅行で少しは話すようになったのにな。

そんな事を思いながら教室へ向かった。

無言のまま晃は四組へ入る。

そのまま通り過ぎようとすると、千夏とヒロアキに声をかけられた。

「おはよん、めぐちゃん。」

「オーッス。」

「おはよ。」

挨拶をし、四組へと立ち寄った。
そして二人に昨日の紙を見せた。

「おおー！すっげーな。強烈な文字。」

「これね。」

「やつぱり？ちなっちゃんもそう思う？」

「うん。目的はこれだったのねん。」

「おい、この間から言ってる目的って何だよ？」

「ヒロアキはばかねん。」

「バカっていうなよ！」

「つまりね、めぐちゃんに嫌がらせをしているのは、聡一君と話すのがダメとかじゃなく、本当の目的は塾を辞めさせること。」

「塾？しーな、聡一君と塾一緒だったのか？」

「うん。」

「へー、レアだな。しーなの行ってる塾って学区外じゃなかった？」

「そう。前の学校のとこ。」

「そんなあまり知られていないところまで調べるとは熱狂的なファンね。」

「でもよー、相手の要求が塾を辞めることってしーな辞めるのか？」

「ううん、嫌だよ。」

「だろ。ってことはいじめは続くのか？」

「うーん・・・」

考え込んでしまう千夏。

「あ、そういえばしーな昨日部活出てなかったよな。やっぱこれが原因か？」

「えっ？」

「シヨック受けて帰ったのか？」

「えっ、えっと・・・その・・・」

「なんだよ、まだ何かあるのか？」

「ん・・・」

「はっきしねーなー。」

「めぐちゃん、隠さずに話してほしいな。」

言葉に詰まっているとすかさず千夏が声をかけた。

「う、うん。実は・・・」

そこまで言っていることに気がつく。

教室には萌、千夏、ヒロアキの三人の他に晃もいたのだった。

いつも通りの声で喋っていたが、当然晃に聞かれていただろう。

今までの話は・・・まあ、いいとして。

ここからは声を小さくし、千夏とヒロアキに近づいて話すことにした。

「祐也と会っていたの。」

「祐也もこれを見たのか？」

「うん。泣いているところを見られて・・・」

再び言葉に詰まる。

「なんだよ、どうした？」

「めぐちゃん、祐也君と何かあったでシヨ。」

鋭い千夏の視線を感じる。

やはり、隠し通すのは無理だな。

呼吸を整えてから話すことにした。

「うん・・・泣いてたら、抱きしめられて、松岡くんの事好きなのが聞かれたから違うって答えた。」

「だ、抱きつつ」

ヒロアキが声を上げそうになり、抑えていた。

千夏は動じず、視線を保ち続けていた。

「それで？まだあるでしょ？」

「ちゃんの好きな奴が俺だったら良かったのになって言われた。」

「なっ、なんだよそれーっ！」

「ヒロアキ声大きいっ。」

ついに抑えきれなくなったヒロアキの声が四組に響く。

「わ、悪い。で？」

「最後に、忘れてって言われたから、冗談でからかわれていただけだと思う。」

「なるほどねん。」

今度は言葉が出ないヒロアキに代わって千夏が返事をした。

「めぐーっ、めぐ、来てる？」

「けいちゃん。」

四組を恵子が覗いて呼んだ。

「ごめん、ちなっちゃん、ヒロアキ、行ってくるねっ。」

そう言々と教室を出てく。

残された二人。

登校時間が近づき、教室には四組の生徒達も増えてきていた。

「どう思う？いまの話。」

「祐也のことか？」

「そう。」

ざわざわし始めた教室で二人とも目を合わせずに話している。平常心を取り戻したヒロアキが口を開いた。

「祐也がしーなのことを好きなのは本当だと思う。」

「どうして？」

「二年の時にクラスの奴らと暴露会したんだ。そんな時の・・・祐也の好きな子はしーなだった。」

「なるほどねん。その後祐也君はちゃんとつき合ったのね。」

「どうしてそうだったかはオレにもさっぱり。」

ヒロアキの話に、千夏表情が変わった。

千夏の視線は一度、四組の隅に座る晃の方を見る。
そして再びヒロアキに、

「まあ、今あんたに出来ることはめぐちゃんから目を離さないであげることね。」

そう言つとヒロアキの肩をポンと叩き、教室を出て行く千夏。

「めぐ、これは何？」

廊下へ出ると恵子が一枚の紙を掲げて待っていた。

「けいちゃん！そ、それっ！」

「朝来たら、めぐの席に置いてあつたのよ。」

恵子が手にしていたのは昨日と同じ中傷文の書かれた紙だった。

「いったいどういうこと？」

「そ、それは・・・」

「なんでこんな事になっているのよ？」

「えっと・・・」

「だいたいね、めぐ、あんたがそうやってハッキリしないのも悪いのよ！」

恵子の声がだんだんと大きくなるにつれ、周りには登校してきた生徒達も集まり始めた。

「けいちゃん・・・」

「こんな事されて悔しくないの？そもそもあんたがちゃんとかわないからこんな事になるのじゃない！」

「なにになに？」

「どうした？」

「ケンカか？」

「めぐちゃんいじめに合ってるらしいよ。」

「いじめ？」

「ほら、あの紙。」

「ほんとだー、椎名いったい何したんだ？」

「椎名さんってほら、松岡君の事。」

「ああ。なるほど。」

「松岡君を好きになるなんて度胸あるよねー。」

集まってきた生徒達が恵子と萌の様子を見ている。

「でも、なんで斉藤がキレてんの？」

「さあ？」

四組からは千夏とヒロアキも出てきた。

登校時間の廊下はいつのまにか人の山になっていた。

「めぐ、黙っていてもわからないでしょ。」

「わかるから。」

「は？」

「わかるから。けいちゃん、あのね、私、これ書いた子の気持ちかわかるから。」

「めぐ、何を言っているの？」

「好きだけど、黙って見ている事しかできなくて。好きだから、その人の迷惑にならないように想い続けることがどんなにづらいかわかるから。」

「だからってこんな事していい訳ないでしょ。」

「きつとね、想いを・・・その想いをどこへぶつけたらいいのかわからなくなったのだと思う。」

さつきまでざわめいていた周囲がいつのまにか静かになっていた。登校して来る生徒が次々と足をとめていた。

「わからなくて、ぶつけるところを間違えてしまったのだと思う。」
「めぐ・・・」

「じゃあやつぱり椎名は松岡の事好きなのか？」
「そうだそうだー。」

「気持ちができるってことは好きなんだろう？」
「ヒュー。」

「正直に言っちゃえよー。」

周りから野次が飛んできた。

「そんな訳ないだろ、デタラメだよ、デタラメ。」

そう言っ出てきたのは二宮だった。

「おっ、椎名の父、登場か。」

「なんだよ、にの、デタラメって？」

「その噂ならもう古いぜ。もえの好きな人は聡一君じゃないよ。」

「それに聡一君がもえを相手にするわけないだろ。相手にされないって。無理、無理。」

笑いながら話す二宮に、次第に周囲の雰囲気が変わっていった。

「それもそうだよな。」

「だな。」

「相手にされないのは言えているな。」

笑いながら言う二宮の意見に、周りが共感し始めていた。

「確かに椎名さんって松岡って感じじゃないよな。」

「言われてみればそうだよな。」

「にのの方がお似合いじゃん。」

「にのは父だけだな。」

「はははー。」

「言えてる。」

「じゃああの噂は嘘か？」

「そうそう。信じた奴残念だったな。」

二宮が明るい口調で答える。

「なーんだ。」

「だっせー。」

「噂は噂かー。」

「誰だよこんな噂流したのー。」

「ガセネタじゃん。」

「はははー。」

周囲に笑いが起こっていた。

「チャイム鳴ってるぞー、教室へ入れー。」

HR開始のチャイムが鳴り、廊下には先生達の姿が見えた。さっきまでの人山があつという間に無くなった。残されたのは恵子と萌、二宮。

「けいちゃん、にの、ありがとう。」

「いーえ。」

「もえの父だからな。」

三人に笑顔が戻っていた。

「やっぱり恵子は強いな。」

「なに？にの、何か言った？」

「いや。頼りになるなつて。」

「まーねっ。」

「あ、でもけいちゃん大丈夫かな？今の・・・私をかばったと思つてけいちゃんにも・・・」

「だーいじょぶよつ、そんなの。」

「でも・・・」

「めぐ、そうやって弱気になっていると相手の思つっぽよ。相手はあんたが傷つくところを見たいのだから。堂々としてればいいのよ。」

「うん。ありがとう。」

「まあ、もうすぐ期末テストだし、そんな事言ってる暇も無くなれば、人の噂なんてしている暇も無くなるわよ。」

「そうだな。人の噂も何とかっていうしなつ。」

「にの、それを言うなら七十九日。」

「おつ、そうだったな。」

「ははは。」

恵子の言う通り、それから何事も起こらなかった。

そして翌週から始まった期末テスト。

テストが終わった頃には誰も噂の事を言う者はいなかった。

いつもの朝に戻った。

「集団心理って言うんだって。」

「しゅーだしん・・・？なんだそれ？」

「ヒロアキに話した私がバカだったわ。」

「なんだよ、北川。気になるだろー。」

登校してきた千夏とヒロアキが四組で話している。

「洗脳とか、刷り込みとかも一緒ねん。」

「だから難しー言葉並べんなって。」

「小学生レベルよ。」

「うるせーよつ。で、何がいたいんだ？」

「つまりね、めぐちゃんが聡一君の事を好きだっていう噂を流すことにより、松岡ファンを刺激したの。」

「刺激？」

「そう。聡一君を好きでなくても、憧れている子ってけっこういるのよ。」

「へー。憧れねえ。」

「松岡聡一はみんなのものよ。みたいな、変な理想像を作っているような子達ね。」

「理解できん。」

「熱狂的なファンは一人か二人でも、その憧れちゃん達に噂を吹き込めば集団の出来上がり。」

「なるほどな。集団か。」

「それで、噂が広まるとめぐちゃんはどうなる？」

「困る。」

「そう。めぐちゃんを困らせる。その為には数々の嫌がらせもした。」

「塾を辞めさせたいためにか？」

「そう。そしてこの噂には二つの効果があったのねん。」

「二つ？困らせるだけじゃなくて？」

「一つは困らせる事。嫌がらせに耐えられなくなったためぐちゃんが自分から塾を辞める。そしてもう一つは噂によって聡一君との仲を気まずくさせる事。」

「噂が本人達の耳に入れば二人は気まずくなると？」

「そう、二人の仲が気まずくなればどちらかが塾を辞める、という二重の効果があつたのね。」

「なるほどな。でも、なんで収まつたんだ？しーなは塾を辞めてないのに。」

千夏表情がそれまでとは変わった。

「たぶん、めぐちゃんの気持ちかな。」

「しーなの気持ち？」

「ヒロアキ、あの時の事覚えてる？人がいっぱいいたの。」

「ああ、覚えてるぜ。野次馬のように皆おもしろがって聞いてたよな。」

「恵子ちゃんは、最初からそうするつもりだったのだと思う。」

「え？」

「恵子ちゃん、わざとめぐちゃんに対して怒った態度をとって、廊下に人を集めた。」

「わざと？」

「そう。面白がって人が集まってきた。もちろんその中には聡一君の憧れちゃん達もいた。そして人がたくさんいるところで、めぐちゃんが話したこと。嫌がらせしている子の気持ちが自分もわかるって。」

「ああ、言ってたな。ぶつけるところを間違えたとかなんとか。」

「それが、聡一君の憧れちゃん達に伝わったのだと思う。だから憧

れちゃん達からの嫌がらせが終わった。」

「ほえー、やっぱり女は怖えーな。」

「それにあれだけの人が聞いていたとなれば、熱狂的ファンも動けなくなるでしょ。」

「噂は嘘だつてにも言ってくれたしな。」

「まあ、にのだったってことが悔しいけどね。」

「なんだそれ。まあ、変なことが起こらなくなって良かったな。期末テストも終わったし、平和だー。」

朝の教室でヒロアキが大きく伸びをする。

「ヒロアキ、めぐちゃんがその気持ちわかるって言ってたの誰の事だと思う？」

後ろへ反らせていた上半身を起こしながら考えるヒロアキ。
しばらく考えてから言った。

「祐也か？」

「たぶんね。」

「じゃあしーな、やっぱりまだ祐也の事・・・」

「それは違うかな。」

「は？なんでだ？」

「気持ちの整理がついたから、言える言葉だと思うねん。」

「わっかんねーっ。」

「ヒロアキにはまだ早かったかもねん。」

「なんだよそれーっ。」

二人に笑顔が戻った時、萌が四組に顔だけ出した。

「おはよー。」

「しーな、おはつ*#@# ！！」
「めぐちゃ・・・」

二人とも声を詰ませた。

そのまま五組へ入った。

「あっ！」

「ええっ?! うっそ〜!!」

「めぐちゃんどうしたの?!」

次々と驚きの声をかけられる。

「うわ、椎名。」

「ばっさりいったな。」

二宮と恵子も駆け寄ってきた。

「もえーっ、カワイーっ！」

「げっ、めぐあんた・・・」

「へ、変かな？」

当の本人は笑顔である。

「もえ、カワイイぞ。」

「うん、めぐちゃん似合ってるよ。」

「めぐちゃん短いのもいいね。」

「めぐ・・・びっくりしたわ。」

「へへへ。」

皆から騒がれた通り、私は髪を切ったのだ。
肩よりも上に揺れる髪。

「何センチ切ったの？」

「三十センチくらいかな。」

「そんなにー！でも似合ってるよ。」

「ありがとう。」

こんなにも反応が大きいとんだか恥ずかしくなってしまう。

「あ、切った。」

「椎名さん髪切ったの？」

「わー、めぐちゃん短！」

「めぐちゃんどうしたの？何かあったの？」

「おっ、椎名、失恋でもしたか？」

朝に続いて、休み時間、移動教室へ向かう途中、廊下ですれ違ふ
友達、掃除の時間と今日一日こればかりが続いていた。

放課後、ヒロアキを待ったため四組へ行くと晃がいた。

「あきちゃん。」

用事は無いが声をかけた。

晃は目だけこっちに向けた。

何も言わない。

そして視線を戻してしまった。

そうだった。

穂高晃はこういう奴だったのだ。

私が髪を切るうが切りまいがそんなの関係ない。

何か言ってくれるだろうかなんて期待した私が間違っていた。

周りの人には無関心で、無表情で。そのくせ仲の良い人とは笑顔で話している。

心を開くとよく言うけれど・・・

この人はいつになったら私と向き合ってくれるのだろうか。

あれ？

待てよ。

別にあきちゃんと向き合う必要はないのでは？

こっちが話しかけているのに冷たい態度。

そっちがそうならこっちもこう。

話さなければ、向き合おうとしなければいいのでは？

でも・・・

ううん。

気になっているのかな。

自然に目で追ってしまう。

気になるの。

あの絵を描いた人。

あの絵を描く人。

もっと話したい、もっと彼のことを知りたい。

そう思ってしまう自分もいる。

「しーな、お待たせ。部活行こうぜ。」

「あ、うん。行こう。」

そのままヒロアキと教室を後にした。
だから、

晃の表情の変化には気づかなかった。

部活に行くとまた髪を切ったと騒がれた。
後輩からも色々言われた。
そして、祐也にも。

「ちゃん、髪・・・」

「う、うん。」

「切っちゃったんだな。」

「うん。」

少し沈黙が流れた後で、祐也が言った。

「なんで？」

祐也の横を通り過ぎながら返事をした。

「暑いから。」

そのままコートへ入った。

振り返ることの無いその後姿を、祐也は見つめていた。

髪を切った理由。

これといったものはない。

ただ、新しい自分になりたかった。
変わりたかった。

自分を変えたかったのかもしれない。

失恋で髪を切る。それもそうかもしれない。

でも、それとも違う何か。

自分のはつきりしなくて誤解を招いてしまったこと。

皆の気持ち。

自分の気持ち。

正直な自分の気持ち。

そんな、何かを吹っ切って、新しい自分になりたかったのかもしれない。

新しい、はじまり。

3・はじまり

7月。

中学生生活最後の夏が始まった。
体育系部活動の集大成とも言える中体連が近づいている。

私、椎名はというと、テニス部の朝練にはじまり、六時間の授業、そして夕方からは委員会の仕事、その後テニス部で活動、と忙しい日々を送っている。

蒸し暑い夏がやってきたが、今年は髪を短くしたので少し過ごしやすいな。

なにせ、中学に入ってから一度も肩より短く切ったことのない髪だったから。

そして・・・

最近気になるコト、

やっぱりあきちゃんが気になるかな。

穂高晃。

女子には無口で無愛想な態度。

何か意見を言ったり、リーダーシップをとったりすることなく、どちらかといえばクラスでも目立たない存在。

話すようになったのは先月から。

最近では一対一で話すことも多くなっているけれど・・・

だからあきちゃんのこと、未だによくわからなくて。

でも、知ろうとすればする程奥が深くて。

うーん、不思議な人。

気になるとはいつでも別に好きとか、恋とかじゃないような・・・
なんだろう、この気持ち。
はつきりしないの。

恋、ドキドキするような恋。

私の知っている恋は楽しくもあり、緊張したり失敗したり、全速力で走ったり、ペース配分が上手くいかなくて息が続かず苦しかったりもする、ゴールの見えにくいレースだった気がする。

でも、自分を見直すきっかけを与えてくれた、そんな大事な恋だった。

笠原祐也。

今でも祐也と廊下とかですれ違う時はドキっとする。

それは気まずさもあるのだけれど。

いつかまた、人を恋しく想う時が訪れるのかな。

それはどんな恋だろう。

それはどんな相手だろう。

まあ、しばらくは中体連に向けて忙しいし、部活に打ち込んでもやもやした気持ちを打ち消そう。

「それでは今日はここまで。夏休みは七月いっぱい美術室を開けておくので各自課題を終わらせるように。」

「礼。」

「ありがとうございます。」

「もーえ、次教室移動だつて。」

「うん、わかったー。急いで片付ける。」

選択授業が終わり、皆次の授業に向けてそれぞれ移動し始める。美術室で片づけをしていると、

「椎名さんゴミついているよ。」

と言って、関が襟足についている糸くずを取ろうと手を伸ばした

次の瞬間。

「ひゃあああー @ @」

返ってきた言葉にならない声に驚く関。
そばにいた亮一と晃も振り向く。

「え？びつくりさせちゃったかな？」

慌てて謝る関。

「ははは。もえ、昔の癖直ってなかったんだ。」

一人だけ笑顔の亮一。

「え？クセ？」

「もえはね、こうすると」

そう言って、萌の首に手を近づける亮一。

「ひゃあああー @ @」

再び言葉にならない声を出して首をすくめる。

「首が人一倍くすぐったいらしいよ。小学生の時、よくこうやってからかわれてたよね。」

「亮ちゃん、やめてよ @ @」

涙声になっている。

「なるほど。」

「もえー、行くぞー。」

「はい。」

にのの方へ行こうとするが、そこへ晃の手が伸びる

「ひゃあああー @ @ @」

後ろを振り返り、やったのが晃であることを知る。

「あきちゃん。やめてよ @ @」

再び首元に手を伸ばそうとする晃。

「もー、ほんとにやめて首弱いのー。」

萌の様子を見て楽しんでいる晃。

にのの元に駆け寄り、美術室を出て行く。

扉のところで後ろを振り返ると晃もまだこっちを見ていた。

び、びっくりしたー。

あきちゃんが・・・

あれ？

おかしいな、私、心臓速くなっている。

関くんや亮ちゃんに触れた時はただ驚いただけだったけど、あきちゃんが触れた時はなんだか違う感じがした。

なんだろう。

この感じ。

放課後。

皆が帰宅した後の校舎は少しひんやりしている。

「六組戸締まりオッケー。」

「はい、六組OK。」

委員会の仕事で最終の戸締りチェックをし、日誌に記録している。

「椎名さん、悪いけど日誌出してもらっていい？今日部活急がないとまずいんだ。」

「もちろん。昨日も一昨日も猪原くんに出してもらっていたもの。

今日は私出しとくよ。

お疲れさまー。」

「よろしくー。お疲れ。」

そう言つと猪原は走って教室を後にした。

「さてと、日誌を出しに行こつと。」

日誌を持って生徒会室へ向かう。

今日の生徒会公務、担当は祐也じゃないもんね。気が楽だわ。

昨日と一昨日は担当が祐也だったから、猪原くんには悪いけど理由付けて日誌の提出頼んだの。

やっぱりあんな事があつた後は顔合わせずらいし。

といつても部活で顔は合わせているけれど、特別話す時間もないし、目も合わせないよう
にしていたからね。

いつまでこの状態が続くのかはわからないけれど、今はまだ祐也

の顔見て話すのは正直
気まずいかな。

「失礼しまーす。」

生徒会室の扉を開け、固まった。
そこにいたのは、いないはずの祐也だった。

「萌ちゃん。お疲れ様。」

な、なんで祐也がいるのおおお。
こ、心の準備が・・・
無理だ。

ここはすばやく切り抜けなきゃ。
大丈夫、普通に振舞おう。
ふつうに・・・

「に、日誌、お、お願いします。」

日誌を受け取り、目を通す祐也。

「今日萌ちゃんが週番だったとは。当番変わってラッキーだったな。」

えっ？ラッキー？？

なんでそんなセリフが出てくるかなあ……。

は、早く、一刻も早くここを出たい。

あゝもう、そんな熱心に読むようなこと書いてないのだから早く
印鑑押してよー！！

「座れば？」

気持ちとは真逆にこの部屋に留まるよう椅子を指差されてしまった。

「え？い、いいよ。す、すぐに行くし。」

「いいから座りなさい。」

そう言っで微笑む祐也。
目が合ってしまった。

「は、はい。」

諦めるしかないと悟り、向き合いの椅子に座る。

日誌に目を通す祐也。

顔が上げられずうつむいてしまう。

「あ、ここ誤字。」

「え？どこ？」

日誌に顔を近づける。

「ここ。ほら、大丈夫が？無？になっている。」

「あ、ほんとだ。」

そう言っで顔を上げる。

同時に祐也も顔を上げる。

あ・・・

顔が近い。

こ、これってこの前の状況と・・・
祐也に抱きしめられて。

それから・・・

それから・・・

顔が近づいてきて・・・

や、やばいドキドキしてきた。

どうしよう・・・

「萌ちゃん」

と言った時、

「あれ？椎名さん週番だったんだ。」

扉が開き、生徒会長松岡が入ってきた。

た、助かった。

そう思わずにはいられなかった。

「は、はい。今週当番なのです。」

「そっか。ご苦勞様。でも椎名さん、はい。じゃなくてうん。って
言つてよ。敬語はなし。」

笑顔で言う松岡。

「あ、そうだった。ごめんなさい。」

「ははは。だんだん直していつてくれればいいよ。」

「はい、日誌確認しました。お疲れ様。」

二人の会話に少し怪訝そうな表情の祐也が言う。

「あ、うん。じゃあ、これで失礼します。松岡くん、ばいばい。」

日誌を受け取ってもらえると、即座に立ち去った。

笑顔で見送る松岡。

扉が閉まり、祐也が口を開く。

「なんでにだけ、ばいばいなんだ？俺には挨拶もないのか？」
「さあ。」

祐也の不機嫌そうな発言に、苦笑いの松岡。

き、緊張したあ。

はあ。

こんな状態心臓に良くないよ。
まいったな。

先月、祐也に抱きしめられた日

私もかなり動揺していたし、

あまり良くは覚えていないのだけれど・・・

祐也が私のことをどう思っているのか。

もう、関係のないこと、そう思おうとした。

だって事実、祐也とちゃんは今もつきあっている。

だから、もう終わったこと。

私の恋も終わったこと。

でも・・・

どうしてこんなに胸が痛むのだろう。

あ、バレー部。

窓の外に校舎の周りをランニングしているバレー部を見つける。
その列にいるあの人を探してしまう。

あきちゃん。

どうしてかな、私。

祐也のことで胸が痛くなっている時に、あきちゃんの姿を見るだけでなんだか落ち着く
の。

変だよな。

2

昼休み。

三年の教室がある廊下に来るとにぎやかな声が聞こえてくる。
四組と五組の間の窓際に、晃と関、竹田を見つける。

「椎名さん。」

話しかけてくる関。

「次の英語訳した？」

「うん、一応ね。」

晃に背を向け話していた。

背後から手が近づくのには気づかなかった。

「ひゃあああー @ @ @」

声をあげ、首をすくめる。

「あきちゃん。もーやめてよ@ @」

「はは。椎名さんすっかりあきちゃんにやられているね。」

「もー」

涙目になる。

「訳みんなやってんだな！。おれも今からやるとするか。」

予鈴が鳴る。

「じゃな、あきちゃん。」

そう言っで教室の中へ入る関。

竹田も後に続く。

廊下がざわつき、教室へ戻る者、移動教室へと向かう者が動く。皆足早に去り、ざわめきも教室内へと移動する。

そして静けさを取り戻した廊下に残っている二人。

「入らないの？」

「入れば。」

沈黙が流れる。

「じゃあね。」

と言っで教室に入る。

晃も教室へ戻る。

最近ね、この時間が楽しいの。

予鈴が鳴り、本鈴が鳴るまでの五分間。

あきちゃんとの何気ない時間。

会話を交わすわけでも、何かをするわけでもないのだけれど、この空気が私をホッとさせてくれるの。

最近増えたあきちゃんと過ごす時間。

給食準備中の五分、昼休みの五分、掃除終了後の五分。

きっかけはタケちゃんや関くんがあきちゃんと話している時に、私も一緒にいるようになったこと。

自然に皆が集まってくる四組と五組の間の廊下、窓際。窓から見える北の赤城山と青い空、白い雲。

ここで話す何気ない会話。

これからもこうしてこの窓から真夏の暑い空を見て、秋の空、冬の空と見ていくことができるのかな。あきちゃんと一緒に。

そして掃除終了後、窓際に晃の姿を見つけた。

晃、二宮、竹田、関、亮一がいる。

気づいた二宮が手招きをしている。

「もーえっ。おいで。」

二宮の横に行った。

「今、皆でカラオケ行こうって話していたのだけど、もえも行くよな。」

「う、うん！」

「よしっ。決まりだな。」

「いつにする？」

「じゃあ、中体連終わってからの方がいいんじゃない？」

「そうだな、終わってからの方がいいな。」

「夏休みだー。」

「じゃあ、二十五日で決定。」

「オッケー。」

「メンバーは？これでいく？」

「健太も。」

「おお。健太。」

廊下に出ていた健太に声をかけに行く竹田。
皆が健太の方へ視線を向ける。

健太は別の人と話しているところだった。

「なに？カラオケ？ボクも行きたいー。」

市井里美。彼女の声が聞こえてくる。

「誰がいるの？」

「メンバーはあんな感じ。」

そう言うつと、竹田が皆のいる方を指す。

市井と健太が近づいてくる。

「めぐちゃん。一緒に行くの初めてだー。よっしく。」

「う、うん。よろしくね。」

「いえーい、晃君と遊ぶの久しぶりだ。」

カラオケ？このメンバーで？

あきちゃんとカラオケなんて想像してなかったよ。

でも・・・

いつちゃん、市井里美。

彼女とは一年生の頃はよく話したっけ。

奈緒ちゃんの友達で、たまに一緒に帰ることもあったな。

彼女はボーイッシュな外見とハスキーな声、言葉づかいから男の子っぽい。

友達も男子の方が多いと聞いたことがある。

タケちゃんやあきちゃんとも仲がいいんだ。

あきちゃん、健太くん、関くん、いつちゃんは同じ蓮田小出身だものね。

晃、健太、市井の三人が話している。

あ、あきちゃん笑っている・・・。

女の子の前でも笑うんだ。

彼女は特別なのかな？

あきちゃんと健太くん、私が入りたくても入り込めなかった場所に彼女は入るんだ。

ごく自然に。

あれ？

私変だ。

なんでこんなに気にしているのだろう。

いいじゃない、別に三人が仲良くて。

今度のカラオケ、皆で行くのだし、楽しまなきゃ。

そうだよな。

中体連頑張って楽しいカラオケにしよう。

夏休みに皆で遊べるの嬉しいな。

翌朝。

四組の教室に千夏とヒロアキの三人で集まった。

「へえ。じゃあそのメンバーでカラオケ行くんた。」

「そうなの。」

「なんだか変な組み合わせだね。」

千夏の言葉に苦笑いを浮かべる萌。

「そうだ、ちなつちゃんも行こうよ。にのも関くんもいるし、私もちなつちゃんがいて

くれた方が心強いし。」

「残念、その日は先約があるの。」

「えーっ。先約かぁ。それは仕方ないよね。」

「デートか？」

ヒロアキが口を挟む。

「ピンポーン。」

「え　っ！ちなつちゃん、だ、誰と？」

「へへっ。誘われちゃったのよ。上野先輩に。」

「上野先輩？って、ちなつちゃんがカツコイイって言っていた？」

「そう。」

「すごいねー。よかったねー。付き合っの？」

「さあ。それは相手次第かな。」

「よくいうよ。」

面白くないという表情をして言うヒロアキ。

「どうせ、いつものミーハー気分だろ？相手の先輩もよく考えてから誘えばいいものの。」

「ふーんだ。デートの相手がいないヒロアキに言われてもなんとも思わないよーだ。」

「あのなー、オレは相手の先輩がかわいそうだって言ってるの。お前の事は心配してない。」

「そっかあ、ちなつちゃん一緒に行けないのかあ。残念だな。にも嬉しいがと思ったのにな。」

「え？にの？何で？」

「うつん、なんでもない。」

慌てて否定する。

「じゃあ、また今度一緒に行こうね。」

そう言つと、教室を出た。

残された千夏とヒロアキ。

「オレが一緒に行つてやろうか？」

「なんだよ。」

「我慢しちゃってー。そう言つてあげればよかったのに。めぐちゃんもきつと喜んだよ。」

「……。」

「喜ばねーよ。」

「あんたはいつもそう。そうやって肝心なところで押さないから、いつもめぐちゃんを離しちやうんだよ。」

「べ、別にオレは……。」

「損な役だよ。」

「ほつとけ。」

そう言つと、千夏から視線を外すヒロアキ。

頬が紅くなっているヒロアキを見て、楽しそうな千夏。

そして、一学期終業式の日

朝、下駄箱で晃に会った。

「おはよう。」

こっちを見る晃だが、何も言わない。

うつ・・・。

まずは挨拶を返してもらえるようにならなきゃだなんて。

でも、無視されているわけじゃないのはわかる。

おはようって声かけると振り向いてはくれるし、表情も変わる。
あきちゃんて、私とどう話していいのかわからないだけなのだった、そう思っている。

終業式は体育館で行われた。

校長先生の長い話に続き、夏休みの諸注意などの話が続く。
私は一学期を思い返していた。

校門の桜を見た春、新しいクラスにわくわくしていた。

中学校生活最後の一年を、にのやちゃん、
タケやんにけいちゃんと小学生時代の仲の良い
友達と過ごせるのがとても嬉しかった。

最高学年になり、委員会、部活とも主体的に動くことが多くなっ
た。

新しい友達も増えた頃の修学旅行。

遅くまで起きていて、みんなで語りあった。

そして、あきちゃんと少しずつ話すようになって。

祐也の事も少しずつ落ち着いていって。

噂が流れて誤解を招いたこともあった。

あつという間に夏が来て、早かったな。

先生達の話では夏休みって言っているけれど、実際は中体連が終わらないと夏休みはこないし、

中学三年の夏といえば受験を意識しなければならない時期なのだね。

高校受験かあ。まだ考えられないな。

そんな事を考えているうちに、終業式が終わった。

生徒会役員が舞台上に上がり、準備を始める。

この後は壮行会が始まる。

壮行会とは、中体連に出場する選手の意気込みを見せて皆から応援を受け、送り出される云

ば応援会のようなものである。

主に運動部の三年生が対象なのだが、これが全校生徒の前とだけあってなかなか恥ずかしい。

それぞれの部ごとに出し物を考え、この日のために準備していた。テニス部男女はウェアに着替え、ラケットを持ちスTEEジ裏に待機した。

手にはテニスボールではなく、軽いカラーボールを持っている。最後にこのカラーボールをラケットで打ち、下にいる生徒達にキヤッチしてもらう。

去年も一昨年も見ている立場だったのでこのカラーボールにはちよつとしたエピソードがあった。

憧れの先輩のボールが欲しいという女子生徒が多く、ボールをめぐって騒動に発展したこともある。

今年は誰のボールが人気あるのかな？

壮行会が始まり、一本技を決める柔道部やスクラムを組んで気合を入れるバスケット部の出し物が続く。

テニス部の出番が近づき、部長の祐也と智ちゃんが打ち合わせをしている。

二人を見ていて、今、こんなに穏やかな気持ちでいられるのに自分でも驚いている。

不思議だな。

時は過ぎてゆくものだから、私の時間もちゃんと動いていたのだな。

誰かのことを想っている。

その想いは時に叶わなかったり、方向を変えたりすることもある。でも、相手を想う気持ち、想われる気持ち、どれも大切なものだから。

それに気がつけたことだけでも私は成長できたのではないかと思う。

テニス部のステージは成功に終わった。

誰のかはわからなかったが、飛んできたカラーボールに女の子達の歓声があがっているのが聞こえた。

着替えを済ませ、生徒の列に戻るとちょうどバレー部のステージが始まった。

バレー部女子の後、男子がステージに上がる。

しかし、ステージには二人しか見当たらない。

「どーも。男バレ部長の奥居です。」

「副部長の梶原です。」

「えー、おっくんかじくんのショートコント。」

「いやー、まいったね、かじくん。うちの男バレの野郎共ときたらチャイナな奴ばっかりで。」

「かじくん、それを言うならシャイでしょ。チャイナって中国じゃん。俺達は中国人か。」

体育館に生徒達の笑い声が響く。

「そう、シャイ。それが言いたかったんだよ、シャイ。恥ずかしがりやさんばかりだね。」

「それで代わりに俺達が出ているわけだ。」

「そうなんですよ。まったく日本人たるもの恥知らず。」

「それはちよっと・・・恥知らずというより恥ずかしがりやなだけなんですよ?」

突然の二人のコントに、皆釘付けになって見ていた。

確かに、あきちゃんみたいな人がどんな出し物をするのかと思っていたけど。

あきちゃんに笑いをとらせるのは無理に近いよね。

「えー、最後に、コントではなく、真面目に試合、がんばってきます。よかったら応援に来て

ください。毎年応援が少なく、さみしい思いをしています。以上です。」

奥居の挨拶でバレー部のステージが終わった。

応援に来て下さい・・・か。

そういえばバレー部の試合って、見たことないのだね。

大抵の運動部は同じ市営競技場の敷地内で試合をしているから、自分の空き時間とかに見に

行くことがあるのだけれど、バレー部は別の所で試合しているみたいだから。

壮行会は盛り上がり、後輩達も先輩への応援に熱くなっていた。

午後からの部活の前に四組で弁当を広げていた。

「ヒ・ロ・ア・キ、通知表見　せてっ。」

「嫌だよ。」

「なんでえ？いいじゃない。減るものじゃないのだし。」

「バカにされんのわかっていて見せるかよ。」

「しないわよーばかになんて。あっ！」

突然千夏が指差した方を見るヒロアキ。

その隙に通知表を取る。

「あっ、汚ねー。」

「ほほほほー。」

二人のやり取りを微笑ましく見ていた。

「晃君。」

教室を覗く奥居と梶原。

「いないのかー。あ、椎名ちゃん。」

奥居に話しかけられた。

手招きされたので奥居と梶谷のところへ向かった。

「あきちゃ・・・じゃない、穂高くんいないけど鞆あるから戻ってくるのじゃないかな？」

「おっけー。椎名ちゃん元気してた？」

「ははは。元気だよー。おっくんかじくんさっきのコントおもしろかったよ。」

「見てくれたんだ。ま、始めはどうなるかと思ったけどね。」

「歌歌うよりは良かっただろ。」

「歌？」

「最初はね、男バレソングを作って歌おうと思ったんだよ。」

「そしたら晃君にめっちゃめっちゃ反対されてさー、試合出ないまで言われちゃったよ。」

「ははは。穂高くんなら言いそうだよね。」

「彼こそが男バレのシャイ男だからね。」

「シャイというよりはおっくんと違って目立ちたがりじゃないんだろ。あいつ地道にコツ

コツタイプだし。」

部活でのあきちゃん。

この時初めて、あきちゃんがどんな風に活動して、どんな風に仲間と会話しているのかを知りたくなった。

「おっくん、試合ってどこでやるの？」

「おっ、見に来てくれるの？」

「わ、わからないけど、じ、時間が合えば・・・。」

奥居が返事をする前に、晃が戻ってきた。

「晃君、今日は一時半になったから。」

「わかった。」

「そういや椎名ちゃん髪はっさり切ったね。」

「おっくん、その話古くね?」

「ははは。確かに。」

明るい性格の梶谷と奥居との話しにはいつも笑顔が出てくる。

何も喋らないが隣には晃がいる。

用事が済んだから去ってしまおうかと思っていたが、この場に残ってくれたことが嬉しかった。

奥居と梶谷と別れると、晃と二人になった。

教室の中では千夏とヒロアキが今度は弁当の中身でからかい合っている声が聞こえてくる。

不意に晃が首元に手を伸ばす。

「ひゃあああー @ @ @」

声をあげ、首をすくめる。

「あきちゃん。もうやめてよ @ @」

もう最近では会えば必ずといって良いほどこれをされるようになってる。

しかも無言で。

人の弱みに付け込むタイプなのかしら。
でも・・・

あきちゃんにされるのはそんなに嫌じゃないの。

くすぐつたいし、緊張高くなるから本当は嫌なのだけど、でも、あきちゃんの方からかわ

つてきてくれることが、今はなんだか嬉しかったりする。

晃の顔を見上げる。

晃もを見る。

珍しく、先に口を開いたのは晃だった。

「おっくんと仲いんだ。」

「あ、うん。おっくんとかじくん、小学校の時にね、けっこう話していたよ。中学に入ってからは今久しぶりにあんなに話したかな。」

「ふーん。」

そう言つと、自分の席に向かう晃。

後から続いた。

千夏とヒロアキ今度はの弁当を狙っていた。

「めぐちゃん、トマト食べてあげるから、卵焼きちようだい？」

「しいな、通知表見せるから春巻きくれ。」

「あのねー。通知表はいいよ別に。」

二人が満足そうに弁当に手を伸ばしている。

晃の席に近づき、話しかける。

「あきちゃんは通知表どうだった？良かった？」

「見るか？」

意外な答えに驚く。

「え？いいの？」

「おまえのも見せろよ。」

「え、だってあきちゃんの方が頭いいし」

「あれ？」

「あれ？・・・」

手に持っている通知表と、晃の顔を見比べ、驚きの表情を隠せない。

「絶対評価じゃないからな。おまえみたいに愛想のいい奴の方が得をするってこと。」

「あきちゃん、いこーぜ。」

関が顔を出す。

通知表をしまい、出て行く晃。

「椎名さん、バイバーイ。」

「うん、バイバイ。」

笑顔で手を振った。

しかし関と晃が去った後、表情を曇らせる。

「おまえみたいに愛想のいい奴の方が得をする」か・・・。

あきちゃんは私のことそういう風に思っていたのか。

なんだろう、この気持ち。

私、シヨック受けている。

あきちゃんに、私はどう映っているのか。

じゃあ、私はあきちゃんのことをどう思っているの？

中体連一日目

七月二一日。忘れられない日になる。

二日間行われる中体連。

我テニス部は男子が一日目、女子が二日目に試合をする。

本日の女子部員は、男子の応援をする者、自身の練習に励む者に分かれた。

私はテニスコートの応援席にいた。

目の前では祐也がプレーをしている。

がんばって。祐也。

素直に応援する気持ちでいっぱいだった。

テニス部に入部したことがきっかけで知り合った祐也。

二年になると同じクラスになった。

同じ委員会を努めることになった。

委員会と部活を掛け持ちした日々。

早起きして一緒にがんばった朝練。

祐也の存在が大きくなって恋もした。

祐也とテニスを通して関わってきた二年と少し。

今日で最後の試合。

そう、最後の

「あーあ、祐也先輩のプレー観られるのもこれが最後なのかあ。」

隣の応援席には別の部の二年生が観に来ていた。

「私は長谷部先輩のプレー好きだったのー。」

「あんたはプレーじゃなくて長谷部先輩が好きなのでしょ。」

「だってー、かつこいいんだもん。」

後輩たちの会話が耳に届く。

「あーあ、好きな人のプレーがもう観られなくなっちゃうなんてね。」

「でも、今日観られてよかったー。」

「練習サボっちゃったけどね。」

「先輩に怒られるね。」

「いーの。最後の試合だもん。観られなくて後で後悔するよりいいもん。」

後悔

その言葉が胸をチクリと刺激する。

あきちゃんのプレー！。

あきちゃんが培ってきたもの、観たいと思わない？

この先観たくても、観られなくなるのだよ。

観たことのないもの、だから別に今頃になって観なくてもいいのかもしれない。

でも、観たことがないから観てみたい。

今しか観られないもの。

今観る必要があるもの。

「めぐちゃん、この後どうする？練習戻る？」

隣の奈緒に話しかけられるが、聞こえていなかった。

「めぐちゃん？」

「・・・奈緒ちゃん。」

「ん？」

「奈緒ちゃんは今、好きな人とか気になる人いる？」
「ええ？ど、どうしたの急に。」

驚いて顔を見る奈緒。

「今はいないけど・・・？」

「じゃあ、もし、もしいたら応援に行っている？やっぱり最後の試合だし、観に行く？」

「めぐちゃん・・・今、そういう人がいるんだ？」

「う、うん。気になっている人はいる・・・カナ。」

「そっかあ。じゃあ行ってきたよ。試合、勝てるように応援してきな。」

観てみたい。

気になっているもの、自分の気持ち。

あきちゃんの姿を。

後悔したくないから

「うん。ありがとう、奈緒ちゃん。行ってくる。」

荷物を抱え、席を立つ。

不思議。

こんな風に考えることができるなんて。

こんな風に行動することができるなんて。

気になっているから？

わからない。

でも、今は前に進みたい。

答えはあとからついてくるものだから。

きつと・・・

足早に競技場の外に出る。
出入り口で陸上部の部員と会った。

「にの！」

慌てて二宮を見つけ、声をかける。

「もーえっ。どした？」

「バレー部の試合ってどこでやっているか知っている？」

「バレー部？ 関くんが今日とは言っていたけど・・・場所までは：うゝん@@」

「はいっ、知ってるよ。」

二宮の後ろから市井が答える。

「第四中だよ。」

「第四中かぁ。遠いよね？」

「そうだなー、車でしか行った事ないけど遠いな。」

「めぐちゃん応援に行くの？」

「う、うん。なんか、最後だし観ておきたくて。」

「ふーん。」

「困ったなー。おれ今日は足合わせがあるからどうしても練習抜けられないんだよな。一緒に緒に行つてやりたいけど・・・」

「ううん、大丈夫。」

「一緒に行くのか？」

「えっ？」

市井の発言に驚く。

「もう練習ないし、晃君達応援に行きたいし。」

「そうか、市井お願いできるか？もえは方向音痴だからさ、一人で
行かせるのはかなり心

配なんだ。」

「おっけー、まっかせといて。」

え、え、ちょ、ちょっと待ってよ。

確かに私は第四中の場所知らないし、遠いし、方向音痴だけど・

いっちゃんと一緒に行くの？

なんだか変な展開に・・・

といっている間に、二人の自転車は進み始めた。

いっちゃんが前を走り、私は後ろを付いて行く。

「晃君達応援に行きたい」か・・・。

バレー部員の中であきちゃんの名前が出てきた。

仲がいいから？

いっちゃんは、あきちゃんのことどう思っているのかな？

自転車で四十分の距離に第四中学校はあった。

駐輪場にはたくさん自転車が停められていたが、蓮田中のステ

ッカーが貼られたものはなかった。

「ボク達だけみたいだね、応援に来てるの。」

体育館に近づくと、歓声が聞こえてくる。

扉は空けられた状態で、中には眩しいほどのライトを浴びた選手
達の姿が見えた。

中に入る

練習中の両校の選手がいた。

晃の姿を目で探す。

あ。

初めて見るユニフォーム姿。

初めて見るプレー。

初めて見る真剣な眼差し。

どこか緊張している表情。

額から零れ落ちる汗。

あきちゃん、私観にきたよ。

気づいて欲しい、私に。

奥居と関が二人に気づき、駆け寄ってくるのが見えた。

「来てくれたの？」

「これまた意外な組み合わせだね。」

「なんだよそれー。おっくんがんばれよー。」

「遠かったでしょ。ごくろう。」

「椎名さん、応援よろしくねー。」

「うん、がんばってねー。」

奥居と関が練習に戻る。

晃は一度こちらを見たが、そのまま練習を続けていた。

二階に上がり、応援席を探す。

さすがに他校だけあって、応援席は第四中の生徒で埋め尽くされていた。

私達は蓮田中側のコートが見える立ち見の場所を選び、試合が始まるのを待った。

そして試合が始まる
初めて見る試合。
サーブ。
速い。
ボールが返され、高く上がる。
一回、二回、三回。
スパイク。
拾う。
上げる。
トス。
アタック。
決まる。
何度繰り返されただろう。
点数が入るたびに揺れるハチマキ。
一つに集まる選手達。
喜び。
悔しさ。
緊張。
タイム。
監督からの飛ぶ声。
額の汗を拭う選手たち。
熱気に溢れるコート。
気合を入れる。
一セット、また一セット・・・
開く得点差。
追い続ける。
一点、また一点。
床に落ちる選手たちの汗が
やがて涙へと変わっていった。

祈るような気持ちで見ていた。

ルールなんてわからない。

それでも、一点一点、一動作を目で追いかけた。

一瞬を逃さないように。

あきちゃん、

私はあなたのことが好きです。

あなたの最初で最後のプレーを、目に焼き付けた。

追いつけるボールの先に、眩しいライトの光が差していた。

最後まで諦めず、一生懸命追いかけたあなたの姿は、

観ている私に感動を与えてくれました。

勝って、おめでとうって言いたかった。

なんで観になんか来たんだ。

そう言われそうで恐かった。

だから……

何もいえなかった。

会場の体育館を出ると、照りつける真夏の太陽の中、体の中はどこか冷え切っているかのように感じていた。

体育館の片隅で、肩を震わせ泣いている選手たち。

男の子が、泣くのを見るのも初めてだった。

いっちゃん、あきちゃん、関くんの側に駆け寄り声をかけている。

涙を手で拭うあきちゃんの横顔が見える。

私は……側に行くことはできなかった。

一度だけ、振り返ったあきちゃんと目が合った。

あの時の、若く、幼く、力強い眼差しを
私は忘れない。

この日、予感をはじめりに変わった。

4・夏の思い出

七月二五日。

前日から緊張していた。

ベッドの上にたくさんの服を並べ、何度も着ては試した。

洋服も、バックも、靴も、髪型も、いつも以上に緊張した。

初めて見せる私服だから、見て欲しいから。

ドキドキした。

でも嬉しかった。

こんな自分もいるのだと、新しい自分を発見したような気持ち。

好きな人がいる。

この想いだけで自分が頑張れそうな気持ちになれるのだ。

不思議だね。

午前中は学校へ行った。

夏休みに入ったこともあり、校舎内には静けさが広がっている。

中体連が終わり、部活動を引退した三年。

これからは夏の受験勉強とも言える夏期講習が始まる。

学校でも自由参加の講習会が開かれていた。

今日はその初日。

初日だが、出席率は良くはなかった。

中体連の疲れもあるのだろうか。

そこに晃の姿も見られなかった。

午後はカラオケに行く約束をしている。

午前の講習で顔を合わせることを期待していたのにな。

晃の姿がないことに、戸惑いと不安を抱く。

そして午後、

カラオケには歌う順番が回らないほどの人数が集まった。

当初のメンバー以外にも、午前中、学校の講習に来ていた人達が話を聞き、加わっている。

中体連の打ち上げと、夏休みのはじまりということで歌や飲み物で盛り上がる。

晃とは座る席が離れた。

晃の両隣では、市井と健太が楽しそうに話をしているのが目に入る。

せっかく一緒に遊んでいるのに、一言も話せないなんてショックだよ。

あきちゃんのこと、好きだと自覚したのはいいけど、前途多難だよ。

でも、あきちゃんの私服姿見れて嬉しいな。

Tシャツにジーンズ姿のわりとラフな格好。

私のことも見て欲しかったな。

「もえっ、何歌う？次入れな。」

二宮からリモコンを手渡される。

「もえ、これ歌って。I BELIEVE。」

隣に座っている亮一が曲本を指差して言う。

「え、いいよお。」

「椎名さんってどんな曲歌うの？聴きたい。」

歌う順番が来て二宮が前へ出て行くと、関が隣へと移動してきた。前奏が流れてくる。

聴き慣れている二宮の歌声だが、ふと気がつく。
あれ？

にのつてこんなに歌上手かった？

しかも今日、今までにない大人数で大きな部屋で。
いつもは四、五人でしか来ることのないカラオケ。
こんな十数人も前で歌うだなんて。

う。

歌いづらい・・・

今更気づいても遅いか。

「椎名さんの私服って初めてだね。」

「えっ、あ、うん。」

「俺も思った。」

いつの間にか隣に座っていたはずの亮一が席を立ち、北山が座っていた。

「・・・うじゃん。」

「えっ？なに？」

「だから・・・合っじゃんって言ったの。」

「ごめん、北山くんよく聞こえない。」

周囲の盛り上がり、隣に座っている人との会話も聞き取れなくなっている。

「だ、か、ら」

そう言つと肩を引き寄せ、顔を近づけて耳元で話す北山。

「おい、そこっ。近づきすぎ。」

マイクを通して話す二宮。

二宮の声にハツとして北山から顔をそらした。

「キタ、もえから離れる。もえが困ってる。」

「はいはい。」

両手を上に上げて離れる北山。

マイクに入った二宮の声で、周囲の視線がこっちに向いた。

「と、トイレ行ってくるね。」

そそくさとその場を離れた。

び、びつくりしたあ。

あまりに突然だったからわからなかったけど、接近していたのね、私達。

．．　　なんか、今思い出すと耳の辺りに変な感覚が甦ってくるのだけど．

北山くんって小学校は同じだったけど、今まで全然話したことなかった。

にのに助けられた反面、皆の前で恥ずかしかったな。

カラオケ店はボックスタイプなので、部屋を出ると外に出る。

部屋から少し離れたところで一人になった。

後ろから髯が近づいていることには全く気づかなかった。

「ひゃあああー @ @」

声をあげ、首をすくめる。

「あきちゃん？」

「びっくりしたあー。」

「戻らないのか？」

「あ、うん。ちよつと暑くなつて・・・外で涼もうかと。」

あれれ？

私は何を言っているのだろう。暑いから外で涼む？外も暑いではないか。あわわわわわ。

突然二人きりになり、驚きと嬉しさに言葉が詰る。

何も言わない晃。

沈黙が走る。

「あきちゃんは、何か歌わないの？」

「・・・。」

「聴きたいな、あきちゃんの歌。どんな曲歌うの？」

「別に。カラオケ好きじゃないし。」

ショックを受けた。

好きじゃないのに来たの？

あきちゃんとカラオケ行けるのすごく楽しみにしていたのにな。一人で盛り上がって・・・なんか勘違いしていた、私。

「好きな奴いんの？」

「えっ？」

突然の言葉に驚く。

「今いるのか？」

な、なんでそんな話に・・・

急に言われても、しかも本人にそんなこと言われても困るのですけど。

どうしよう、いるって言うてもいいのかな。

「い、いる。」

小さい声で答えた。

「ふーん。」

そういうと再び口を閉ざす。

何も言わず階段に腰を下ろす晃。

その隣に腰を下ろす。

「歌、楽しいか？」

「え？あ、カラオケ？」

「楽しいよ。テストとか終わるとストレス解消によく来るよ。部活では大会とか終わると皆で来て、勝ったら歌う歌、負けたら歌う歌があつて」

ハッとして話すのをやめる。

あ、まずかったかな。

部活のこと、中体連のこと、思い出したくないよね。あー、さっきから自分の発言が恥ずかしい。穴があったら入りたい。

せっかく今日話できているのに、これじゃあ・・・

「名前、なんでもえなの？」

続けて話しかけてきたことに驚く。

「めぐみだよ。」

「知ってる。」

「あ、そっか。」

慌てて答え、会話を繋げる。

「ずっとか？」

「うっん。小学校の時にね、私転入生だったのだけど、先生が黒板に名前を書いたのをね、当時にのが“しーなもえ”って読んだの。ほら、って、もえとも読むでしょ。それからだよ。」

「ふーん。」

「今でもそう呼ぶ人は少ないけどね。にのと亮ちゃんくらい？」

緊張のせいかな早口になっている上、自分でも何を言っているのかよくわからない。

「あ、あきちゃんは何て呼ばれていたの？」

「とくになし。」

「え？そうなの？」

「おまえに付けられたのが初めて。」

「あら。じゃあおうちでは？」

「あだ名なんてねーよ。男三人兄弟だし。」

「あ、そうなんだ。三人兄弟なんだ。真ん中？」

「一番下。」

「兄弟多いといいね。私お兄ちゃんが欲しかったんだ。」

「別に。仲良くねーし。」

うっん。

もしかして私さつきからタイミングの悪い会話しか出来てない？
あきちゃんの兄弟の事知れて嬉しかったのに、自分から会話壊し
ている気がする。

いっちゃんの様に、楽しく話せないのかな。

あきちゃんともっと話したい。

あきちゃんのこともっと知りたい。

「あ、晃君こんなところにいたー。」

市井がやってきた。

「めぐちゃんの曲、もうすぐまわってくるよ。」

「あ、うん。じゃあ、戻るね。」

そう言って立ち上がる。

立った後、晃の隣には市井が腰を下ろし話始めていた。
楽しそうに話す市井に、晃も応えている。

部屋に戻ると、『I BELIEVE』の前奏が流れていた。

「もえっ、歌えー。」

「椎名さん、いえーい。」

周囲の盛り上げに笑顔で応える。

一曲歌い終わると、関に手招きで呼ばれた。

関の隣には戻ってきた晃が座っていた。

「椎名さん、歌うまいねー。」

そう言うと、一つ横に移動して自分と晃との間をあけた。

招かれるまま、二人の間に座った。

「歌いづらいよ、だってこんな大人数。」

そう言って関と話すが、隣にいる晃のことが気になっている。

「ははは。椎名さん歌うと声違うね。ね、あきちゃん。」

晃に話を振る関。

「ああ。普段の声と違うな。」

「そ、そうかな。」

歌を聞かれていたことを知り、恥ずかしくて目をあわせられない。

「何か飲む？コーラかな。」

テーブルに置かれているジュースの中からコーラを取り出す関。

「うん。ありがとう。」

炭酸が苦手だが、関の親切心に気遣って何も言わず受け取ろうとする。

「こいつは炭酸飲めない。」

そう言っつと晃が手を伸ばし、ジュース類の中からオレンジジュースを手に取り前に置く。

「そうなんだ、椎名さん炭酸だめなの？」

「う、うん。」

「他には？ダメなのある？」

「うん。コーヒーが苦手。」

「そっか、覚えとくねー。でも炭酸飲めなくてコーヒー駄目で、飲めるの少ないね。ってか、あきちゃんよく知っていたね。」

「前に聞いた。」

ほんとに。

嬉しかった。

自分でも話したの覚えていないのに、あきちゃんが覚えていてくれたなんて。

すごく嬉しかった。

その後も歌う人、外に行く人で席の入れ替えが繰り返された。

隣の人の声さえも聞き取れないほどの盛り上がりで、それからあきちゃんと話せることはなかった。

でも、同じ時間を過ごせたことが嬉しかった。

今日、来れて良かった。

楽しかった。

七月二六日。

登校日。

四組の教室で千夏、ヒロアキの三人で話していた。

「めぐちゃん、昨日カラオケどうだった？楽しかった？」

「うん。選択美術の人ばかりだったよ。ちなっちゃんも来ればよかったのに。あ、で、上野先輩とはどうなったの？」

「告られたよ。」

「えーっ。」

ヒロアキと二人同時に驚く。

「すごいねー、ちなっちゃん、返事したの？」

「ううん、考えさせてって言った。」

「へえ。物好きな奴もいるもんだ。」

「なに？ヒロアキ。」

「ヒロアキ、ちなっちゃんはかわいいよ。だからもてるのだよ。」

「どーだかね。」

「あんたこの間から突っ掛かってくるじゃない。自分の恋が上手く行かないからってひがむのはやめてよね。」

「北川っ！」

千夏の発言に慌てて反応するヒロアキ。

「なに？恋って…ヒロアキが？好きな人いるの？」

「どうでしょう。本人に聞いてみたら？」

楽しそうな表情で答える千夏。

「北川、覚えてろよ。」

「えー、誰？誰？私の知っている人？ヒロアキいつの間に？」

「い、いねーよ。北川が勝手に思い込んでいるだけ。」

視線を外し答えるヒロアキ。

「そうなの？」

「そうなの。」

「ほんとに？」

「本当に。」

強い口調で答えるヒロアキ。

「なーんだ。本当だったら私協力したのに。ヒロアキ、そういう人できたら言つてね。」

「あ、ああ。」

「協力できるかしらね。」

「きーたーがーわーっ。」

からかっている千夏の首をしめるヒロアキ。

二人のやり取りを苦笑いで見るしかなかった。

「そついえば、めぐちゃんはどうなの？」

「えっ？」

「最近どう？気になる人とかできた？」

「え、えつと、んー・・・」

突然話を振られ、戸惑う。

その時、晃が登校してきた。

「あ、ちょっと待ってて。」

二人に言うと、晃の方へ近づいていく。

「あきちゃん、おはよう。」

返されないとわかっていても、挨拶をする。
自分の席に行き、鞆を降ろす晃。

「はよ。」

返ってきた。

初めて。

嬉しいな。

昨日遊べたことで、少しは私のこと知ってくれたのかな。
たった一言の挨拶が、こんなにも嬉しいなんて。

笑顔を浮かべて戻ると千夏が声をかける。

「めぐちゃん、さっきの話、気になる人できた時は教えてよね。」

「あ、うん。そうだね。」

「ヒロアキもね。」

わざとらしく言う千夏。

「うるせーよ。」

「めぐー、ちょっと来てー。」

五組から恵子が呼んでいる。

「じゃあね。」

そう言つと教室を出た。

「ねえヒロアキ。」

「今度は何だよ。」

「めぐちゃんに新しい好きな人ができたらどうするの?。」

「あ?どうするって...」

「だから、めぐちゃんはもう祐也くんの事は引きずってないってこ

と。そしたらそろそろ新しい恋をするんじゃないかって。」

「・・・しいな、祐也の事ふつきれてんのか？」

「そおね。あたしにはそう見えるよん。」

「でも祐也は・・・まあいいや。その話は。」

「ヒロアキ、そおやって人に気を使っているといつまでたっても恋は実らないよ。」

「だからオレは別にそんな気はないって言ってるんだろ。」

「ふーん、そおなんだあ。」

「晃君はどう思う？」

一列離れたところに座っていた晃に話しかける千夏。

「おいつ、なんで晃君に話を振るんだよ。」

慌てて千夏を止めるヒロアキ。

振り向く晃。

「あいつを好きな奴けっこう多いんだな。」

答えた晃に対して満足そうな笑みを浮かべる千夏。

「でしょっ。」

「おいつ、オレは別について言ってるんだからな。」

「面白くなりそうね。」

「面白くねーよ、北川あんま暴走するな。頼むから。」

「晃君悪かったな、北川が変な事言って。」

「いや。」

渡り廊下を歩きながら昨日の事を思い出し、考え事をしていた。
「好きな奴いるのか」・・・か。

なんであきちゃん、そんなこと聞いてきたのだろう。

あまりにも突然で・・・

私があきちゃんの事好きだと自覚したのは引退試合を見に行った日で。

あれからまだ三日も経っていない。

そんな昨日の今日でその本人から聞かれるとはまさか思わない。

しかも・・・

“ドンッ！”

曲がり角を曲がるところで、反対側から来た人とぶつかった。その人が抱えていたプリントが廊下に散らばる。

「ごめんなさいっ。」

慌ててプリントを集める。

「萌ちゃん、大丈夫だった？」

かけられた声に驚き、顔を上げるとぶつかった人はなんと祐也だった。

「あ、ごめんね。いま拾う。」

「いいよ。それよりどうかした？考え事でもしてたの？」

「ごめんね。前見てなかった。ごめんね。」

「萌ちゃんさつきから謝り過ぎ。」

全部拾い終わり、祐也に手渡すとその場から去ろうとした。

「萌ちゃん、」

呼び止められ、足をとめる。

「夏休み、どうしてる？」

「えっと、学校と塾かな。」

「学校の講習受けているの？」

「うん、出ているよ。」

「国・社・英の方？理・数・英？」

「国・社苦手だから文系コース。」

「そっか。じゃあ俺も文系にしよう。」

そう言うと言ってしまふ祐也。

少しづつ・・・

祐也とも普通に話せるようになっていたらいいな。

私の好きだった人。

悲しいこと、つらいこともあったけれど、今は・・・

次の恋を進めていきたい。

同じ過ちは繰り返したくない。

受け身の恋ではいけないとわかっているけれど、でも今は、まだ
はじまったばかりのこの恋を大切にしていきたいの。

五組。帰りのホームルーム。

「次の登校日は模試になっているので、十分勉強しておくように。
いいか、この大事な夏を充実して過ごせるかどうかによって、秋に
は実力に差が出るからな。しっかり勉強するんだぞ。」

担任間中の話が続く。

夏なので風が通るよう、教室の扉と窓は開けたままである。

廊下に笑い声とともに四組の生徒が出てくる。

あ、四組終わったんだ。

あきちゃん、帰るかな。

今日は結局朝しか会えなかったな。

でも、挨拶返してくれて嬉しかった。

明日は学校で会えるかな。

選択美術の課題、いつやるのかな。

今度はいつ会えるかな。

長い夏休みのはずだけど、でもあきちゃんと会える日を期待することでなんだかワクワクしてきた。

放課後。

五組に集まってきたのは選択美術のメンバー。

話題は昨日のカラオケ。

「いやー盛り上がったよなー。」

「楽しかったな。」

「つてか歌いすぎだよにの。」

「最後はにのオンステージ化していたよな。」

「ははは。」

「にののお陰で順番まわってこなかったし。」

「でもにのの歌サイコーだよな、笑える。」

「またいこーぜ、同じメンバーで。」

「おお、行こう行こう。」

「いつにする?」

「そつえばあきちゃん歌ってなかったな。」

思い出したように亮一が言う。

廊下側の席で一人委員会の仕事をしながら皆の会話を聞いていた。そういえば・・・そうだね。

結局あきちゃんの歌、聞けなかった。

カラオケ、好きじゃないって言ってたっけ。

でも来てくれたのだよね。なんだか悪い気がする。

「あきちゃんはさ、シャイだから。恥ずかしがりやだからさ。」

と言う関。

「で、次いつ行く？いつにする？」

日程を決めたがる北山。

「カラオケにする？あきちゃん誘う？」

「皆で行けばいいんだから、カラオケじゃなくてもいいんじゃない？」

「そうだな。」

「別のにするか。」

「ボーリングは？」

「おっ、いいねー。」

「賛成。」

二宮の発言に皆が賛成する。

「椎名ちゃんも行くよね？」

突然北山に大声で話しかけられ、驚いた。

「う、うん。」

離れたところから返事を返す。

「いえーい、決まり。」

「もえはおれが後で誘おうと思ったのに。」
「まあまあ、にの。」

北山に先を越され、ふくれる二宮。

「夏祭りも行かないか？」

「花火もー。」

「いいねー。」

「じゃあ、八月三日の夏祭り行こつぜ。」

「ボーリングは？」

「後日か？」

「また決めればいいじゃん。」

「俺ら遊んでばっかじゃん。受験生らしくねー。」

「いーよ、もうその話は。耳にタコ。」

「だね。」

「中学最後の夏だぜ、思い出作ろー。」

教室に竹田が入ってくる。

皆のところには行かず、萌の座っている前の席に腰をかける竹田。
シャーペンを持つ手をとめ、顔を上げる。

「今ね、皆が今度は夏祭りとボーリングに行こつて話しているよ。」

笑顔で経過を伝える。

「いつ？」

「八月三日のお祭り。」

「へー祭りか。」

「あきちゃん、誘える？」

少し声が小さくなる。

「誘ってみるよ。」

「あと、カラオケは好きじゃないって言っていたから、ボーリングは来てくれるかなって思ってた。」

「彼はボーリング得意だよ。」

「ほんと？良かった。」

表情に笑みが戻る。

「晃がお前のこと気にしてる。」

「えっ？」

と言った瞬間、すぐ横に晃が姿を見せる。

廊下側の席に座っている二人に、窓から顔を覗かせた。

「八月三日、夏祭りだった。」

竹田は晃にそう言っていると、鞆を持って教室を出て行く。
帰っていく二人。

言うだけ言って帰ってしまった竹田。

えっ？

どういうこと？

「晃がお前のこと気にしてる」・・・。
どういう意味？

眠れなかった。

昼間のタケやんの言った言葉が気になって
気にしてくれている。

嬉しい。

そう捉えてもいいの？

好きな人に、気にしてもらえている。

でも、それをどうしてタケやんが言うの？

それにあきちゃん、あの時私とタケやんの会話、聞こえていた？
ならどうして？

謎が深まるばかり。

七月二十七日。

夏期講習を受けるため学校へ行った。

「あれ？もえ寝不足？くまできてるよ。」

「えっ、う。うんちよっと。」

二宮に指摘され、戸惑う。

「大丈夫か？試験勉強？」

「うっん、大丈夫。」

さすがにの。

長い付き合いだけあって、鋭い観察力。
結局昨日考えていたら全然眠れなかった。

しっかりしなきゃね。

にのの言う通り、明日は模試なのだから。

余計なことは考えないで、勉強に集中しなきゃ。

とはいうものの・・・

意識してしまっている私。

だって・・・

今日は講習にあきちゃんが参加している。

それだけでなく、気のせい？

あきちゃんと目が合うの。

講習中、あきちゃんのいる方を見ると、あきちゃんと目が合う。

あきちゃんも、私の方を見てくれているの？

それとも私のいる先を見ているだけ？

恥かしくて、私は視線を外してしまう。

すごくドキドキしている。

休憩中。

あ、まただ。

皆で話しているのに、あきちゃんと目が合う。

嬉しいような、恥ずかしいような。

隣にいた亮一が席を立つと晃が隣になった。

聞いてみようかな、昨日のこと。

悩んでいても前に進めないし、気になるし。

「あ、あのね、あきちゃん。」

話しかけられ、こっちを向く晃。

「き、昨日のことなのだけど」

あれ？

私今まであきちゃんと話す時、目、合わせていた？
あきちゃんは私の目を見て会話していた？

あれれ？

今までどうしていたのか思い出せない。

私どんな顔して話していたのだろう。

私、いまだんな顔して話せばいいのだろう。

恥ずかしくて目が合わせられない。

顔が見られない。

「な、なんでもない。」

慌てて言葉を取り消す。

首から上がみるみる熱くなっているのを感じる。

講習再開の声がかかり、その場を去る。

だめだ。うまく話せない。

なんでだろう。

目が合つと恥ずかしくて緊張して、意識し過ぎてしまつよ。

午前の講習が終わる。

片付けていると背後から手が伸びてくる。

「ひゃあああー @ @」

声をあげ、首をすくめる。

「あきちゃんやめ」

後ろを振り返り驚く。

そこにいたのは晃ではなく北山だった。

「椎名ちゃん首弱いつて本当だったんだ。」

笑顔で立っている北山。

「あ、うん。」

「この間あきちゃんがやっているの見てさ、おれもやってみようかなーなんて。」

「そ、そう。」

突然のことに驚いた。

「これ。」

二人の間にプリントが手渡される。

ハッとする。

首に手をかけられた反射でプリントを落としていた。
拾ったのは晃だった。

「ありがとう。」

何も言わずに教室を出て行く晃。

「もえー、帰るぞー。」

二宮に呼ばれる。

「あ、うん。」

あきちゃん以外の人に首やられるの久しぶり。

くすぐりたいし、驚いたけど、なんか違う感じがした。

あきちゃんじゃない人だったから。

あきちゃんに首さわられるのは嬉しかったのに。

あきちゃんはどう思ったのかな？

あきちゃんの事ばかり気になっている。

私、今日おかしい。

七月二十八日。

今日は外部の模試試験を受けに行く。

校外試験なので県内から受験生が集まってくる。

会場までは電車で移動した。

行きは緊張もあつてなかなか会話が進まなかった。

あきちゃんとも別々の車両に乗っていた。

見慣れない制服を着た他校の生徒も乗っている。

どの生徒も、この試験のために勉強してきたのだ。

そして来年からは同じ高校に通うことになるかもしれない仲間が。

すぐに試験時間はやってきた。

一教科五十分の試験時間。

午前3教科、昼休みを挟んで午後2教科。

昼休みになると弁当を持って皆集まった。

「うひー、国語死んだ。」

「やばいね、難しい。」

「四択だったからある意味助かった。」

皆疲労がにじみ出ている。

校内のテストとは違い、雰囲気にも馴染むのに時間がかかる。

「こういう機会、増やした方がいいかもな。」

「次の外部試験も申し込むか。」

「慣れないとだな。」

二宮、亮一、千夏と昼休みを過ごした。

晃の姿は見れなかった。

別の教室にいるのかな。

教室内を見渡すと、同じ学校の生徒を見つける方が難しかった。制服で見分けることしかできないが、数十校の生徒達がいる。

高校生……か。

やがて皆別々の高校へ進学する。

ちなっちゃんも、にのも、亮ちゃんも、高校別々になるのかな。

あきちゃんとも……

なんだか今は考えられないな。

「はい、そこまで。鉛筆を置いて。」

教室内がざわめく。

ぴんと張り詰めていた緊張感から開放される。
やるだけの事は全てやった。

帰りの電車も他校と一緒にになったこともあり、大変混雑していた。

「ちなっちゃん、大丈夫？」

「な、なんとかあ@@」

すし詰め状態の車内の中で、背の低い千夏は苦しそうである。

「千夏、もえ、こっちおいで。」

二宮に壁側を譲ってもらう二人。

「ありがとう、にの。ちなっちゃん平気？」

「うひい。」

「かわいいーな、千夏は。ちっこくて。」

嬉しそうな二宮。

「う、うるさい。」

顔を膨らませ、答える千夏。

見渡すと、背の高い二宮をはじめ、関、晃、は周囲より皆頭一つ分出ている。

人間壁の間に入れたお陰で、なんとか立てる場所を確保できた。

つかまるところがなく、電車が揺れるたびに二宮に寄りかからざるを得ない千夏。

その度に満足そうな表情をする二宮。

それを悔しそうにしている千夏。

二人を見ていて微笑ましくなる。

にのは、ちなっちゃんの事好きなのだなあ。

きつと、ちなっちゃんにも伝わっていると思う。

ちなっちゃんはにのの気持ちを知っていて、それでも堂々として

いる。

確かにちなっちゃんは見回目小さいけど、すごく勇気がある女の子。

いつも一生懸命で、まっすぐで。

恋愛もそう。ちなっちゃんは恋も多いだけあって、経験も多い。

そういえば、この間の先輩とはつき合うのかな？

にの、知っているのかな。

人を想う気持ち。

例えその人に届かなくても、その想いは大切なものだとならわかるよ。

晃を見上げる。

窓の外を見つめている晃。

あきちゃん、今日は目が合わなかったね。

あきちゃんはどんな想いを持っているの？

どんな人を好きになるの？

どんな恋愛をしてきたの？

知りたいな。

あきちゃんのこと、もっともっと。

夏はいつも暑いけれど、

毎年炎天下の中のテニスも辛かったけど、

今年の夏はなんだか特別。

色々な活動を通してさまざまな感情を知る。

長い夏休みも、受験生にとって大事な時期も、今はこうして仲間と共に過ごせていることにうれしく思う。

私の居場所。

心地よいところ。

最寄り駅に着く頃には、辺りはすっかり暗くなっていた。
同時にお腹が空いてきたと男子達は駅の立ち食いそば屋に駆け込んでいた。

先に千夏が帰ったので、一人でにの達を待っていた。

あれ？

なんだろう、あそこ光っている。

光物を見つけ一人暗闇の方へ歩いていった。

そばに夢中で気づいていない二宮。

光物の正体を見つけ笑顔で振り返る。

「ねえー見てー・・・」

言葉が消えていく。

振り返ると、そこには晃一人だけが見ていた。

そばを食べている男子達の中で、晃だけが。

体に緊張が走る。

あ。

今気づいた。

今までは私があきちゃんを見ているばかりで、目で追っただけで、あきちゃんが気づいていなくても、振り向いてくれなくても、見ているだけで満足だった。

挨拶を返されなくても、挨拶することが楽しかった。

でも、いまは違う。

あきちゃんも私を見ている。

あきちゃんが私を見ている。

変だな、私。

向き合った途端に恐くなっている。

見られていることが恐い？

いままで、きちんと男の人と向き合った経験がないから。

あきちゃんは、男の人なんだ。

こんな時、どうしたらいいのかわからない。

八月三日。

今日は皆で夏祭りに行く約束をしている。

五日ぶりの学校だった。

自分の塾の夏期講習や用事が重なり、学校の講習に出られない日、出ていない時間帯があつてあきちゃんとは校外模試試験以来会っていないかった。

「お、おはよう。」

教室に入ってきた晃に、少し緊張気味に挨拶した。
何も言わずに荷物を置く晃。

「椎名ちゃん、おっはよー。」

「ひゃあ@@@@@」

挨拶に加え、首をくすぐる北山。

「北山くん、やめてって言っているでしょ。」

最近、北山くんにくすぐられることが多くなっている。

あきちゃんは、全然やらなくなったな。

いい加減飽きたのかな？

でも、ちょっとさみしいかな。

あきちゃんとかかわりがまた一つ減った気がして。
あ、さっき挨拶返してもらえなかったし。

ショックを受けているところに明るく近づいてくる北山。

「今日楽しみだねー。祭り。椎名ちゃんの私服姿も楽しみだ。」

「キタ、それはどういう意味？」

「今日はどんなの着てくるの？」

「椎名さんの私服ってどんな感じなの？」

北山の声に前回参加していなかった男子が会話に加わる。

「この間は水色だったっけ？」

「今日もスカート？」

「えっ、ミニスカ？」

「ミニなの？」

「お前ら変なこと考えてんじゃねーの。」

「それは北山だろー。」

「はははー。」

次々会話が飛んでくる。

こんな時、いつもだったら助け舟を出す二宮が今はいない。

勝手に盛り上がる男子達は楽しそう。

私服の話から、他女子の点数付けまで始まっている。

夏は下着が透けて見えるなんて話が始まり、その場を離れたかった。

しかし隣の北山に輪の出口を固められていて抜け出ることが出来そうにない。

会話が盛り上がるにつれ、ふざけての肩をぽんぽん叩きながら抱くように手を乗せてくる北山。

や、やだな・・・

正直北山くんのことよく知らないし、そんなに仲良くないからどう接したらいいのかわからない。

どうしたら抜けられるかな。

早くこの場から去りたい。

「北山。」

「なにー？」

「前にお前が欲しいっていつていたやつ、タケが持ってるって。」

「まじで？」

「今日持つてきてるってよ。」

「見る見るー！」

そう言つと嬉しそうに竹田の方に駆け寄る北山。

助け舟を出してくれたのはなんと晃だった。

晃はそのまま竹田と北山のいる方へ戻った。

北山がいなくなり、男子の輪から抜け出る。

そのまま教室から出た。

涙でそう。

あきちゃんが・・・

助けてくれたつて、そう思つてもいいですか？

たまたまかもしれない。

でも、

私を見てくれていたから、気づいて助け船を出してくれた。

そう、思つてもいい？

教室では北山が抜けた後も男子達の会話が続いていた。

「椎名さんて下ネタ系苦手？」
「あ、おれもそう思ったー。」
「可哀想なことしたか？」
「それはねーだろ。」
「純情ぶっているだけだろ。」
「案外やり手だとおもうぜ。」
「そうかあ？」
「だってあいつ二股かけてたんだろ？」
「あー、そーいやそんな噂あったな。」
「でもあれはデマだったんだろ？」
「そうだったんだっけ？」
「松岡のことが好きだったのだよな？」
「そんなような話だったか？」
「あんま覚えてねーや。」
「でもキタは椎名狙いかな。」
「そんな感じあったよな。」
「おもしれーじゃん。」
「下向いて顔真っ赤だったじゃん。」
「まんざらでもないってことか？」
「誰が顔真っ赤だったってえ？」

盛り上がっている男子達の輪に、教室に入ってきた千夏が駆け寄る。

「めぐちゃんがなんだって？」
「椎名が顔真っ赤だったって話？」

笑いながら会話が盛り上がっている男子達。

「へえ。それはどんな楽しい話をしてたのかしらあ？」

「違うだろ。やり手だって話？」

「おいおい、直接だなー。」

さらに笑いが起こる。

「ふーん、それでえ？」

千夏表情に怒りが込められていくのに気づいた男子が慌ててフオローにまわる。

「いや、別に俺達は下ネタ系の話が椎名さんは苦手なのかと・・・」

「な、なあ。」

「そ、そうそう。」

全員頷き、苦笑いをしている。

どうやら千夏を怒らせてしまったことに気が付いた男子達。

「あのねー、めぐちゃんにそんな話持ち掛けないでよね。するなら私が相手するから。」

「そ、そうだな。」

「北川の方が話し通じるよな。」

「ははは、北川さんには勝てないなー。」

自分達が言い過ぎたことに非を認め始めた男子達。

「こ、講習そろそろ始まるかなー。」

「そうだなー。」

苦し紛れな言い訳をして散っていった。

「まったく。」

バカな男子にうんざりといった表情の千夏。

「ちーなつつ。」

後ろから二宮がニコニコしてやってくる。

「あんだどこフラフラしてたのよバカっ。」

「わお。いきなり怒んなくてもいいじゃん。」

いきなり千夏の罵声を浴び、笑顔が消え寂しそうな二宮。

「そんなに俺がいなくて寂しかったの？」

「それはない。」

「そんなきつぱり言わなくても。グさつとくるよ、千夏。」

「あつ。あんだ今日めぐちゃんと夏祭り行ってくって言ってたよね。」

思いついたように話を変える千夏。

「おうつ。千夏も行けるのか？」

「私は無理。彼と行くから。」

「だからその言い方、グさつとくるって。」

苦笑いの二宮。

「あんためぐちゃんを北山君に近づけないようにして。」

「は？なんだよそれ。」

「嫌なのよ。めぐちゃんを軽い気持ちで傷つけられるのが。」

「キタが？」

「そう。あとバカな男子達。」

「なんかあったのか？」

先程の出来事を二宮に話す千夏。

「なるほどね。」

「まあ、俺も男だから気持ちわからなくもないけど、変な事言わないか気をつけて見てるよ。」

「気をつけるだけ？」

「そう怒るなつて。恋愛は自由だろ？」

「まあ、そうだけど・・・」

「千夏はもえの事になると自分以上にがんばるんだな。偉いな。」

そう言って千夏の頭をなでる二宮。

優しい口調が千夏の心に響く。

「あたしは…めぐちゃんに恋愛は楽しいってことを知ってもらいたいだけ。」

夏祭りの会場は大勢の人で賑っていた。

待ち合わせ場所には二宮と到着した。

「人多いな。皆わかるかな。」

「にのの背が高いからわかるんじゃない？」

「そういう問題なのか？」

「あれ？」

「どうした？もえ。」

少し離れた所から女の子達の視線を感じた。
女の子達は二宮とを見比べ、驚いたような、でも楽しそうな表情をしていた。

「ねえ、にの。私達勘違い…されてないかな？」
「ん？」

女の子達の視線に気づく二宮。
陸上部の二宮の後輩だった。

「ああ。」

「？ああ？つて。いいの？」

「俺は別に。」

「もえは勘違いされたら困る人でもいる？」

笑顔で言い返す二宮。

下を向き、答えに詰る。

「あ、後で話す。」

恥ずかしそうに顔を赤くし、小さい声で言う。

「なるほどね。」

二宮の表情が和らぐ。

「あ、いたー。」

「おーい、にのー。」

亮一、竹田、北山がやってくる。

「ここ人多すぎだよ。」

「混んでんなー。」

「関君達わかるかな？」

「おっ、しーなちゃんかわいいー。白も似合うね。」

北山が近づいてくる。

スツと二宮の後ろにさがる。

その様子を伺う二宮。

「しーなちゃんと祭り回れるなんて今年の夏は最高。しーなちゃん何が好き？屋台といえばやっぱかき氷だよなー。」

一方的に話しかけてくる北山。

困ったような表情で合槌を打つ。

二人の様子を見つめる二宮。

「おーい！」

「あ、関君だー。」

関の後方から昇、健太、市井が来ているのが確認できる。

「いやー、まいった。探すの苦労したよ。」

「ボクめぐちゃんでわかった。」

市井が話しかけてくる。

「じゃあ、とりあえず中心の神輿会場まで行くか。」

「そうだな。」

「そこで飯くおーぜ。」

「しーなちゃんはぐれないようにねー。」
「う、うん。」

隣に北山が来た。

人が多いので、話す声も途切れ途切れにしか聞こえないが、しばらくは北山の話の話を聞かなくてはならなくなった。

北山の話に相槌を打ちながらも二宮から離れまいと必死についていくことにした。

その様子に気がついた二宮は一度溜息をつき、

「キタ、そういえば前にお前がさー・・・」

二宮が北山の氣を向ける。

徐々に北山と距離を置き、先頭を歩く列から離れ、一人後方から付いて行くことにした。

ふう。

にのに助けられたかな。

やっぱり北山くん、苦手だな。

最近一緒に遊ぶことが増えたけれど。

それはあきちゃんが一緒だから・・・

前を歩く晁の姿を見つける。

あきちゃん。

こうして後ろ姿を見られるだけでも幸せだなんて思う。

夏休みに入って2回目だね。

学校以外で会えるの、やっぱり嬉しいな。

あ。

背、伸びた？

私服のせいかな。

なんだかいつもより大人っぽく見える。

今私、あきちゃんと夏祭りに来てるんだ。

もちろんあきちゃんにとってはその他大勢の一人でしかないとは思っけど。

それでも、同じ時間を過ごせることが嬉しい。

今は後ろからついていくだけ、あなたを追いかけてばかりだけだ。

いつか・・・

あきちゃんと並んで歩けるようになりたいな。

「あーめぐちゃんだ！」

「めぐちゃんーん。」

懐かしい呼び声に振り向く。

「久しぶり。」

「めぐちゃん元気だった？」

「うん。びつくりしたー。」

「ねー、こんなところで会えるなんてね。」

「蓮田中だよね？」

「そう。」

「部活とかで行くこともあったのに、全然会えなかったね。」

「あ、テニスの試合では見かけたー。」

「よく私だっけわかったね。」

「めぐちゃん変わってないもん。すぐわかったよ。」

「変わってないの？私。」

「ははは。相変わらずかわいいねっていう意味。」

「そっいえば、めぐちゃん一人？」

「うっん、友達と」

ハッ和我に返る。周囲に誰もいないことに気づく。

「ごめん、もう行くね！」

慌てて前に追いつこうと小走りになる。
やばい。

すっかり話しに夢中になっていた。

どうしよう、こんな大勢の人の中じゃ・・・
皆とはぐれちゃった。
どうしよう・・・

“ドンッ！”

前から来た通行人とぶつかる。

「チッ、いてーな。」

「ごめんなさいっ。」

あ、どうしよう。

皆いない。

知らない人ばかり。

どうしよう。

私どっちから歩いて来たの？

私どっちへ歩けばいいの？

みんなはどこ？

みんなはどっち？

にの、

タケちゃん、

亮ちゃん、

関くん、

北山くん、

いっちゃん、

健太くん、

あきちゃん・・・

どれくらい歩けば追いつくの？

どれくらい・・・

怖い・・・

焦りと不安がつり、祭りのざわめきがいつそう孤独にさせる。
次の瞬間、突然腕を引かれ驚く。

「やつ・・・」

掴まれた腕を振り払おうとし、振り向くとそこにいたのは晃だった。

「あきちゃん・・・」

やっとの思いで言葉を発した。

「ごめん、はぐれちゃった。」

声が震えている。

「私・・・皆と・・・どうしよう、皆に迷惑かけちゃ
いいから。」

不安でいっぱいのかき消すような晃の落ち着いた声。

「う、うん。」

晃に腕を引かれたまま、道の端へ移動する。

「友達？」

「え？」

「さっきの。」

「あ、うん。前の小学校の友達なの。私転校生だって話したかな？」

「ああ、聞いた。」

「懐かしくてつい…ごめんね。みんなに迷惑かけているよね、私。」

はぐれてしまった事に対して複雑な思いでいっぱいだった。

まだ落ち着いていない様子に晃が話題を変える。

「前の小学校ってどこ中になんの？」

「え？」

「もし転校してなかったらどこの中学だった？」

「第二中。」

「ふーん。」

「あきちゃん、知っている人いる？」

「部活で顔見知りは何人か。」

「そっかあ。」

会話に間があく。

「一本道だから、にの達はこの先で待っているだろ。」

「あ、そっか。そうだね、御神輿見るって。それまで一本道だね。」

笑顔を見せる。

「ごめんね、あきちゃん、迷惑かけて。」

「私バカだねー、真っ直ぐ歩いていけば着いたのにね。」

何も言わずに歩き出す晃。

一歩後ろを歩く。

「でも・・・あきちゃん私がいなくなったのに気づいてくれたのだね。」

そういえば、

私あきちゃんの後ろを歩いていたのに。

あきちゃん、私が友達としゃべっていた事も知っている。

いなくなつて気づいたのではなく、最初から知っていた？
止まった私を・・・

そう考え、顔を上げると晃が足を止め隣にいた。

「見てたから。」

目を見て答える晃。

目をそらすことができない。

この前と同じ。

あきちゃんが私を見ている。

今、向き合っているんだ。

やっと向き合えたんだ。

後ろから追いかけるのではなく、

ほら、気づけばあきちゃんは私の隣にいる。

並んで歩く事だってできる。

もう恐くないね。
勇気を出そう。

「あきちゃん、」

「この間ね、タケちゃんが…あきちゃんが私のこと気にしているって
言っていたの。」

黙って聞いている晃。

「その話、ほんと?」

しっかり目を見て伝える。

「さあ?」

突然の話にも表情一つ変えずに答える晃。

「ほんと?」

もう一度、自分の気持ちに言葉をのせて伝える。
晃の表情は変わらない。

「おまえは、俺のことどう思ってたの?」

逆に質問されてしまう。

「き、気になるよ。」

素直に答える。

「ふーん。」

「じゃあ、この前好きな奴いるって、誰？」

「・・・あきちゃん。」

「ふーん。」

それでも晃の表情は変わらない。

「俺もおまえのこと気になる。」

「ほ、ほんと？」

驚いた表情で聞き返す。

「あきちゃん、ほんと？」

「ああ。」

「ほんと？」

「ああ。」

「ほんと？」

「本当。」

「ほんとねっ。」

表情が明るくなり、笑顔がこぼれる。

晃も柔らかい表情で見ている。

「しつこいぞ。」

「本当なんだね。」

「もう行くぞ。」

「うん！」

晃の隣に、並んで歩く。

「あ、あきちゃん。」

「ん？」

「手…つないでもいい？」

顔が赤くなりながら精一杯の勇気を出して話しかける。

「あ、ほら人が多いし、またはぐれと…ごめんね。嫌なら

」

「ほら。」

手を差し出す晃。

「もう行くぞ。」

そう言つと歩き出す晃。

晃の手にそつと触れ、ついて行く。

温かい。

あきちゃんの手。

細い指。

ごつごつした骨。

大きな手。

男の人の手。

勇気を出してよかった。

嬉しいな。

あきちゃんと手をつなげていること。

あきちゃんが私を気にしていること。

あきちゃんが私を見ていてくれること。

今日のこと全部が嬉しい。

あきちゃんを想う気持ち、大切にしていきたい。
これからも。

「あ、来た来たー。」

「おーい、椎名さんあきちゃん。」

神輿会場に着くと皆が待っていた。

「ごめんねー。」

「びつくりだよ、いつの間にかいなくなっただもん。」

「しーなちゃんかき氷食べる？」

「わ、みんな買ってるんだ。私も何か買って来ようかな。」

屋台の方へ向かう、北山、一、関。

残った二宮が晃に話しかける。

「あきちゃん、もえの事ありがとな。もえ、方向音痴だから毎年のようにはぐれてさ。」

「ああ。」

いつもは無愛想な晃の表情の変化に気づく二宮。

「これはひよつとすると・・・」

「え？にの何か言った？」

隣にいた市井に不思議そうな顔をされる。

「いやいや。」

二宮の表情は何かを感じたようである。

帰り際、あきちゃんが私に話しかけてくれた。

「ちゃんと寝ろよ。」

その一言が。

眠れないくらい嬉しかった出来事があったけれど。
安心感をもらった気がして。

私はその夜、久しぶりに穏やかに眠りにつけた。

夏の思い出を胸に。

5・いざ立て戦人よ

いつもと変わらぬ日だった。

夏祭りをきつかけにちよつとは変わるかなと思っていたが、何も変わらなかった。

「おはよう」の挨拶も相変わらず私から。

？それって両思いなんじゃないの？？

ちなっちゃんにはそう言われた。

あきちゃんが好きな事、夏祭りの出来事、これまでの気持ちをちなっちゃんとに打ち明けた。

二人とも驚くのかと思っていたが、反応は小さかった。

夏祭りの日

あの時確かに私はあきちゃんに言っている。

私の気持ちはバレているのは間違いない。

でも、だからといって返事が欲しいとか、これからどうしたいとかそついう風には悩まなかった。

今のままでいい。

うつん、変わることを期待している。

昨日よりも今日、今日よりも明日。

あきちゃんをもっと知りたい。

あきちゃんにもっと知ってもらいたい。

そつ思つのが今の気持ちかな。

焦らずゆっくり好きな気持ちを持続けたい。

そつ思つのはあきちゃんも私のことを気にしてくれていると知っ

ているから？

気になると言われたけれど、

気にかけてはくれてはいるけれど、

それって何？

今は・・・

わからなくてもいい。

知らなくてもいい。

知りたくないだけかもしれない。

あきちゃんの答えを聞くのが恐いのかな。

逃げているのかな。

でも・・・

簡単に足し割りできてしまうような、明確な答えは要らない。

八月上旬で学校の夏期講習が終わると、残りの夏休みは自分の塾の夏期講習で埋め尽くされた。

それからあきちゃんには会えなかった。

近所のタケちゃんを通し、時々様子は耳に入ってきたが。

修学旅行の写真を現像した。

二ヶ月前のことなのに、懐かしく感じる。

もう思い出。

まだ知らない受験。

まだ知らないあきちゃんへの想い。

修学旅行中、あきちゃんと話す時間が増えて、あきちゃんのこと知ることができた。

カメラ二つ分。四十八枚の中の一枚。

奈良、京都の重要文化財や旅館の写真、友達と食べ歩きしている写真、にのと、けいちゃんと、ちなつちゃんと、ヒロアキと。笑顔の写真の中に一枚。

一枚だけあきちゃんがいる。

ヒロアキと、あきちゃんと、三人で写る一枚の写真。

そこにあきちゃんの笑顔は写っていないかった。

それでも、この一枚は大切に、机の引き出しに入れた。

勉強の合間に、引き出しを開けては見ていた。

夏休み、会えなかった時も、写真を見ては思い出した。

あきちゃん。

三週間振りに会う。楽しみよりも緊張が高くなっているのがわかった。

新学期、はじめて会話したのは放課後になってからだった。

「髪切ったね。」

そう言って話しかけた。

たくさん話したいことがあったのに、いざ話そうとすると緊張してしまう。

「切ってない。」

「うそ、切ったよね。」

「見間違え。」

「切ったよね。わかるもん。」

「暑いからな。」

こんな些細な会話でも、繰り返されることが嬉しく思う。
だんだん緊張がとれて思わず顔が緩んでしまう。

「私も切ろうかな。そろそろ肩についてきた。」

手で髪をすきながら呟くと、

「伸びたな。」

そう言つて晃が髪の手を取る。

あ、あきちゃんが・・・

あきちゃんが私の髪に触れている。

髪の手先まで緊張が走る。

「俺、長い髪って好きなんだ。」

目が合う。

視線が外せない。

まるで金縛りにあつたかのよう。

「そ、そうなんだ。」

「それかショート。」

「長いか短いかわつちかがいいってことね。」

ということとは、今の私はどちらにも当てはまらない中途半端なことね。

自分で自分を慰める。

「あ、私も去年まではもう少し長かったよ。」

「知ってる。」

あきちゃんとの会話、キャッチボールの回数が増え、飛距離はどんどん縮まっていくのが実感できる。
それがうれしかった。

「そつか。残念だな。私は去年のあきちゃんを覚えていないもの。」
「よく見かけた。」

「その時の私はどんなだったの？」
「変な奴。」

教室には二人だけ。
だからかな。

私と話すあきちゃんの表情に普段の無愛想さはない。
誰もいないから、周りを気にする必要がないからこんなに穏やかなあきちゃんを見せてくれるのかな。

それとも・・・
私とだから。そう思ってもいい？
晃の前の席に座って向き合って話している。

「えっ？変？」
「ぎゃあぎゃあうるさかったな。」
「変でうるさくて…って私良い所ないじゃない。」
「いつも笑ってるから変な奴だと思ってた。」
「楽しかったのかな、毎日が。」

去年・・・
それは、
まだ祐也に片思いしていた頃。
恋とかまだよくわからなかったけど、いつも一緒にいることを考えていたな。

「悩みもなさそうで、バカっぽく見えてた。」
「そうなの？私印象悪いね。」
「でも、悩んでそうなのも見て、ああ、別に変な奴ではないなと思

った。」

「そっかあ。」

あきちゃんが、私のことを色々と話してくれているのが嬉しい。

「お前は？」

「えっ？」

「俺のこと。」

ドキっとした。

好きだよ。とは恥ずかしくて言えなかった。
でも、言ってしまう位想っているよ。

「えっと、印象ね。」

一人でドキドキしてしまったことになんとか恥ずかしくな
ってしまっ

どう思っていたか、印象の話をしていたのだった。

「はじめは怖かったかな。」

「ふーん。」

「話しかけても無視するし、笑ってくれないし。」

「でも、他の人としやべっている時は楽しそうにしてい
て、もしかして私嫌われているのかなって悩んだりもした。」

「へー。」

晃の顔に笑みがでている。

「絵をね、あきちゃんが描いた絵を、あきちゃんが描いて
ると思わなくて、同一人物だと知って驚いたよ。」

「なんだそれ。」

「だんだん話すようになって、優しいところや笑顔とか見られるようになって、印象変わったよ。」

「ふーん。」

目を合わせたまま話している。

こんな風に一緒に時間を過ごせるなんて最初は思ってもいなかった。

そう。

あきちゃんを知ったばかりのあの頃は、穂高晃という人を掴めなかった。

中二の秋に見つけた一枚の絵。素敵な風景画に目を奪われた。

その絵を描いた人が穂高晃だと知り、三年生になって顔見知りになった人が穂高晃だと知り、皆が穂高晃を知っていたのに私は知らなくて。

でも穂高晃とあきちゃんを同一人物だとは信じられなくて。

選択授業で一緒になった。

修学旅行で話すようになった。

試験の結果では上位にランクされていて。無表情で無愛想でよくわからない奴だけど、

でも・・・

そんな穂高晃が気になっていった。

今はこうして私の前で優しい表情をしているあきちゃん。

私、どんどんあきちゃんのこと好きになっている。

始業式の翌日から受験対策のための試験が始まった。

まだ蒸し暑く夏は終わっていないのに、もう秋になったといわんばかりに受験勉強が押し寄せてくる。

もう今までとこれからは違うのよと、まるで夏の思い出とくくってしまふかのように。

それはちょうど夏祭りから1ヶ月が過ぎた頃

急にあきちゃんが変わった。

「おはよう。」

挨拶を返してくれないのはいつものことだけど、こっちを向いてくれない。

私を見てくれない。

どうしたのだろう。

私、何かしたのかな。

身に覚えがない。

翌朝も、その翌朝も・・・

挨拶をしてもこっちを見てはもらえなかった。

私のおはようの言葉も徐々に元気を失くしていった。

つい最近まであんなに仲良くしていたのに。

よく笑って一緒に居ることも多かったのに。

急に態度がそっけなくなつて、あまり話してくれなくなった。

廊下ですれ違う時も目が合わない。

気づいていないの？

それとも私を避けているの？

皆で話す休み時間も、普通にしゃべってはいるけれど私を見てくれない。

表情を変えずに、なんとなくそっけない態度。

ドウシテ？

昼休み、予鈴が鳴り本鈴が鳴るまでの間。
皆が移動した後、二人で過ごすことの多いこの時間もなんだか空
気が重たい。

窓からはまだまだ暑い日差しを感じる。

「あきちゃん。」

思い切って話しかけてみる。

窓の外を見たまま、視線を私に向けてはくれない。

「なんでもない。」

会話が続かない。

もう、ここにいっても辛くなるだけかもしれない。
教室に戻ろう。

下を向き、引き返そうとしたその時。

？コツン？

晃の拳が額に当たった。

驚いて顔を上げると、教室に戻る晃の後ろ姿が見えた。
なんだろう、今の。

触れられた額に残るあきちゃんの感触。

先日の試験の結果が出た。

廊下の掲示板に上位三十名の名前が張り出される。
順位を落した。

やっぱり夏休み皆勉強したのかな。

記載された名前に変動が現れている。

相変わらず首位を独占し続ける松岡くん。

十位圏内に入った祐也。

あ、

あきちゃんの名前もだいぶ下がっていた。

2

何かが変わり始めている。

話しかければ話せる距離にいた。

けれど、話そうとしないし目を背けられたりもした。

何も話してくれない分、積み重なっていく不安。

空気が重く感じる。

廊下から聞こえてくる男子達の会話の中で、あきちゃんの声拾ってしまふ。

移動中、集会中、あきちゃんの姿を探してしまふ。

目が、あきちゃんを追ってしまふ。

気がつく、いつもあきちゃんを想っていて。

私はこんなにも好きなのに。

向き合えたと思ったのにな。

この間までは目を合わせて会話していたのが嘘のよう。

もう一度向き合いたい。

だから、今はただそばにることしかできないけれど、それでもいい。

あきちゃんのそばにいたい。

そばにいさせて。

「私何かしたのかな。」

千夏に相談してみた。

「思い当たることないの？」

「うーん。」

「めぐちゃんが気づいていないだけで知らないうちに何かしているかもね。」

「それ可能性高いかも。」

「だったら本人に聞いてみるのがいいんじゃない？」

聞いてみようかな。

何かしていたなら謝りたい。

でも・・・

もしかしたら、私の気持ちを知って迷惑になった？
だから、突き放すような態度を取っているの？

翌朝、四組の教室を通ると晃が一人でいた。

話しかけようか迷った。

またそっけない態度をとられたらどうしよう。

でも、このまま気まづくなるのも嫌。

「あきちゃん、おはよう。」

「ああ。」

返事は返ってきたものの、目を合わせようとはしない。
思い切って聞いてみることにした。

「あの、私何かした？」

表情を変えないあきちゃん。

「何かしたならちゃんとあやまるから・・・」

？コツン？

目線を合わせないまま、拳で頭を軽く叩かれた。
それで会話は終わり。

終わりだよと触れられた拳に言われたかのような感触。

何かが違う。

何かが足りない。

私の想いを遮るかのように、これ以上望むことを阻まれている。

まるで、あきちゃんに見えない壁が存在しているかのよう。

私はこれ以上踏み込むことができない。

放課後、見たくないものを見てしまった。

あきちゃんが、クラスの女子の荷物を持ってあげていた。

廊下を一緒に歩いていた。

向き合って話していた。

どうして？

私にはそんな顔、見せてくれない。

私にはそんな優しさ、見せてくれない。

苦しかった。

胸が苦しくて、つらくて、見ていられなくて。

その場から逃げ出すように離れた。

目に焼きついて離れない光景。

気がつくと言が出ていた。

あれ？

私泣いている。

胸が苦しい。

心が痛い。

悲しい。

こんなにもあきちゃんのこと・・・

いつの間にかあきちゃんのことすごく好きになっていた。

楽しいばかりだった夏が終わり、苦しい秋のはじまりだった。

翌朝は四組に入らなかった。

あきちゃんに会うのが恐かった。

泣いてしまいそうで・・・

私いつからこんなに弱くなったのだろう。

この日初めて会ったのは昼前だった。

廊下で前から歩いてきたあきちゃんを見つける。

顔が上げられなかった。

下を向いたまますれ違おうとしたその時、

？コッソん？

すれ違い時あきちゃんの拳が額に当たった。

思わず顔を上げて振り返える。

後ろ姿のあきちゃんを見送る。

頭をコッソんとしてくれる仕草、それだけだけどなんだかホッとす
る。

些細なことが嬉しく感じる。

でも、これで私に何を伝えているのだろうか。

一週間が過ぎた。

相変わらずあきちゃんの態度に変化はなく、

あきちゃんから話しかけてくれることは一度も無かった。

私から話しかけても私を見てくれることは無かった。

返事もどこか上の空。

やっぱり私がかしたのだろうか。

知りたい。

早く原因を知りたい。

焦っていた。

朝の時間、休み時間、移動中、廊下で、何度となくすれ違う。

その度味わう胸の痛み。

キュッと唇を閉じて我慢をする。

涙がでそう。

話せないことがこんなにもつらいだなんて。

見ているだけで幸せだったあの頃とは違う。

いまは見ていることが辛い。

せつない。

話がしたい。

声を聞きたい。

私だけを見て話して欲しい。

放課後、突然ヒロアキに呼び出された。

「しーな、ちょっと話がある。」

明らかに動揺している表情のヒロアキ。
いつもと違う真面目な表情に何かあったと思った。
予想以上のことがヒロアキの口から語られた。

「祐也と栗原が別れた。」

一瞬言葉を失った。

「どうして別れるの？」

ショックという感情よりも先に出た言葉に自分でも驚いた。

「あんなにうまくいっていたのに・・・」

「詳しくは聞いてないけど、祐也から言ったらしい。」

「そう。」

今は一カップルとして認めていただけに、別れたとなるとまた一つの恋が悲しい結末を迎えたということに素直に悲しさを感じた。

「しーな、どうすんだ？」

「へっ？」

ヒロアキの意外な言葉に拍子抜けしてしまった。

「どうするもなにも何を今更。」

不思議と表情に笑みを浮かべている自分に、迷いのない想いを感じた。

「もう祐也のことなんとも思っていないのか？」

「うん。全然。」

すっきりした表情で答えたら、ヒロアキが不思議そうな顔をしている。

「そうなのか？」

「そうよ。だってもう半年も前の話よ。」

「なんだ、オレてっきりまだ・・・」

「ん？」

「いや・・・なんでもない。」

「変なヒロアキ。」

「じゃあ、しいな今好きな奴いるのか？」

「・・・。。。」

「いるのか？」

「う、うん。」

「まじで?!」

少し躊躇ってから答えるとヒロアキは驚いたようだ。

驚いたというより、信じられないといった表情をしている。

「だれ？」

「うーん・・・もう少ししたら話そうとは思っていたのだけれどね。」

「

そう言ってヒロアキの耳に小声で名を伝える。

「@ 「!」」

言葉にならない声を出すヒロアキ。

「そんなに驚かなくても・・・」

こっちが恥ずかしくなって顔が赤くなってきた。

「い、いや、驚くつしよ。びつくりした。」

「内緒ね。まだちなちゃんとのにしか言っていないから。」

どうして人は誰かを好きになるの？

離れるのが決まっているなら、最初から好きにならない方が良い。
苦しむとわかっていているなら、好きにならなければ良い。

でも・・・

知っているから。

人を想う気持ち、思いやる気持ちがどれだけ大切かを。

人を好きになることがどれだけ心を豊かにするかを。

人を好きになること、それは時に苦しく、悲しくもあるけれど、
それでも求めてしまうのはきっと人は人を好きだから。

「あきちゃん、おはよう。」

勇気を出した。

私は今の気持ちを大事にしていきたいから。

失敗を恐れず前に進みたい。

しっかりとあきちゃんの顔を見て話しかけた。

すると、一瞬だったけれど、確かにあきちゃんと目が合った。
私を見てくれた。

それだけの事がとても大きなことに感じて嬉しくなった。

挨拶を返されないのはいつものこと。

だったらまた返してもらえくらい頑張ればいい。

私の一方的な想いかもしれない。

それでもいい。

前に進みたい。

挨拶をしただけで満足になった私は軽い足取りで自分の教室へと向かった。

まさかその後ろ姿を晃が見ていることには気づかないまま・・・

連休明けからあきちゃんがまた少し変わった。

おはようの挨拶にも目を反らされなくなった。

相変わらず態度はそっけないけれど、一言二言の会話を交わすようになった。

3

あれ？

掃除の時間、三組の教室前で晃と祐也の姿を見かけた。

二人だけ？

珍しいな。

何を話しているのだろう。

ここからでは表情や話し声まではわからなかった。

「椎名さん。」

その時、後ろから松岡に話しかけられた。

「あ、こんにちは。」

「今日は塾？」

「はいっ。あ、うん。」

つい敬語でしゃべってしまったのを見て微笑んでいる松岡。

「塾の自習室って何時から開くか知ってる？」

「うん。四時から。」

ちらっと三組の方を振り返ると、そこに晃と祐也の姿は無かった。

「ありがとう。じゃあまたあとでね。」

「うん。」

チャイムが鳴り、教室へと戻る。

二日後に控えた体育祭の予行練習があった。

学年全員が参加。

何度もあきちゃんの姿を探してしまう。

行進、100m走、リレー。

広い校庭で、たくさんの人がいる中で、あきちゃんを見つけてしまっ
まう。

一度も目は合わなかった。

でも、あきちゃんの笑顔、真剣な表情、ずっと見ていたかった。
同時にせつない気持ちになった。

私は見ているだけしかできないんだ。

前まではそれでよかった。

見ているだけで幸せだった。

だんだんとその先を望んでしまう自分がいて。

焦ってはだめだね。

この想いは大切にしていきたいから。

秋の風が吹き始めた校庭でふと思った。

給食前、あきちゃんがうちのクラスに来ていた。

最初は聞こえてくる声に耳を傾けていた。

すぐそばにあきちゃんがいる。

話しかけたい。

でも迷惑かもしれないと思ったらその場を動くことは出来なかった。

すると、自然に会話に入れるよう関くんが誘ってくれた。

「あきちゃん、何種目出るの？」

「四つ。」

「四つも?!」

答えてくれた。

嬉しかった。

体育祭であきちゃんの活躍が見られるかな。

応援しよう。

どこかそっけない態度。

遠慮がちな会話。

相手にされないのはやっぱり寂しい。

でも好きだから、あきちゃんのことを好きだから。

どうしたらいい？

体育祭当日

会場準備のため早めに到着した。
用具室で旗の準備をしていると、

「萌ちゃんおはよう。」

祐也に声をかけられた。

「お、おはよう。」

この間のヒロアキの話が頭の中をよぎる。
気まずいな。

「旗持っていくの？これ？」

「あ、うん。あ、いいよ私持てるから。」

「本部前に運ばいんだろ？俺本部行く用があるからついでに。」

そう言つと旗を抱える祐也。

ということは本部まで一緒に歩くということになる。

「萌ちゃん今日は何に出るの？」

「幅跳びだよ。」

「リレーもだよね？」

「うん、いちおう。」

「すごいね、三年連続リレーの選手だね。」

「そう？そうか。そういえば、よく覚えていたね、自分でも忘れていたよ。」

「萌ちゃんのこと毎年応援してるからな。」

「えっ？」

「いつも見てたよ。」

足をとめ、まっすぐな目で見つめる祐也。

や、やだな。

目が離せない。

視線を振り切って歩き始める。

「萌ちゃん・・・」

祐也の呼びかけに応えず足早に本部へと近づく。

「おっ、祐也、こっち手貸してくれ！」

本部に着くと声がかかる。

「わかったー。」

「祐也ありがとう。行つて。」

「ああ。」

「萌ちゃんっ、」

「ん？」

「あとで、話があるから。」

いつもの笑顔とは違い真剣な表情の祐也。
どうしたのだろう。

本部の上は観客スタンドになっている。
ちょうど真上が三年五組の応援席になっていた。
続々と生徒達が集まってきている。

「めぐちゃんおはよー。」

「ご苦労様。」

「今日がんばろうね。」

上からクラスメイトの声がしたので手を振って応える。
ふと隣の四組を見る。

あきちゃん。

一瞬目が合った気がした。

こっち見ていてくれたの？

思い込みかもしれないけれど、私が下にいるって気づいてくれたの？

話しかけたい。

「がんばってね。」その一言を言いたい。

言いたかったけれど、言えずに体育祭が始まった。

自分の競技では、幅跳びで二位になれた。

ハンドボールの方へ目をやる。

遠く離れているのに探してしまう。

そして見つけてしまう、あきちゃんの姿を。

午前最後の種目は女子のクラス対抗リレーだった。

リレーの選手の私は一走目を走る。

昔から足だけは速かった。

祐也の言っていた通り、中学三年間クラスリレーの選手に選ばれている。

一走目の待機場所からは観客スタンドが近い。

五組からはクラスカラーの緑色のポンポンで応援している友達が

見える。

あきちゃん、見てくれているかな？

少しでも私のこと応援してくれているかな。

今日はもうずっとあきちゃんのことばかり考えている。

「位置について。用意」

？パンツ！？

放たれるスタートの合図。

湧き上がる歓声。

タイミングよくスタートがきれ、第二走者へバトンを託す。

第二走者に続き、第三走者もトップで走る。

そのままアンカーがトップでゴールを切った。

五組女子は一位を飾った。

あきちゃんとは結局一言もしゃべれないまま昼休みになった。

お弁当を食べ終わると、四組の端に座っていたヒロアキから話しかけられた。

「女子リレー、ぶっちぎりだったな。」

「ふふふ。一位取っちゃった。」

「今日はしーなのクラスには負けねーな。」

場所を移動し、ヒロアキとしゃべっていたら後ろからあきちゃんの声が聞こえてきた。

私に話しかけてはくれないのだよね。

何も言ってはくれないのだよね。

そう思うと私も臆病になり、五組の皆のところへ戻った。
その後で、関くんがあきちゃんのところへ行こうと誘ってくれた。
少し心が揺らいだ。

一緒に行つて会話を聞いていた。
でも、私の方を見ようとしない。

関くんの話にも曖昧な返事で答えている。
私がいるから？

輪の中に私がいるから・・・

ずっと考えていたこと。

夏が終わつて秋が来て、

一つの考えが頭をよぎる。

迷惑なのかもしれない。

私が声をかけることが。

私が見つめることが。

私の行動が。

私の想いが・・・

スタンド席から見上げた秋の空には、もう夏の常に照りつけるような太陽はいなかった。

どこか控えめに照らす太陽。

少し、控えた方がいいのかもしれない。

秋晴れの空とは裏腹に、すっきりしない心模様で体育祭が終わった。

その日、ホームルームで席替えをした。
なんと関くんの隣に。

驚いた。

嬉しいと思ったけれど、不安にもなった。

三年になってから仲良くなっているけれど、普段どう接したらいいのか戸惑ってしまう。

移動教室もあるけれど、ほぼ一日を隣で過ごすわけだからね。
隣の席か。

あきちゃんとは絶対に叶わないことだと気づいた。

翌日の放課後。

選択美術の課題で残りがあった。

私は終わらせていたが、ヒロアキにつきあって美術室へ行った。
もしかしたらあきちゃんに会えるかもしれない。

そう思っていたら本当に会えた。

しかも目が合った。

反らすわけには行かなくて話しかけた。

「元気？」

第一声に自分でも驚いた。

何を言っているのだろう、私は。

動揺しすぎだね。

案の定、あきちゃんは何も答えず下を向いて筆を進めていた。

ふう。

息を吐いて呼吸を整える。

あきちゃんの絵。

風景画。

どこを描いたものなのかな。

きれいなスケッチ。

見とれてしまう。

すると、

あきちゃんの道具の側に1枚のプリントを見つける。

自己紹介カード？

名前、誕生日、部活動、趣味……
ん？

誕生日……

十月七日。

もうすぐだ！

「誕生日、近いね。」

自然に言葉が出る。

話しかけてしまった自分にハツとする。

「あ、ご、ごめん。邪魔だよね。」

迷惑という二文字が頭をよぎる。

慌ててその場から立ち去ろうとした時、

「髪、切ったのか。」

驚いた。

あきちゃんから話しかけてくれたことに、それ以上に今日1日誰も気づいていなかったことを言われて驚いた。

「あ、うん。揃える程度にだけど。」

下を向き描き続ける晃。

邪魔にならないようそつと美術室を後にする。

どうして気づいたの？

誰も気づかないくらい少ししか切っていないのに。

嬉しかった。

私を見てくれているから、だから私の変化に気づいてくれた。

そう思ってもいいよね。

元気が出た。

頑張れそうな気がしてきた。

あきちゃん、あなたを好きでいてもいいですか？

帰りのホームルームで後期の委員会を決めることになった。

まず最初に学級委員。立候補者はいなかった。

推薦ということになると、なぜか私の名前が黒板に書かれた。

前期は生活委員をしていた私。だからという推薦理由が多かった。

他に女子は二名推薦され、計三名の中から投票することになった。

一方、男子の学級委員には芳沢くんとタケやんの名前があがっていた。

芳沢くんは同じ小学校出身だけど、今まで同じクラスになったことはなく今年が初めて。

何度か学級委員も経験し、成績も優秀で女子にも優しくクラスをまとめるに相応しい人。

そんな芳沢くんが当選の結果学級委員に決まった。

次は女子の投票。

緊張した。

だってもしも選ばれたりしたら芳沢くんと組むわけで。

そんなしつかりした人と組んだら足を引っ張るに違いない。

結果

選ばれてしまった。

椎名、三年五組後期学級委員を務めることになる。

「椎名さんと協力して、クラスの代表として恥ずかしくないよう頑張るのでよろしくお願いします。」

そんな完璧な挨拶をされた後なんて言うことがない。

「よ、よろしくお願いします。」

緊張して顔が上げられず小さな声で挨拶をする。

「もえっ、がんばれー。」

「よっ、学級委員。」

「芳沢くん。」

声援を浴びる。

人前で話すの苦手な私に学級委員なんて務まるのかな。

はあ。

気が重くなってきた。

ホームルームの後、芳沢に声をかけられた。

「椎名さん。これからよろしくね。」

「は、はい。」

「あ、あの。」

「ん？」

「私足引つ張ると思うし、私なんかで迷惑かけて・・・とにかくごめんなさい。」

「なんで謝るの？」

「あの、だって私学級委員未経験だし、人をまとめるとか人前に立つとか苦手で。私なんかよりも学級委員にふさわしい人他にもいるし、それに・・・」

「大丈夫だよ。自分は椎名さんに票入れたのだから。」

「えっ？」

「よろしくね。じゃあ。」

そついうと教室を出て行ってしまった。

私に票を入れた？

芳沢くんが？

相手が私でも良いと思ってくれていたから？
がんばらなきゃ。

今日のあきちゃんは変な表情をしている。

まるで、私の顔に何かについているかのように私を見ている。
休み時間の間ずっと。

「何かついている？」

と聞いてみても何も言わない。
表情もずっと変えず硬いまま。

「髪縛っているから？」

「変？」

何も言ってくれない。

見つめられることに恥ずかしくなって私の方が目を反らしてしまう。

目が合う時は嬉しいけれど。

目が合うことは嬉しいけれど。

でも何かおかしいあきちゃん。

結局この休み時間でしか会えなかった。

その日の放課後、芳沢さんと初仕事をした。

芳沢くんは思っていたよりも話しやすく、楽しい人だった。

学級委員なんて気が重たいと思っていたけど、芳沢くんとなら出来そうな気がしてきた。

そして、学級委員と生徒会は活動のつながりがあるから気まずいと思っていたけれど、生徒会も総選挙を終えて役員交代があったので、元副会長の祐也と仕事をするのも無くホッとしている。

そういえば、芳沢くんは松岡くんと仲が良く一緒にいるのを見かける。

私のこと、何か聞いたりしているのかな。

考え事をしながら顔を上げると、芳沢が悟ったように微笑んでいる。

「何かな？」

「えっ、う、ううん。」

恥ずかしくなって首を横に振る。

芳沢は笑顔のまま話し始める。

「椎名さんこの間、人前に立つのが苦手って言っていたじゃない。」

「あ、うん。」

「立っているじゃない。」

「え？」

「堂々と。」

「え？」

「大勢の人の前で、プレーしてカッコいいなって思っていた。」

「あ・・・」

「そっちの方が学級委員より大変だと思うけどな。」

この人はすごいと思った。

学級委員という大役にずっと緊張し不安な私を励ましてくれる。

優しい顔で。

「もっと自信もって。できるよ、学級委員。」

「ありがとう。」

「実は俺テニス部に入りたかったんだよな。」

「えっ？そうだったの？」

「そう。意外だった？」

「い、いえ、そういう意味では・・・」

「ははは。椎名さんって正直でいいね。」

「そ、そうかなあ。」

「緊張したり頑張り過ぎなくても平気だよ。」

そう言って笑ってくれる。
優しい表情、優しい話しかけ方。
この人と話しているとなんだか安心するな。

十月七日。

今日はあきちゃんの誕生日。

プレゼントあげたいなって思った。

でも、やっぱり迷惑かな、もらってくれないかもしれないと思ったら用意できなかった。

せめて言葉で伝えたいと思った。

いつ言おうか迷ったけれど、午後には選択美術があるからその時しかないと思った。

午前中の授業は身に入らなかった。

「 じゃあ、椎名さん読んで。」

「椎名さん？」

先生の声にハッと我に返る。

そうだ、今は国語の時間だった。
やばい、聞いてなかったよー。
どこ？

「百四十二ページの五行目から。」

隣の関が小声で教えてくれる。

「神社の、石段に座り少し遠く聞こえた」

「はい、綺麗に読めました。」

はあ。

危なかった。

まさか指されるとは。

「ありがとう。」

小声で関にお礼を言う。

本当に助かったな。感謝。

でもカツコ悪いところ見せちゃったな。

「考え事？」

「えっ？」

「椎名さんが授業聞いてないなんて珍しいなって。」

「はは。ごめんね。」

「そっか、今日は誕生日だもんな。」

「え？」

「あれ？知らなかった？あきちゃんの誕生日。」

「う、・・・知ってる。」

ニコツと笑う関くん。

もしかして関くん知っているの？

気づいているの？

私があきちゃんのこと好きだって。

まさかね・・・

選択授業になり、美術室に入ると数人がおしゃべりをしていた。晃の姿はまだなかった。

やっぱりいきなり言ったら迷惑かな。

そう考えれば考えるほど言いにくくなってきた。

会ったらずくに言ってしまうおう。

そうじゃないとずっと気になって授業にも集中できなさそうだ。

そう決心がついたところにあきちゃんが美術室に入ってきた。

皆のいるところへ来た時、

「お誕生日、おめでとう。」

言えた。

「あきちゃん今日誕生日なの？」

「マジで？」

近くにいた北山、亮一があとに続く。

何も言わない晃。

なぜか笑顔の関。

そこで会話は終わった。

あきちゃん今日は私の方見てくれなかったね。

でも、伝えられて良かったな。

少しすっきりした。

今日はもう会えないかと思っていた。

掃除の時間、窓の外に偶然あきちゃんの姿を見つけた。

あきちゃん外掃除担当だったんだ。

私が技術室掃除の時は、あきちゃん外掃除。
技術室から外掃除のあきちゃんが見える。
偶然見つけた機会に嬉しくなってしまった。

あ、ボール。

校庭に残されていたサッカーボール。

それでもあきちゃんはバレーボールにしている。

アンダー、オーバー。

やっぱり好きなんだな。

バレーが。

こうして遠くからでもあきちゃんを見ていられる時が幸せ。

「ふーん。」

気がつくとも窓の隣に関がいた。

見るとニコニコしている。

私が窓の外から誰を見ているのか気づいたの？

大丈夫だね、あきちゃんの他にも四組の人いたし。

でも、今日の関くんはなんかニコニコしているような気が・・・

放課後、五組の廊下に晃が来ていた。

今日は帰りも会えるなんて嬉しいな。

私は学級委員の仕事があるので教室に残っていた。

すると、廊下から関に呼ばれた。

廊下に出ると、またニコニコしている関。

「はい、手出して。」

「え、手？」

言われるままに出す。

「はい。」

そう言つとあきちゃんの手を取り、私の手を取り……
えええ？

「はい握手。」

訳のわからないままあきちゃんと手をつないでいた。
びっくりした。

「おいつ、関君。」

そういつと、逃げた関を追いかけていく晃。
その場から動けなかった。

あつという間のことでよくわからないけれど……
確かに手と手が触れ合っていた。

握手。

そう言われればそうだけれど、
私にはあの夏の日が思い出された。

夏祭りの夜、あきちゃんとなないだ手。

大きくて、

細くて、

ごつごつした手。

懐かしい。

あの日以来はじめて触れたあきちゃんの手。
嬉しかった。

これがあきちゃんの誕生日だった。

美術室の前に飾られた絵。

穂高 晃の名前を探す。

あ、あった。

うわあ。

う、上手い。

驚いた。

やっぱりあきちゃんの描く絵はすごい。

この間、放課後美術室で見た時よりも、完成した絵を前にただただ上手いと思った。

その日の三時間目が終わった。

チャイムが鳴り、休み時間。

四組の前でヒロアキと話していた。

「しーな、祐也のことなんだけどさ。」

「ん？」

「別れた原因。」

「うん。」

「何か聞いているか？」

「なんで私が？聞いているわけないでしょ。」

「そうだよな。」

どこことなく表情が硬いヒロアキ。
話したいことがある様子。

「ヒロアキ、何が言いたいの？」

「別れた原因な、」

ヒロアキの話の途中で突然、スッと晃が現れた。

「び、びつくりした。」

「おまえはどう思ってたんの？」

晃が話しかけてくる。

ええ？

あきちゃん私とヒロアキの会話聞いていたの？
しかも突然現れて何を言うつもりなの？

「あ、美術の絵見たよ。」

話をそらした。

「上手だね、風景画。」

ごまかしにのってくれるだろうか。

「見たものをそのまま描いているのだからな。」

そう言うと教室に戻っていく晃。

チャイムが鳴る。

休み時間が終わり、私も教室へ戻った。

なんだったのだろう、さっきの・・・。

いろいろな想い。

最近想うこと。

あきちゃんが好きな想い。

歌が、ピアノが、音楽が好きな想い。

友達と過ごす時間が好きな想い。

優しくされると今度は誰かに優しくしたくなる想い。

好きな人を想うせつない想い。

叶わぬ悲しい想い。

そんなことを考えていた。

今日は四時間目が自習になった。

プリントを終えると隣の関が話しかけてきた。

「椎名さんって、あきちゃんのこと好きでシヨ。」

またニコニコしている関。

随分と直接的に言うのね。

「いつから気づいていたの？」

「最近だよ。」

「もつとも、あきちゃんの方は夏くらいからかな。」

「え？」

「はつきり聞いた訳じゃないけれどね。なんとなく椎名さんの話題が増えたんだな。夏頃から。」

「私の話題？あきちゃんが？」

「そう。」

「あきちゃんが私のこと話題にするの？」

「そう。」

笑みを浮かべ、楽しそうに会話を進める関。

意外な話の展開に驚く。

私の想いが関くんに気づかれているということは、当然あきちゃん本人は気づいているはず。

ということは、やっぱり私の思いを知って態度が変わった可能性が高いか。

思い切って関くんに話してみた。

夏までのこと、秋になってあきちゃんの態度が変わったこと、最近のこと。

そしたら、

「あきちゃんは素直じゃないからね。」

と言って笑っていた。

「大丈夫だよ、椎名さん。俺が見る限りあきちゃんは椎名さんのこと嫌ってなんかないよ。むしろ好きだと思っけどな。」

「そう・・・なのかな。」

関の言葉になんだかピンとこなかった。

「でも、嫌われてないとしても、避けられたりするの私の気持ちに迷惑になったのではないかと・・・」

「あきちゃんはね、ああ見えてけっこうガキっぽいんだよ。恋愛に関しては奥手。」

そう言って関くんがあきちゃんの恋愛について語り始めた。

一年生の時同じクラスの子と両想いだったこと。でも、つき合うとかそういう恋愛をまだわからない歳でもある。だから普段がすこ

く良い感じの二人で。当時まだ背の低かったあきちゃんより背が高い彼女とは周囲が見ていて微笑ましいくらい仲の良い二人だったそうだ。

二年生になるとあきちゃんの背がぐんと伸びた。声も変わり大人っぽくなった。その当時好きだった女の子はすぐおとなしい子で、クラスの男子からひやかされたり髪をひっぱって意地悪されていて、その中の一人にあきちゃんも混ざっていたそうだ。いじめではなく、女の子がかわいくておとなしくて泣き虫だからついちよっかいを出してしまうという幼稚な男子の考え方なのだと関くんが言った。

そして三年生。相変わらず恋愛に関しては幼稚な考えのあきちゃんは椎名萌というターゲットを見つけたがまたしてもどう展開したら良いのかわからず、無愛想な態度を取る、軽く欺くような態度をとっているのである。と、関くんが言った。

いろいろな考えが頭をよぎった。

こんな話、聞いてよかったのかな。

あきちゃんの過去。

あきちゃんがしてきた恋愛。

こんな形で知ることになるとは思っていなかった。

次会う時どんな顔して会えばいい？

できることなら今日は顔合わせたくないかも。

なるべく会わないようにしよう。

と思っていたのに。

自習時間の後、廊下で思い切り会ってしまった。

しかも目が合ってしまった。

反射的に反らしてしまった。

ワザとらしかったよね。

無理やりその場にいた恵子を巻き込み、教室へと足早に戻った。

「あ、見てる。」

「え？」

「ほら、また見た。」

教室に入った後、恵子と給食の配膳を待っていた。

「誰が？」

「穂高。」

「うそっ。」

「ほんとだって。めぐのことさっきからチラチラ見ているよ。」

「き、気のせいじゃない？」

声の上擦っているのが自分でもわかる。

「まさか、あんた達・・・」

「ち、違っつて。そんなんじゃないって。」

「なによ、めぐ、あんた私に何か隠してるの？」

「隠しているわけじゃないけど・・・」

「めぐー、白状しなさいっ。」

「ぎやああX@」

恵子に首を触られくすぐったさで声をあげてしまう。

にの、ちなつちゃん、ヒロアキ、関くん、けいちゃん。

短期間でこんなにもの人に分分の想いを曝け出すことになるとは。
いいのだろうか。

「ふがっ！」

「けいちゃん変な声になっているよ。」
「はっへ！」

給食を食べながら、少しずつ、あきちゃんのことを話し始めた。

「そんなに驚く？」

「だって穂高だしよ?!」

「やっぱ驚く？」

「だってもやっぱもなしに驚くわよ!」

「そうかなあ?。」

「まさか穂高とは。」

「まさかってけいちゃん。」

「ああ、ごめん。めぐの男の趣味はわからないわ。」

「けいちゃん。」

「うそうそ。ちょっとからかってみただけ。」

「嘘だ。半分くらいはそう思っている。」

「さすがめぐ。長い付き合いなだけあるわ。」

「もお、けいちゃん。」

「あー、はいはい。悪かったってば。わかったわかった。協力したげるから。」

だんだん自分の想いが悲しく思えてきた。

けいちゃんは私の一挙一動を見て楽しんでいる。

「で、めぐは何を知りたいの？」

「去年の穂高くん。」

「去年?知らないわよ。」

「けいちゃん同じクラスだよ。」

固まってしまっけいちゃん。

次に笑った顔はひきつつているのがわかる。

「そ、そうだったわね。そういえばいたわね、穂高。一緒だったわね。」

「もういい。」

「めぐーっ、ごめんって。待っててちゃんと思いつから。ねっ、」

慌てて必死に繕う恵子。

でもどこことなく楽しんでいるのも分かる。

「ともかくね、こうやって私が思い出さないと思いつけないくらい地味というか目立たない存在だった訳よ。穂高は。えっと・・・友達には・・・にのやタケヤンといつも一緒にいたわね。」

「うんうん。」

「あとは・・・成績は良かったはね、なにげに順位表載ってたし、あとは・・・」

「うんうん。」

「そんな期待した眼差しで見つめられてももう何も思いつけないよ。」

「

「えー、それだけ？終わり？」

「終わり。」

「じゃあ恋愛は？好きな人とかいた？」

「そんな噂一度も聞いたことないね。」

「そっかあ。」

「めぐ、あんたけっこうラブってんのね。」

「うん、好き。」

笑顔で自分の気持ちを答えたものの、次には表情が曇ってしまう。

「でもね・・・」

「ん？」

「気になるって、好きとはまた違うのかな？」

「なにそれ？」

「最近ね、思うの。あきちゃんに、気になるとは言われたけれど、好きとは言われていないの。私の好きとは違う。だから迷惑になったのではないかと。」

「迷惑・・・もまた違うとは思っけれど・・・」

恵子が続ける。

「気になるってさ、良い意味で言えば興味をもたれている、魅力があるとかに値するよね。」

「うん、うん。」

「じゃあめぐ、逆の意味って何かな？」

「悪い意味で考えたらってこと？」

「そうそう。」

「うーん・・・気になる、嫌だから気になる、不快で気になる、気持ち悪くて気になる・・・」

「めぐあんたつくづくマイナス思考ね。」

苦笑いの恵子。

「じゃあ、その不快な気になるだとして、そんな思いまでして気になる人と話したりするかな？触れたりするかな？」

「ん・・・触れるのは嫌かも。」

「でしょ。要するに、気になるの悪い捉え方としては気になって他に手が付かないとか、気になってしまっ自分が許せないとか、何かしらの影響が出てしまう状態なのではないかと私は思うな。」

「なるほど。影響。」

ちよつと考えてみる。

「あ、けいちゃんそれありうるかも。あきちゃん試験の順位落としていたし、関くんにかかわれていたり、祐也と話してたり他の女子ともしやべったりするのは前まで見たことなかった。」

「あのね、めぐ・・・まあ、いいや。場面がよくわからないけど、短時間でそれだけのことが思い当たるめぐはすごいわ。」

「そっかあ、じゃあやっぱり迷惑なのかもしれない。私の想いを知って。」

「まあ、一時期の感情で全てを決めてしまつのはどうかと思うよ。」
「でも・・・」

悲しくなつてきてけいちゃんの前で今にも泣き出しそうになつていた。

「めぐは何をそんなに焦っているの？今すぐ答えを出さなければいけないことなの？」

「・・・・。」

「ゆつくりでいいじゃない。焦つて出した答えに後悔するようなこ
と、めぐにはしてほしくないな。」

「・・・うん。」

「それから周りが見えなくなるくらい悩んだりしたらだめよ。」

「うん。」

「わかつたならよし。これからも応援したるからがんばれ！何かあったら話しなねっ。いつでも聞いたげるからさ。」

「ありがと。けいちゃん。」

けいちゃんの話はすごく分かりやすかつた。

いま、自分の周り、自分が置かれている状況、色々な事を考えて
いかないと答えは出ないのかもしれない。

あきちゃんが好き。

この想いは変わらないけれど、
それだけではだめだということ。
好きな想いを一方的に押し付けているだけ。

そんなこともわからない様ではただのわがまま、自己中心的な考
え方しかできないのだよね。

あきちゃんのことを知りたい、
あきちゃんのことを想いたい、
でもちよつと立ち止まって、

一度振り返って
整理しながら進んでいくことができればいいな。
これからは・・・

その日結局帰り際あきちゃんに会ってしまった。
今度は目を逸らすことができず、どうしようかと考えていたらあ
きちゃんの方から話しかけてきた。

「今日、無視したろ。」

「えっ、してないよ。」

「しただろ、廊下で、ほらバスケット部の誰だっけ？」

「けいちゃん？ 斎藤恵子。」

「そう、斎藤といて。無視しただろ。」

「し、してないよ。」

完全にバレてる。

あからさまな態度だったものね。
話を変えよう。

「あきちゃんもけいちゃんのこと忘れていたの？」

「『も』ってなんだよ。」

「う、ううん。なんでもない。あ、あのね、あきちゃん背が伸びたねーって言っていたよ。」

そんな話言ってないか。

だめだ、私動揺していて話の墓穴掘っているよ。

「ああ、昔は小さかったからな。」

「そ、そうなんだ。」

「いつ頃から伸びたの？」

「中二の夏頃。」

そう言われてあきちゃんを見たら、

あれ？

あきちゃんてこんなに背高かった？

また伸びたの？

それとも・・・

隣に並ぶのが久しぶりだから？

今日は久しぶりに話せた気がする。

あきちゃんは少し不機嫌だったけれど、それでも向き合って会話できたのが嬉しく思える。

関くんの話、けいちゃんの話。

いろいろな想いを知った私。

このまま・・・あきちゃんを好きでいてもいい？

そしていつか・・・伝えたい。

この想いを、あきちゃんを好きな想いは貫きたいと決心した。

いざ立て戦人よ
思いを持て進め
正義の御神は我らの護り

6・とまどい

廊下の窓から見える空はすっかり秋模様。
だけれど私の心は晴れ模様。

あきちゃんへの想いを貫こうと決めた。
だからもう迷わず積極的に動こうと思った。
話しかけることも、会いに行くことも躊躇わずに。
迷惑かもしれない、嫌われるかもしれない。
それでもいい。

今は一生懸命恋愛したい。
この想いを伝えたいから。
あきちゃんに。

タケヤンから聞いた、あきちゃんの進路。
彼は東京に行くかもしれない。

すごいね、やりたいこと、自分のこと、将来のことしっかり考えているのだね。

私は地元の高校に進学する。
だからもしかしたらあきちゃんとは離れる
もう会えなくなる
かもしれない。

卒業まであと四ヶ月。

あきちゃんと知り合って八ヶ月。
いまやるべきことは？

答えはもう決まっている。

登校中信号待ちをしていると芳沢と会った。

「椎名さん、おはよう。」

「芳沢くん。おはよう。」

「椎名さん早いね。いつもこの時間？」

「うん。朝練していた時の癖でね。この時間になっちゃうの。」

「そうなんだ。じゃあ自分もこの時間にしよ。」

「え？」

「いや。あ、寒くなっただね、最近。」

「うん。朝は特に寒いよね。」

「椎名さん、委員会のまとめ始めてる？」

「うん、終わって持ってきたよ。」

「えっ、全部？」

「うん。」

「うわ、がんばったね、大変だったでしょ。」

「ううん。芳沢くんの教え方が上手いからコツつかんで出来たよ。」

「よしよし。偉いぞ。がんばったね。」

そう言つと頭を撫でてくれる。

男の子に頭を撫でてもらうのは初めてではない。

にのにもやつてもらふことがある。

でも、芳沢くんのはなんだか違う感じがする。

芳沢くんと学級委員の仕事をするようになって一ヶ月。

教え方も丁寧で分かり易く、出来たことを誉めてくれる。

話し方も接し方も優しい男の人。

なぜか安心してしまふ。

下駄箱で登校してきた晁と会った。

「あきちゃん、おはよう。」

笑顔で挨拶。

これが今の私の出来ること。

返されても返されなくても、朝会えなくても必ず挨拶だけは交わそうと決めた。

今日は朝から会えるなんてラッキー。

教室まで一緒に歩いちゃお。

隣を歩いていると、晃の方から話しかけてくれた。

「五組はあれ、何て歌？」

「流浪の民だよ。」

「ふーん。」

「聞いてくれたの？」

「聞こえてきた。」

「合唱コンクール楽しみだね。その次は写生大会、それから校外学習。」

「そうか？行事続きでダルイだけ。」

「写生大会はあきちゃんも楽しみでしょ？」

「別に。」

「あきちゃん今年はどこ描くの？」

「おまえは？」

「テニスコート。」

質問したつもりが逆に聞かれてしまい、結局聞き出すことはできなかった。

でも、話せたことが嬉しかった。

あきちゃんを好きな想いを大事にしようと決めたから、素直になれた。

積極的に話しかけようと決めたから、できるだけ一緒にいられる

ようにしている。

そしたらね、自然と向き合えるようになったの。
嫌われることを恐がって隠れてしまっていた臆病な私はもういいい。

今は、明るく前向きに進んでいる。

想いを伝えるゴールを目指して。

例え途中で道に迷おうとも、きっと乗り越えてみせる。

どんな障害が目の前に立ちふさがろうとも、きっと・・・

放課後芳沢と委員会の仕事をしていた。

「最近髪縛っているね。」

「うん、肩についているからね。」

「学級委員だし？」

「あ、わかった？ やっぱり意識しちゃうの。私が規則破っていたらいけないだろうって。」

「自分は髪ほどいていた方が好きだな。」

「え？」

「明日はほどいてきてよ。」

笑顔で言う芳沢。

「お疲れ！。」

教室に松岡が入って来た。

「二人ともご苦労様。」

「聡、もうすぐ終わるから。」

「うん。椎名さんは？ 終わった？ 手伝おうか？」

「い、いえ。大丈夫です。」

「もうすぐ合唱コンクールだね。五組は金賞候補なんだろ？」

「聡、椎名さんに話しかけるなよ。困ってるだろ。」

「そんなことないよなー、椎名さん。」

微笑む松岡につられてつい微笑んでしまう。

こんなところを誰かに見られたら、また変な噂が立ちそう。

翌日

芳沢くんに言われたから？

自分でも良くわからないけれど、髪をおろして登校した。

「やっぱりね、椎名さんは髪おろしている方がかわいいよ。」

こつちが恥ずかしくなるくらいのセリフを平然と言ってしまう芳沢くん。

あきちゃんはどう思っかな？

挨拶をしようと四組へ向かう。

扉を前に足が止まる。

少しだけ開いていた扉から見えたのは、あきちゃんと話している祐也の姿。

なんだろう。

心臓を打つ音が速く、大きくなっているのがわかる。

緊張が走る。

「入らないのか？」

そう言って後ろから登校して来たヒロアキが扉を開ける。
中の二人が気づいた。

話を止め、祐也がこっちに向かって歩いてくる。

「オッス。」

「はよ。」

祐也とヒロアキが挨拶を交わす。

そのまま祐也は三組の教室に戻っていった。

あ、あきちゃんに挨拶しなきゃ。

「あきちゃん、おはよう。」

笑顔を作って声をかける。

祐也とのが気になってはいるけれど、挨拶は明るく笑顔です
ると決めたのだから。

「ああ。」

返事は返してくれたものの、表情が硬い。

何を話していたのかな？

祐也と・・・

何かあったのかな？

髪型、何も言っではくれなかったな。

2

最近、朝芳沢さんと登校することが多くなった。

最も、同じ小学校出身で家も近所なのだから同じ道を登校するのは不思議な事ではない。

部活を引退してからは朝練が無くなり、早く学校へ行く必要はないのだが、変わらず同じ時間に家を出てしまう。

すいている通学路が好きというのもある。

この季節の朝は空気が澄んでいるのも好き。

芳沢くんとはよく途中の交差点で出会う。

「椎名さん、おはよう。」

「あ、おはよう。」

「あと少しだね、合唱コンクール。」

「中学最後なものね。金賞とりたいね。」

「椎名さんは体育祭でも大活躍だったものね。」

「そ、そんなことないよー。あれは皆で頑張ったから。」

そう言うと、芳沢がくすつと笑っていた。

「椎名さんと学級委員出来て良かったな。」

「えっ？」

「クラスのこと、皆のこと考えてて、一つ一つの行事を大事にしている椎名さん、僕は好きだな。」

相変わらず恥ずかしくなるような台詞をストレートに伝えてくる人だな。

これには調子が狂ってしまう。

「ど、どれもね、中学校最後の行事なんだなって思うとね。そんなこと言い出したらきりがないのかもしれないけれど。」

話を元に戻すことにした。

最初は学級委員の仕事の話が多かったが、今では昨日見たテレビ番組の話や、好きな歌手、歌の話など話題も豊富になってきた。

「椎名さん、こっち。」

そう言うのと車の通らない歩道側を譲って歩いてくれる。

そんな優しさが伝わってくる。

この人と学級委員を務められていることが私にとっては自信にもなっている。

放課後、久しぶりに二宮と竹田と一緒に帰った。

「久しぶりだな、もえと帰んの。」

「そうだね。」

「学級委員忙しい？」

「うーん、でも慣れてきたかな。」

「そっか、無理すんなよ。」

「うん平気。芳沢くんに親切にしてもらっているのに迷惑はかけられないしね。」

「そのことなんだけど・・・」

「ん？」

「もえさ、最近よっちゃん和仲良いじゃん。」

「それは学級委員だからね。」

「いや、そうじゃなくて。その、な。」

どこか言い難そうな表情の二宮。

黙って聞いている竹田。

何だろう、この空気は。

「何？にの、言いたいことがあるならハッキリ言つてよ。」
「おお。」

軽く咳払いをし、二宮が話し始めた。

「よっちゃんともえが付き合ってるんじゃないかという噂が。」
「なにそれ？！」

「いやね、噂だからさ、また変なことになっても困るしさ。」
「当たり前よ。だって芳沢くんとは全然そんなんじゃ・・・」

「わかつてるって。もちろん、だってもえはな、好きな人いるしさ。」

「うん。」

「だから変な噂に気をつけろってことと、またなんかあつたらすぐに俺に言えよってことが言いたかったの。」
「わかった。にの、ありがとう。」

驚いた。

そんな風に思われていたなんて。
噂の威力は経験済みだからね。
もうあんな思いはしたくない。
気をつけなきゃ。

それに、誤解されたくない。
あきちゃんに。

帰り道が別れ、二宮とバイバイをする。
近所の竹田と二人で歩いていると、

「今日髪おろしてるんだな。」

「う、うん。」

目を付けられたかときづくりする。
なんとか笑顔で誤魔化してみた。

「明日から縛るよ、生活委員の竹田くん。」

「いや、そうじゃなくて。晃が気にしていたからさ。」
「え？うそ？」

思わず大きな声を出してしまった。
ハッとして口を手で覆うが遅かった。
おそるおそる竹田の顔を見る。

「お前の好きな奴は晃か？」

「バレてる？」

「とつくにな。」

そういえば今までタケやんにきちんと気持ちを話したことはなかったな。

タケやんはあきちゃんの親友だし、つながりが深い分言い難かった。

きっと、ううん、絶対にタケやんはあきちゃんの味方をするから。

「元と言えばね、夏にタケやんがあきちゃんが私のことを気にしているって言うから……。」

「違うだろ。おまえが勝手に好きになったんだろ。」

「やっぱりそう思うよね。」

「当たり前だ。」

「でもタケやんが……。」

「あ？」

「な、なんでもないです。」

だめだ。

やっぱりこの人には勝てない。

全てを見透かされていそうで、

全てを知っていそうで、

誰よりもあきちゃんの近くで、

誰よりも私とあきちゃんの状況を見ている。

そして最後はあきちゃんの見方をする。

「あきちゃんが髪気にしていたの？」

「そう。晃はショートが好きだからね。」

「意地悪。」

「元から。」

「知ってる。」

「言ってやろうか？うまくいくように、晃に。」

「いいー！それだけは断る。」

「ふーん。」

迷わず、自然に言葉が出た。

この想いは自分で伝える。

自分で伝えなければ意味がない。

「じゃあ一つだけネタをやるか。」

「え？ほんと？」

「タダというわけには・・・」

「ジュースでよければ。」

そう言って、目の前の自販機を見る。

「まあ・・・ジュース一本では安い気もするが、優しい竹田様は今回ほそれで許そう。」

「ありがとうございますーすつ。」

竹田に缶ジュースを一本おごる。

情報料ジュース一本分なんて確かに安いよね。

おかしくなって笑ってしまった。

「おまえの修学旅行の写真を晃に一枚二百円で売ってやった。」

「プフッー、に、にひゃく？」

「椎名、汚ねーよつ。」

思わずジュースを噴出してしまった。

「に、二百円？た、高い。」

「まいどありつ。だろ？」

「じゃなくて、そもそなんであきちゃんが私の写真を？」

「だって晃カメラ持ってなかったもん。」

「そうだったの？」

「晃写真嫌いだからな。」

「えっ？」

「とくに写るのは。」

「そ、そうだったの？」

「夏休みおれんち来た時、晃が修学旅行の写真見てるから珍しいと思うたら、おまえの写ってるページだったからさ。売ってやった。」

「う、売ってやったって・・・」

「まっ、そういうことだ。良かったな。」

そう言い残して竹田は帰っていった。

修学旅行の写真を。

私の写真を。

あきちゃんが買った。

おいおい、買ったって・・・

変な顔してなかったかな。

私、どんな風に写っていたのだろうか。

それを見たあきちゃんに、私、どんな風に写っていたのだろうか。

3

夢を見た。

あきちゃんがなくなる夢。

病気？事故？

わからないけれど泣いている私。

学校生活の中でずっと泣いている私。

これからどうすればいいの？

そう叫んでいる。

そばにいたのは祐也だった。

支え続けてくれた祐也に心を取り戻すという夢

夢って怖い。

これだけ鮮明に覚えている夢を見るのは久しぶりだった。

眠れなかった。

この日は合唱コンクールだった。

体育館であきちゃんの姿を見た時はなぜかホッとした。

夢なのにね、考えすぎだよ。

全校生徒、父兄が見守る中、一年生からステージが始まった。

出演クラスが半分終わったところで休憩時間になった。

寝不足が効いて頭がボーっとしていて働かない。

椅子にもたれかかって座っていると、後ろから頭を叩かれた。

？コッソ？

すぐにあきちゃんだと思って振り返った。

「あきちゃん。」

何も言わず見つめてくる。
間が長い。

「どうかしたの？」

話しかけるがあきちゃんは何も答えず、ただ表情が不機嫌になっ
ていくのがわかる。

「今日変だぞ。」

「え？」

「緊張してるのか？」

「ううん、特には。」

「じゃあ何だ？」

「え？何が？え？」

私何かしたかな？

必死で思い出そうと今朝からの行動を振り返ってみる。

「ああつ、おはよう。」

「挨拶していなかったね。」

笑顔で挨拶を忘れていた。

変な夢見たからかな、朝の挨拶を忘れるなんて。
当たっていたのか外れていたのか晃は何も言わない。

「今日は縛ってるんだな。」

「あ、髪？」

この間の竹田との会話を思い出す。

「ねえ、あきちゃん。」

「ん？」

「あきちゃんとタケヤんが話す時に私のことって話題になったりするの？」

「時々な。」

「この間ね、あきちゃんが私の髪型気にしているってタケヤんが言っていたの。」

「寝癖か？」

「違うだろ、ショートにしたらかわいいだろうって言ってたろ。」

突然竹田が隣に来て言った。

え？

あれ？

この間と言っていること違くない？

「ああ、ショートにしてって言ったらするかいくら賭けるかって話？」

「ごまかすな、晃。」

「あきちゃん長いのと短いのは短い方が好きなの？」

「椎名お前も変な質問をするな。」

「あきちゃんは？あきちゃんの見聞きたいな。私、長いのと短いどっちが似合うと思う？」

「だってさ。答えるよ、昇。」

珍しくあきちゃんを困らせているタケちゃん。

今日は私の味方なのかな。

そんな風に思うと、なんだか和んできた。

嫌な夢も忘れるくらいに。

「伸ばす…俺だったら。」

そう言うのと席へ戻っていく。

嬉しかった。

挨拶のこと、気にかけてくれていたなんて。

あきちゃんの言葉で言ってくれたこと。

嬉しかったよ。

髪、このまま伸ばすね。

この日の合唱コンクールで五組は金賞に選ばれた。

4

最近、あきちゃんと過ごすことが増えた朝の時間。

四組ではヒロアキとちなっちゃんとおしゃべりが定番だったが、最近はおきちゃんが早く登校してくるので話す時間が増えて嬉しい。あきちゃんの前の席に座って後ろを向き、向き合いながら話すことも許してくれている。

特別に何か話すわけではないけれど、向き合ってあきちゃんを見ていられる朝の時間が幸せなのだ。

「おまえ何で俺の前だと笑ってる？」

「笑っている？」

「ほら、笑ってる。」

「そうかなあ。」

一緒にいるのが幸せだから。

あきちゃんのことを好きだから。

だから嬉しくて笑顔になっているのだよ。

胸のポケットに入れていた生徒手帳が落ちた。

拾おうと手を伸ばしたが晃の方が早かった。

「ありがと あ、あれ？」

お礼を言っただけで受け取ろうとしたが予想に反して晃は手帳を自分の手の中に入れた。

「あきちゃん？」

「何か書いてあんのか？」

「うっん。何も って勝手に見ないでよー。」

パラパラとページをめくり始めた。

「これ誰？」

「あ、プリクラ？左が私だよ。」

そう言っただけで貼ってあったプリクラとの顔を見比べている晃。

「おまえか？何か違うぞ。」

「私だよー、はいもう終わり。返して。」

「何か書いて返す。」

「え、そうなの？」

机の引き出しに生徒手帳をしまう晃。

そして代わりに1枚のプリントを出した。

？進路希望調査？

あ。

聞いてもいいのかな、あきちゃんの進路……。
教えてくれるかな。

「どこの高校行く？」

晃の方から聞いてきたので驚いた。

「I校かI校かな。」

「ふーん、地元か。」

あきちゃんは？

そう思い切つて聞いてしまいたい。

でも、言葉にするのに勇気がある。

あきちゃんは地元の高校には進まないとタケちゃんから聞いていたから。

でも・・・

本当なのか、あきちゃんの口から

「しーなちゃん。おっはよー。」

北山が割り込んできた。

「あきちゃんもおはよう。」

「俺はついでもたいだな。」

「まあまあ。あきちゃん約束は順調に行っているかな？」

「見ての通り。」

「そっか。それならいいのだけどね。」

「約束？」

二人の顔を交互に見た。

相変わらず無表情のあきちゃん。

意味深な笑みを浮かべている北山くん。

あきちゃんと北山くんの関係性を不思議に思った。

そういえば・・・

夏祭り以降北山くんとのかかわりが薄くなっている。

選択美術で会っても話しかけられたり、首をくすぐられたりもしなくなった。

あきちゃんともっと話したかったけれど、北山くんをきっかけに登校してきた他生徒が集まってきて二人の時間は終わった。

放課後、五組の前に晃がいた。

「あきちゃんだ。」

思わず話しかけた。

「タケヤン待っているの？呼ばうか？」

「いや、おまえ。」

「え？私？」

生徒手帳を差し出される。

「あつ。」

「落書きしといたから。」

そう言つと行こうとする晃を呼び止めた。

「帰るの？」

「ああ。」

無視されるかと思っていたら、再び振り返って答えてくれた。

「バイバイ。」

笑顔で手を振った。

すると・・・

振り向いて、手をあげてくれたの？

バイバイに応えてくれたね。

ありがとうあきちゃん。

満足そうな笑みを浮かべて教室へ戻る。
委員会の仕事で芳沢の隣の席へ行くと、

「椎名さん何かいいことでもあったの？」

「え？」

「かわいい顔してる。」

「えつと、う、うん。」

芳沢くんってストレートにかわいいとか誉めてくれるからこつちが照れちゃう。

「ふーん。」

「あ、そうだ。さっき知らされたのだけど、金曜四時から第一会議室で委員会ね。」

「金曜四時ね。」

忘れないように生徒手帳に記入しようとページをめくった途端。目に入ってきたのはあきちゃんの字だった。

十月七日の欄に『プレゼントなんかくれ by 穂高』
びっくりした。

一度手帳を閉じ、もう一度おそろのおそろ開いてみる。
確かに書いてあるあきちゃんの字。

初めて見るあきちゃんの字。

意外とかわいらしい文字になんだか嬉しくて。

悔しいけれど、悔しいけれど好き。

大好き。

どうしてこんなに好きなの？

生徒手帳が宝物になっちゃうよ。

「椎名さん。おーい。」

「あ、ごめん。何だっけ？」

「自分の話聞いてた？」

「ご、ごめんなさい。聞いてなかった。」

「素直でよろしい。」

「ごめんね。」

つい生徒手帳に目が止まって自分の世界に浸っていた。
恥ずかしい……。

ごめんね、芳沢くん。

「今日の仕事はこれで終わりだけれど、何か質問ある？」

「あ、はいっ。」

「男の子って何もらったら嬉しい？」

「へっ？」

「あ、プレゼントとかって……」

「あ、質問ね。仕事じゃなくて。」

「あ、仕事、ご、ごめんなさい。」

会話が噛み合っていないのに気づき恥ずかしくなる。
それでも笑って私に合わせようとしてくれる芳沢くん。
優しいなあ。

「そうだなあ、やっぱり手作りとかかな。自分の場合は。」

「手作り？」

「お菓子とか、椎名さん得意そう。」

「得意ではないけれど……」

なるほど。

手作りか。

お菓子、あきちゃん甘いもの好きなのかな？

「自分はいつでも受付中だよ。」

「え？」

「作ったらちょうだい。なーんてね。」

「えっと・・・」

何と答えて良いのか困っていると二宮と竹田が教室に入ってきた。

「もーえ、終わった？」

「あ、うん。」

「よっちゃん、聡一君が生徒会室で待ってるって。」

「なんだよ聡の奴、五組って言ったのに。じゃ、椎名さんお疲れさま。」

「あ、お疲れ様。」

芳沢が教室を出て行く。

「にの、タケヤン、待っていてくれたの？」

「外暗いしな。」

「うれしい。」

そう言って二宮の腕に抱きついた。

「おっと、もえ。はしゃぐなはしゃぐな。」

「勘違いされんぞ。お前らが。」

そう言っつと先に歩き始める竹田。

もしかして、芳沢くんと二人になることに気づかって待っていてくれたの？

「タケヤンありがとう。」

そう言っつて竹田の腕にも抱きついた。

「邪魔だっつーの。」

そして三人で歩き始めた。

「いやに機嫌がいいじゃん。」

「もえ、何か良いことでもあった？」

「へへへ。」

「不気味。」

「ふふふ。あ、そう、タケちゃん、あきちゃんって甘い物好き？苦手？」

「晃？苦手じゃないだろ。俺晃の作ったケーキ食ったことあるし。」

「「ええっつ！」」

二宮と二人で驚いた声が揃う。

「お前ら今変な想像したろ。」

「あきちゃんが・・・」

「タケちゃんに・・・」

「ケーキを？」

「手作りで？」

「食べさせて？」

「変な想像すんなって。去年クリスマスパーティーした時に晃がうちで作ったんだよ。野郎ども六人くらいで食った。」

「そうなんだ。」

「なるほどな。」

「あ、じゃああきちゃんお菓子作りするんだ。」

「お前もすんのか？」

「ぎく。わかった？」

「バレバレ。」

「うっう。」

「まあ、頑張れや。」

あきちゃんがお菓子作りをするとは意外だった。
ということは下手なものあげられないな。

一応、私も昔からクッキーやカップケーキ作っていたけれど、好きな人にあげるのなんて初めてだ。

でも・・・

誰かのために作るってなんだか幸せだよな。

週末。

プレゼントを用意した。

クッキーを二種類。

ラッピングするまでは楽しかったのだけれど、いざ完成して渡す
こと考えたら緊張してきた。

もらってくれるだろうか。

もしかして手帳に書いたことは冗談だったのではないか。
だってもうあきちゃんの誕生日はとくに過ぎているし。
今日あげたら迷惑なのではないか。

考えはじめたらキリがなかった。

週明けの学校。

四組に晃が登校してきた。

「おはよう。」

「はよ。」

いつも通り挨拶を交わす。

今渡すべきか？

でも、ちなつちゃんもヒロアキも四組の生徒も数人いる。

無理だ。

渡せない。

緊張して顔が固まる。

そんな顔を不思議そうに見つめてくる晃。

苦し紛れに会話を変える。

「この間の模試、どうだった？ 私数学が大変なことになっているよ。」

「とくになし。」

「さすがだね。」

「俺理数系は平気だから。英語がやばいかな。」

「とか言っているけどあきちゃんいつも成績上位に載っているじゃない。」

と言ってしまったからしまったと思った。

前回の試験ではあきちゃん順位を下げていた。

二学期が始まってからあきちゃんの様子が変わったのは、もしかしてそのことも原因の一つになっているのではないかと考えていたから。

成績が下がったのは私みたいな子がそばで騒いでいたから・・・勉強の邪魔をしていたから・・・

そう思い、晃の顔を見上げてみるが、表情に変化は見られなかった。

「おまえは英語得意なんだろう？」

「得意じゃないけど。」

「髪にゴミ」

そう言って晃が二つに縛っている片方の髪束を手に取る。
緊張が走る。

「ひゃああ× @×」

「まだくすぐつたいのか？」

「もお。やめてって言っているで」

あれ？

そういえばすぐく久しぶりだ。

あきちゃんに首くすぐられるの。

「バカだなー。」

そう言った晃の顔には笑みがあった。

あ。

笑っている。

あきちゃんの笑顔は私に元氣を与えてくれる。

大丈夫だね。

プレゼント渡せるね。

そして放課後

晃が一人になるタイミングを待った。

後ろに隠した紙袋を持って。

「あきちゃん。」

一人の時に渡した。

何も言わずに受け取ってくれた。

「胃薬、用意した方が良くかもしれない。」

笑いながら言ったら、

「俺より下手だったら・・・明日学校休むから。」

晃も笑顔で答えてくれた。

うれしかった。

冗談を言い合えることも嬉しかった。

「おまえ、今からしていたらこれからどうする?」

そう言ってマフラーを指差す晃。

「寒いのだもん。」

「冬苦手?」

「苦手。」

「晃、まだ?早く帰ろうぜー。」

健太が廊下から呼んでいる。

「今行く。」

そう言つと支度をして教室を出る晃。

あ、バイバイ言わなかった。

でも・・・

どうして健太くん教室であきちゃんを待っていなかったのだろう。どうしてあきちゃんには健太くんを教室で待たせておかなかったのだろう。

もしかして、気づいていたの？

私がプレゼント持ってくるって。

だから一人になるまで待っていてくれたの？

まさか・・・ね。

とにかく無事渡せてなにより。

受け取ってもらえてよかった。

翌日

朝会うのが怖くて四組に行くのを避けてしまった。

食べてくれただろうか。

口にあっただろうか。

美味しくなかったらどうしよう。

そんなことを思っていたら何か言われるのが恐くて会うのを避けてしまった。

しかし、1時間目が終わり音楽室から急いで教室へ戻る途中、あきちゃんと廊下で会った。

私は急いでいたので、そのまま下を向き走り去ってしまおうと考えていた。

そしたら・・・

「きゃあ。」

前から歩いてきた晃に髪を引っ張られた。

「あきちゃん。」

「走ってるとおぶねぞ。」

「危ないのはあきちゃんの方だよ。」

その後も移動教室の多い1日だったので、会うこともなく過ぎていった。

そして掃除の時間。

教室掃除の私は雑巾を洗いに一人で水道へ向かっていた。すると同じく教室掃除の晃に四組から呼ばれた。

「おい。」

「あきちゃん。何？」

手招きされた私は廊下側の窓から教室をのぞく。

「ペンギン、これ。」

そう言つて、自分の席にかかっていた鞆を開けてペンギンのぬいぐるみを見せてくれた。

「これいるか？」

「ほしい！」

何も考えず即答してしまった。

「かわいいねー。」

「終わったら取りに來い。」

「うん。わかった。」

嬉しかった。

とても嬉しかった。

あきちゃん私が私に何かくれるなんて思っていなかったから。
クッキーのお返しかな。

そんなことを思うと顔がにやけてしまう。

ホームルームが終わると鞆を持ってすぐに四組に行った。

「甘かったよ。」

晃が言う。

クッキー食べてくれたのだね。

良かった。

何も言わずに喜んでいて、晃が見つめてくる。

「な、何？」

「いや、ほんと俺といると笑っているなと思って。」

「そ、そうかな？」

恥ずかしくなってうつむいてしまう。

見透かされているようで。

「これ、ほしい？」

もう一度ペンギンのぬいぐるみを指差す。

「うん。」

返事をする何と言わずにぬいぐるみを手渡してくる。

「ありがとう。」

今ね、すぐあきちゃんに気持ち言いたくなった。

大好きだよって。

それくらい私はあきちゃんにたくさん優しさをもらって、勇氣をもらって、幸せな気分になっていたのだ。

この瞬間までは

「あれー？ 晃君それめぐちゃんにあげちゃうの？」

出た。

市井里美。

相変わらずあきちゃんと仲良く話しているところをよく見かけている。

「この間遊んだ時に取ったやつ。」

この人はワザと言っているのだろうか、私に聞こえるように。

「この間遊んだ」・・・か。

いつちゃんとあきちゃん、健太くん達で休日遊んでいるというのは時々耳にしていた。

でも、こう目の前で言われるときついな。

いつちゃんは多分あきちゃんのことを想っている。

それはきつと私があきちゃんを好きになるずっと前から。

気づいたのは夏頃かな。

あの最後の試合の日。

好きじゃなかったら泣かないよ。

想っていなかったら泣けないよ。

ボーイツシユなイメージの彼女が涙を流すなんて。

でも、その想いは男でも女でも同じもの。

性別は関係ない。

人を想う気持ち、それは大事なもの。

それは私も良く知っているものだから。

だから彼女の想いにも気がついた。

同じ想い。

今日はもう話せなそうだし帰ろう。

次の日は雨だった。

四組と五組の間の窓際から外を見つめていた。

「おい。」

「あきちゃん、おはよう。」

「寒くないのか？」

「うん、寒いよ。」

晃の手が首に向かっていているのに気づき、よけた。

するとちよつと不満げな表情をしてさらに両手で首をくすぐられた。

「ちょ、あきちゃ@

X」

気のせい？

いつもよりエスカレーターしてくすぐらわれている中で、あきちゃんが私の頭を撫でてくれているような気がした。

勘違い、思い込みかな。

でもうれしかった。

あきちゃんの方からかわってくれることが。

ふとあきちゃんが言った。

「おまえ、何で昨日沈んでた？」

「え？」

「帰り沈んでたじゃん。」

「そう？」

「そんなことないよ、だってあきちゃんにペンギンもらって嬉しかったもん。」

「俺もおまへのクッキー食べて顎強くなりそうだぜ。」

「ええ？あ、硬かった？」

「ちよつとな。」

「へへへ、ごめん。」

沈黙が流れる。

窓には雨が滴っている。

「明日晴れるかな。」

問いに答えることもなく黙っているあきちゃん。でもちゃんと聞いてくれているのは知っている。今は会話がなくても不安ではない。

こうして二人で過ごせる時間がうれしいから。

翌日

校内写生大会だった。

しかしあいにくの雨。

外で描くのを断念し、教室の中での写生となった。

午前中、もくもくと描き続ける生徒達。

中学校最後の写生大会が室内というのは残念だが、事前に下絵は描いてあった。

「椎名さんはやっぱりテニスコートなんだね。」

隣の席の関が話しかけてきた。

「うん。関くんは校庭？」

「そう。」

「体育館じゃないんだ。」

「まあね。」

「椎名さん、あきちゃんはどこ描いたか知ってる？」

「中庭：かな。」

「さすがだね。調査済み？」

「へへへ。前に美術の時間に中庭に座っているの見たのだ。」
「恐れ入りました。」

バケツの水を取り替えに教室を出た時、四組で描く晃の姿を見た。
今日は一言もしゃべってないな。

そんなことを思いながら、水を替え終え戻る時、ふと四組を見ると今度は晃と目が合った。

口ばくで、お・は・よ・う。
と言った。

伝わったかな？

写生大会は午前で終了した。

片付けを終え、廊下へ出ると関が晃と話していた。

「あ、椎名さん。いいところに来た。今日午後ヒマ？」

「えっ？」

「あきちゃんとボーリング行こうかって話あるんだけど、椎名さんも行かない？」

「ほんとに？誘ってくれているの？」

「もちろん。ねえ、あきちゃん、ってアレ？」

「いなくなっちゃったね。関くん冗談でしょ？」

「いや、さっきあきちゃんも言ってたよ、椎名さん午後空いてるかねって。戻ってきたら本人に聞いてみるといいよ。」

「うん。」

本当なのかな？

私を誘ってくれているの？

「しーなー。」

ヒロアキがやって来た。

「ヒロアキも行くか？ボーリング。」

「おお、関くんとボーリング行ったことないな。しーなも行くのか

？」

「私は・・・」

答えに迷っていたその時、晃が三組から出て来たのが見えた。そのまま一直線でこっちへ向かってくる。

え？

あまりにも突然のことで理解不能になった。

「おまえが祐也に言ったんだろっ！！」

いきなりヒロアキの胸元をつかみ、怒りを表す晃。見たこともない表情、怒りに充ちている。

これは何？

これは誰？

これは何？

何が起こっているの？

何が・・・

頭がおかしくなりそうだった。

目の前で起こっていることをただ見ている私。

この現象は事実？

あきちゃん・・・？

止めに入っただのは関くんだった。

みるみる間にあきちゃんの表情が変わっていく。

いつものポーカーフェイスのあきちゃんに戻るまでにそう時間はかからなかった。

まるで何事もなかったかのように。

教室へ戻るあきちゃん。

下を向いたままヒロアキも教室へ入っていく。

関くんも後に続く。

残されたのは私ただ一人。

なに？

何があつたの？

何が・・・

祐也。

そう口にしていたよね、あきちゃん。

祐也が関係しているの？

ここ最近あきちゃんが三組を出入りしていた。

祐也と会っていたの？

祐也と・・・何があるの？

知りたい。

三組へ向かった。

午前で写生大会は終了したので教室には数人の生徒しか残って
いなかった。

その中に祐也を見つける。

「祐也。」

久しぶりに口にした名前。

どこか懐かしささえ感じてしまった。

呼ばれて、一瞬驚いたような顔を見せる祐也。

「萌ちゃん、どうした？」

そう声をかけてきた祐也に違和感を感じた。

あれ？

この人、こんな表情していたかな。

あれ？

私の好きだった人、祐也。

あれ？

何かが違う。

何かピンとこない。

頭の中の回線が一つ、つながっていない。

「この前言ったと思うけど、俺もちゃんに話しあったからちょっと向こうで話そうか。」

そう言われるまま、階段の踊り場へ移動した。

「久しぶりだね、萌ちゃんとかうやって話すの。」
「う、うん。」

祐也、少し太ったかな？

身長も伸びた？

がっちりした体型になったね。

見た目も変わったけれど・・・

なんだろう。

何かがひっかかる。

「あ、あのね、私、さっき、あきちゃ・・・じゃない、穂高くんがね、」

「俺、栗原と別れたよ。」

思い切って話し始めると突然祐也が話をさえぎった。
驚いて話を止めてしまった。

「知ってた？」

「あ、う、うん。聞いた。」

「そっか。」

「あのね、祐也、私・・・」

再び話し始めようとしたその時だった。

え？

祐也に正面から抱きしめられた。

「ちょ、祐也」

何？

なにこれ？

どうして？

その時、私は気づいていなかった。

私が背を向けている廊下側に、あきちゃんがいることを。

祐也とあきちゃんは向き合っていた。

祐也の表情にはどこか余裕があった。

そして後に私は気づく。

あきちゃんが後ろにいたことを

「祐也、離して。」

祐也の手にさらに力が入り私を強く抱きしめる。

「俺はずっとちゃんのが好きだ。二年の頃からずっと。」

祐也の手から力が抜ける。

慌ててその手を振りほどく。

離れたと同時に、信じられない光景を目にする。

振り返るとそこにはあきちゃんがいた。

「あきちゃ・・・」

どうして？

どうしてあきちゃんが？

見ていた？

今の見ていたよね、あきちゃん。

見られていた。

何も言わずに去っていく晃。

どうしよう、

あきちゃんに、一番見られたくない人に・・・

ショックだった。

その場を逃げるように去った。

涙が溢れて来た。

どうして。

どうして。

何が起こったの？

状況を理解するのに頭がついていかなかった。

しばらく一人でいた。

誰にも会うことが出来なかった。

ちなっちゃん、

ヒロアキ、

けいちゃん、

にの、

タケちゃん、

あきちゃん……

皆の顔を思い浮かべるものの、涙を止めることは出来なかった。

誰かに助けを求めたい気持ちと、もう誰に頼ったら良いのかわからなくなっていた。

この事を、いったい誰に、どうやって話せばいいのか。

ただただ落ち着くことを待った。

自分で自分を。

廊下には笑い声も、女子達のおしゃべりの声も、徐々に響かなくなっていた。

生徒達の気配が消えた。

鞆を取りに教室へ戻ると芳沢が一人残っていた。

「椎名さん。」

泣きはらした顔をしていたので気づかれたかな。

「きよ、今日は委員会の仕事はないよね。ごめんね、私いつも仕事遅くて迷惑かけているね。」

笑顔を作って明るく答えたつもりだった。

「椎名さん、」

「芳沢くんは帰らないの？あ、松岡くんを待っているのかな？」

「椎名さん、」

「あ、じゃあ私帰るね。急いで帰らないとドラマの再放送始まるー。」

芳沢の会話を挟まないよう一方的に話し続けた。
そして教室を出ようとした時

「覚えておいてね、自分は椎名さんのこと好きだから。」

もうわからない。

何が起こっているの？

戸惑いながらも必死に探している
見えない出口を。

7・かたちあるものゝそれぞれの想いゝ

中学生になって初めてずる休みをした。

両親は仕事に行つて家には私一人。

ひんやりとした空気が今はなんだか心地良く感じる。

お昼頃外へ出た。

カーテンを締め切つた部屋で一人考えていても答えは出ないから。
ううん、

そもそも答えなんて・・・

あきちゃんが好き。

その気持ちさえもわからなくなつてきた。

祐也が恐い。

芳沢くんも男の人だった。

そんな現実から逃げたくて、
歩き出して辿り着いたのは小学校だった。

五年生の時に転校してきた。

二年間通つただけだが、懐かしく感じるのはなぜだろう。

ちょうどお昼休みで子ども達が校庭で遊んでいる。

低学年の子達は男女一緒に遊んでいる。
手をつなぐことにも抵抗は無い。

かわいいな。

高学年の子達は男女別々に遊んでいる。
不思議。

ちゃんと異性を意識するようになっているのだね。

こうやって段々と人を好きになる気持ち覚えていくものなのだ。

いつかちなっちゃんが言っていた。

好きのその先を考えたことある？

私は子どもだった。

幼かった。

ここにいる小学生と変わらない。

うつん、変わった。

気がついてしまった。

気がつくのが遅かったのかもしれないけれど、

変化に気がついたのだから。

変わったのだから次へ進むことができるの。

次へ進まなければいけないの。

想いは一つ

笠原祐也。

中学一年生の時、部活動を通して知り合う。

仲良くなったのは委員会が同じになってから。

別々のクラスだけれど一緒に委員会の仕事をするようになり、お

互いのことを知り始めた。

好きとかはまだよくわからなくて、憧れていた先輩の名前を口にしたりもしていた。

中学に入り、部活動に夢中になり、委員会で仕事をし、試験へ向けて勉強をする。

そんな毎日が繰り返されるのが当たり前だった。

二年生になると祐也と同じクラスになった。

部活も一緒、クラスも一緒、委員会も一緒。自然と祐也と過ごす時間は増えていった。

秋になると祐也は部長になった。

急に祐也の周りは忙しくなった。

一緒にいるのが当たり前になっていたから、祐也と過ごす時間が減ると寂しさを感じた。

それが恋だと知ったのも周りから諭されて。

林間学校があった。

女子達で恋の話で盛り上がった。

当然祐也を意識していた。

祐也を好きになって困ったことはなかった。

毎日は朝練から始まり、同じ教室での授業、放課後の部活動。

祐也と過ごす時間は楽しかった。

そこに男女の関係がなかった。

でも、

それは突然やってきた。

祐也に彼女が出来た。

失恋。

それもはじめてのことだった。

誰かを好きになり、その想いが突然叶わなくなった時、どうすればいいのかわからなかった。

やがて知る。

無理に諦めようとしなくても良いこと。

忘れようとしなくても良いこと。

人が人を想う気持ち、

それは大切なものだから。

自然と巡ってゆくものだから。

そんな大切なことを気づかせてくれたのがあきちゃんだった。

穂高晃。

中学二年の秋、一枚の風景画に目が留まった。

私は、それが彼が描いたものだとはまだ知らない。

中学三年の春を迎える。

うちのクラスによく出入りする人を見かけるようになった。

顔も名前も知らない男の子。

挨拶をしても無視され、無表情な人。

やがて知る。

彼はあの絵を描いた人。

決して目立つ方ではないが、成績もよく友達想いの人。

だんだんと穂高晃の存在が大きくなり、私は私がこれまでに見てきたものと、彼が見てきたものとの差に惹かれ始める。

修学旅行の三日間で思いがけない彼の一面を知ることになり、気になる存在となる。

誤解を招いて苦しい思いをした時期もあった。

それでも彼はいつも無表情で、口数少なくて、何も言っではくれないのだけれど・・・

やがて私はその彼の中に優しさを見つける。

それはとても温かく、やさしい空気に包まれているかのように安心した。

そして私はあきちゃんを好きになる。

その夜、芳沢くんから電話があった。

母親曰く、学級委員としてクラスの子が休んだから明日の連絡をとることだった。

芳沢くんらしい。

祐也からは伝言があった。

奈緒ちゃんに言付けたらしい。

一番確実に伝わる方法を知っているのも祐也。

「治ったら話しがしたい」そう言っていたそうだ。

当然、あきちゃんからは何も無い。

なくて安心している自分がいる。
あきちゃんは、あきちゃんだから。

「おっはよー」

翌朝元気に登校し、四組へ入る。

「来たな、ずる休み。」

ヒロアキが言う。

「めぐちゃん、おはよん。」

笑顔で迎える千夏。

辺りを見回すが晁の姿はない。

「めぐちゃん、今日放課後ヒマ？」

「うん。」

「じゃあ、話しましょうか。」

「オレもいてやってもいいぞ。」

千夏とヒロアキの声が嬉しい。

「二人ともありがと。」

五組へ入ると芳沢が待っていた。

「椎名さんおはよう。」

「おはよう。」

そう答えて鞆を自分の席へ置く。

「良くなった？」

「うん。」

顔を見て話さなければ・・・そう思うのだが下を向いてしまう。

「あ、昨日は電話もらったみたいでありがとうね。」
「いいえ。」

いつもの笑顔で答えてくれる。

「いやさ、どうしているかなと思ってね。風邪？」
「う、うん。」

苦し紛れに嘘を言ってしまう。

「そっか。」

やっぱり気まずくて顔が上げられない、目があわせられない。
そんな様子を察してか芳沢が言う。

「今日は半日だから無理しないようにがんばって。」

そう言つと頭を撫でてくれる。

あ、まただ。

芳沢くんに触れられるとズキとする。
恥ずかしいし、照れるし、ホッとしている自分もいるのだけれど。

その次にくる感情に気がついたのは昨日。
罪悪感。

私はあきちゃんが好きで、
でも芳沢くんは私を好きという。
応えられない想い。
でも、人を想う気持ちは私も知っている。

だから・・・
つらい。

あきちゃん、
あきちゃんに会いたい。

こんな時はいつもあきちゃんの顔が浮かんでくるの。
辛い時、悲しい時、嬉しい時、楽しい時、勉強が一息ついた時。
いつも思い出すのはあきちゃん。
あきちゃん、
祐也のこと、どう思ったかな・・・

寒かったから？
それとも私を避けて？
あきちゃんが廊下に顔を出してくれることは無かった。

一時間目、二時間目、三時間目・・・
授業が終わった。

今日はこのまま会えないのかな。
やっぱり私のこと避けているのかな。
でも、このまま月曜日まで会えないのも嫌だ。
そう思ったら足が四組へと向かっていた。

ちょうど掃除が終わったところだった。

教室の後ろのドアから中を覗く。
すると簡単にあきちゃんの姿は見つかった。

目が合う。

逸らされてしまうかと思ったが、意外にもあきちゃんは来てくれた。

「体調悪かったのか？」

「え、あ、うん。」

あきちゃんに嘘をつくのは心苦しいが、仕方ない。

「ふーん。」

「私いないのわかったの？」

「ああ。」

「そっか。」

そういえば、元気がとりえな私はここ数年学校を休んだことはなかった。

あきちゃんと出会ってから欠席ゼロだったはず。

人一人いないくらいで学校生活は、何も変わりはないのはわかっているけれど。

もしあきちゃんが一日欠席したらどうかな。

「変だった。」

「え？」

聞き返すと、晃は拳を額に軽くコツンと当ててきた。

「おまえがいないとなんか変だった。」

そう言つと教室へと戻つていった

避けられなくて嬉しかった。

昨日休んだこと、気にかけてくれて嬉しかった。

自分が思っているように、あきちゃんも思つていてくれたことが嬉しかった。

こんなにも嬉しい気持ちでいっぱいにしてくれるあきちゃん。

やっぱりあきちゃんといると安心する。

自分の気持ちを再確認した。

放課後、千夏とヒロアキを四組で待っていると晃に話しかけられた。

「帰らないのか？」

声をかけてくれるなんて嬉しかった。

今日はもう話せないと思つていたから。

「待ってるの。」

「誰？」

晃に向けて指を出す。

「なに？」

「うっそ。」

笑顔で言つと無表情で晃が攻撃する。

「ひゃあ@ X」

「ごめん、ごめんってば」

晃の首への攻撃は続く。

「あきちゃ、冗談だつてば@ Xくすぐったい」

もがいていると晃の手が止まった。

「髪伸びたな。」

そう言うと、手を髪へと伸ばす晃。
晃が髪に触れている。

緊張で体が固まる。

「今日は縛ってないんだな。」

「う、うん。」

やっとの思いで声を発する。

え、

えっと・・・

こ、これは・・・

き、緊張する。

う、嬉しいけど、

動けない。

どうしたらいいのかわからない。
そのまま晃の手は頭に置かれた。

「ちっちゃいな。」

「そ、そうかな。」

「おまえ身長いくつ？」

「ひゃ、百五十五。」

「ちっちゃいじゃん。」

「ふ、普通だよお。」

「あきちゃんは？」

「百七十五・・・か六くらい。」

「まだ伸びているの？」

「ああ、成長期だな。節々が痛む。」

「じゃあもつと大きくなるんだね。高校生になったら・・・」

とそこまで言って話を止める。

「なんだよ？」

「うつん、なんでもない。」

「途中で止めるなよ。なんだ？」

「ほんとに何でもないの。」

高校生になったら・・・

あきちゃんの進路、聞きたいように聞きたくない複雑な気持ちだった。

「変なやつ。」

そう言った晃の顔には笑みが浮かんでいた。
時々見せてくれる笑顔。

やっぱり好きだな。そう思っていた。

「晃君」

廊下から呼ぶのは市井と健太だった。
鞆を持って二人のところへ行く晃。

「あきちゃん、バイバイ。」

何も言っではくれなかったけれど、話せたことが嬉しかった。
ふつうに話せたことがただただ、嬉しかった。

放課後、もんじゃ焼きを食べに行った。

「あ、あたしのおこげ。いっただき。」

「あ！こら北川、人のを盗るな。」

「早い者勝ちだよん。」

「しーなも隙を与えると北川に狙われるぞ！」

「あはは。」

この二人と食事をするといつもにぎやかで楽しい。
自然と笑顔がこぼれてくる。

「で？へぐちゃんのひょうまひょうえこ・・・」

「こら、北川食うかしやべるかどっちにしろ。」

「あはは。」

ほんと楽しい。

「改めまして。で、めぐちゃんの話は？」
「うん、」

そう答えてヒロアキの顔をチラッと見た。

「いいぞ、話しても。」

悟ったヒロアキが言ってくれた。

「うん。」

オレンジジュースを一口飲む。

「写生大会の日ね、終わって関さんとボーリング行かないかって話していたのね。ヒロアキも一緒に。」

「うんうん。」

「そしたら突然あきちゃんが来て、ヒロアキに・・・」

「ヒロアキに？」

ここまで話し、再度ヒロアキの顔を見る。

食べながらも真剣に聞いている千夏。

「殴ろうとして・・・」

「なぐ？えっ・・・ほんと？」

予想外の話に驚いた千夏は目を大きくして見つめる。

「ああ。関くんが止めに入ってくれなければ殴られていたな。」

ヒロアキが答える。

「そ、それで？どうなったの？」

「っていうか、ヒロアキ関係者なんじゃない。」

「まあな。でも、俺はそこからは何があつたか知らない。」

再びに視線を戻す二人。
話しを続ける。

「私も突然の事でびっくりしたのだけど、何があつたのか知りたくて、あきちゃんが三組から出てきた事と、祐也の名前を言っていたから、祐也のところへ行つたの。」

「うん、うん。」

「そしたら・・・祐也が・・・」

「どうしたの？」

下を向き、再び言い難そうにする。

「・・・好きって言われて・・・抱きしめられた。」

「なにーっ!」

「・・・それをあきちゃんに見られた。」

「えーっ!」

「だってめぐちゃん、前にも祐也くんから・・・」

「う、うん、そうなの。」

「あきらめの悪いやつ。」

「おい、北川。そんな言い方はないだろ。」

「だってそうじゃん。前からめぐちゃんのこと好きだかなんだか知らないけどさ、ちゃんと付き合っていたのだし、別れたと思ったらすぐにはい次、みたいでそんなの嫌よ。」

「まあ・・・な。」

「で？」

「うん、結局祐也とあきちゃんに何があつたかはわからなかったの。」

「晃君に見られたのがショックでずる休みか？」

「いや、違うわ。めぐちゃんまだ何か話してないことあるでシヨ。」

鋭い千夏の視線を感じる。

「う、・・・うん。」

「まだあるのか？」

ヒロアキからも顔を覗かれる。

「その後、教室に戻ったら・・・芳沢くんがいて・・・」
「うんうん。」

「・・・す、好きだって言われた。」
「なにーっ！」

更なる驚きを見せる二人。
開いた口がふさがっていない。

「そ、それは驚いたわね。」
「だな。」

「うん、それでよくわからなくなっちゃって・・・」
「なるほど。」

「それで今、めぐちゃんの気持ちは？」

「うん、もう大丈夫。」

「私の気持ちは変わらないよ。」

「そっか。それなら良かった。」

千夏に笑顔が戻る。

反対にまだ神妙な面持ちのヒロアキ。

「まあ、芳沢君の話は置いて、」

「置いとくのか？」

「それでいいの。問題は、晃君と祐也君に何があつたかよね。」

「そうなの。ここ最近何度か二人が話しているのを見かけたことはあつただけだね。」

「それじゃあ、少し情報を調べてみましょうか。」

「ちなつちゃん・・・。」

「北川、何か知ってるのか？」

「知らないからこれから調べるんでしょ。相変わらず頭悪いわね。」

「頭悪いは関係ねーだろつ。」

「もちろん、あんたも協力するのよ。」

「オレかよつ。」

「当たり前でシヨ。当事者なんだから。」

「・・・・。」

千夏に押されて何も言えなくなるヒロアキ。

「よし、じゃあ決まりねん。」

「おばちゃん、ソフトクリーム。」

話を終わるとデザートを注文する千夏。

疲れきった様子のヒロアキ。

二人の様子を微笑ましく思った。

二人がいてくれて良かった。

2

翌月曜日。

週末はあまり考えずに過ぎていった。

十一月になり、土日とも塾の模試試験や対策講座で埋められていたから。

上履きに履き替えるところでふと気がついた。
下駄箱に晃の靴がある。

あれ。

早いな。

そう思いつつも教室へ向かう足取りが速くなっている。

あきちゃんに会える。

そう思うと、ドキドキと緊張とためらいと入り交ざった不思議な気持ちになる。

「おはよう。」

やはり顔を見ると嬉しい。

「早いね。勉強？」

何も返してはくれないが、それでも二人でいられる時間が嬉しい。
邪魔にならないようにと晃の斜め前の席に腰を下ろす。

しばらく沈黙が続く。

徐々に不安になってくる。

最初はそばにいられることだけで嬉しかった。
朝会えるだけでも満足だった。

でも・・・

また思ってしまう。

迷惑なんじゃないかって。

あきちゃんを想う気持ち、

あきちゃんにとってはそばにいることさえも良い風に思っていないのではないか。

私があきちゃんを好きな気持ちは知っているはず。

でも、祐也の事も知っている。

今度こそ呆れられたのかもしれない。

ひいたのかもしれない。

関わりたくないと思われているかもしれない。

そんな思いで胸が苦しくなる。

不安で呼吸が落ち着かなくなる。

いつの間にか顔が上げられなくなっている。

「今日は縛ってるんだな。」

「あ、うん。へ、変？」

「別に。」

嬉しかった。

あきちゃんが話しかけてくれたこと。

あきちゃんが私を見てくれていること。

あきちゃんが私に気がついてくれていること。

あきちゃんの一言が、さっきまでの不安を消し去ってくれる。

「忙しいやつだな。」

「えっ？」

「暗い顔してみたり、笑ってみたり。」

「そ、そうかな。」

晃に表情を読まれていたことに少し焦る。

「なんで暗い顔？」

「暗くないよお。」

笑顔で答えてみる。

「じゃあなんで笑ってる？」

「なにそれ。」

惚けて答えてみるが晃は真っ直ぐ見つめてくる。

「俺といると笑ってるな。」

「そう？」

「楽しいか？」

「うん、楽しいよ。」

あれ？

この話し前にもどこかでしたことがあるな。
いつだっけ……

思い出していると、晃が鞆の中へ手を入れ何かを取り出した。

「おみやげ。」

そう言っで渡してくれたのはペンギンのステッカーだった。

「もらっていいの？」

「ああ。昨日健太と市井と買ってきた。」

「へ、へえ。楽しかった？」

「楽しかった。」

グサッと突き刺さった晃の言葉。
楽しかった・・・のか。

晃からのプレゼントに喜ぶ反面、市井と遊んで楽しかったという言葉に複雑な心境である。

あ、お礼言っの忘れた。

思いがけない晃からのプレゼントにやはり嬉しさは隠せず、ステッカーをしまった鞆を大事そうに両手で抱え、顔が緩んだまま五組へ入っていく。

「おはよう、椎名さん。」

「お、おはよう。」

「嬉しそうだね。何か良い事でもあったかな？」

「えっ、ないよ、ない。」

芳沢のいつも通りの挨拶に慌てて応えたがやや無理があったただろ
うか。

「かわいい顔してるからさ。」

「えっつと・・・。」

芳沢のストレートな表現はやはり慣れない。

言葉に詰まって下を向いてしまう。

「うそうそ。ごめんね、困らせるようなこと言って。」

「自分は、確かに椎名さんの事かわいいなと思って見ているよ。でもね、椎名さんの気持ちも知ってるから。椎名さんが誰を見ているのかも。」

「じ、ごめんなさい。」

小さな声にしかならなかった。

そんなの言葉に慌てて芳沢が付け加える。

「謝らないで。自分は椎名さんの一生懸命がんばっているところがかわいいと思うし、応援してるのだから、今まで通りでいいんだよ。明るくて、元気な椎名さんを見ているのが好きだからさ。応援する。」

「ありがとう。」

そっというのが精一杯だった。

芳沢の優しさ、見守ってくれている温かさを感じたから。

そして少しだけ寂しそうな表情を浮かべていたから・・・

それ以上の事は言えなかった。

芳沢の優しさに甘えることも出来たかもしれない。

この人に想われていたら、優しくしてもらえたら、今までの嫌な事が終われるかもしれない。

うつん。

何もかも忘れて、彼に守ってもらうのは、優しさを利用しているだけだから。

それでは何の意味もない。

私は私の想いを大切にする、そう決めたのだから。

翌朝

昨日に続いて下駄箱に晁の外靴を見つける。

「あきちゃん、おはよう。」

教室に二人きり。

朝の温度の低い教室はひんやりしていてどこか心地良い。
読んでいた小説を閉じる晃。

「何読んでるの？」

「推理小説。この間買った。」

「健太くんといっちゃんとお買い物行った時に？」

「そう。」

「あ、あきちゃん昨日はありがとう。前にもらったぬいぐるみと同じペンギンだったね。」

「ああ、お前が喜ぶだろうからって市井が。買ってやれってさ。」

「あ、ありがとう。」

なんだ、いっちゃんに言われたから買ってくれたのか。

いいな、いっちゃんをあきちゃんと一緒に買い物に行けて。

一緒に選ぶことだってできるのだね。

嬉しいはずなのに市井に対して妬いている自分が嫌だ。

「他には何か買ったの？」

「いや、ゲーセンと本屋寄って帰った。」

「そうなんだ。でもいいね、買い物楽しいよね。」

「今度部屋に時計買おうと思って。」

「あきちゃんお部屋に時計なかったの？」

「無い。」

「うそお、どうやって時間わかるの？」

「目覚まし時計。」

「あ、そっか。」

自分のしたバカな質問に思わず笑ってしまった。

「壁掛け時計かぁ。大きくて見やすいのがいいよね。丸いの、正方形、長方形・・・ あ、そういえばこの前フライパンの形した時計見たよー。」

「おまえ、本当に楽しそうだな。」

晃が吹き出すように笑っていた。
それを見て自分が一人で勝手にしゃべっていたことに気がつく。

「あ、ごめん、私一人で・・・」

恥ずかしくなり顔が赤くなる。

「ふ・・・。」

笑いの止まらない晃。声を出して笑うところ初めて見た。
笑われているのに、なんだか嬉しくなってしまう。

「俺の買い物についてくるか？」

一瞬びっくりして、

「うん！」

迷わず答えた。

「ウソだって。」

「えっつ。」

「うっそ。」

「ほんと？」

「ウソ。」

「どっち？」

「どっちでしょう。」

「えっ——」

「ちょっとあきちゃん、どっち？」

「さあ。」

「えーっ、どっち？」

「さあ。」

「もう、あきちゃんってばっ。」

「どっちでしょう？」

「だからどっち？」

「さあね。」

「もー！。」

反応を見て面白がっている晃。

晃の言葉の一つ一つに動揺しながらも、こうして晃が笑っていてくれることがとても嬉しかった。

優しい笑顔。

こっちまで元気になれるくらい。

ねえ、あきちゃん。

本当に一緒にお出かけできたらいいのにね。

ねえ、あきちゃん。

ずっとこのままでいられる？

不思議だね。

こんなにもあきちゃんのことを想っていて、あきちゃんのこと大切で。

だから壊れてしまうのが怖い。

席替えをした。

なんと隣の席は恵子だった。

「めぐー！」

「けいちゃん！」

「やったね！」

「もえーっ！」

二人抱き合って喜んでいるところに二宮が覆いかぶさってきた。

「こらっ、にの暑苦しい。」

「恵子は冷たい。」

「ってゆうか私、黒板見えないじゃん。」

恵子の前の席は二宮だった。

「椎名さん、斉藤さん、よろしくね。」

「よっちゃん、おれには？」

「にの、隣だな、寝るなよ。」

「おーいつ、それだけ？」

「はははは。」

二宮の隣での前の席は芳沢だった。

「よっちゃんに、めぐ、これでうちの班は成績上がるわね。にの、足引っ張らないですよ。」

「恵子」そんなんばつかなの？おれ。」

恵子、二宮、芳沢、萌。

数ヶ月を一緒に過ごすことになる席。

卒業まであと何回席替えがあるのかな。

その中の一回で、仲の良い友達に囲まれた席となれた。

でも・・・

席替えをする度にふと思うこと。

隣の席。

あきちゃんの隣に、私は座ることは無いのだな。

クラスの違いを思い知らされる。

放課後

学級委員の仕事で久しぶりに残っていた。

「よし、これで終わり。」

「お疲れさま。」

「椎名さん、自分資料戻しに行ってくるけど、どうする？」

少し考えてから答える。

「あ、ありがとう。じゃあ、お先させてもらおうかな。」

「わかった。じゃあまた明日ね。」

「うん、バイバイ。」

そう言つと笑顔で資料を片手に教室を出て行く芳沢。

芳沢の人としての優しさにいつも助けられる。

一緒に帰ることになるのを考えて、先に聞いてくれる。

すごいなと思う。

この人のもつ優しさを尊敬する。

誰もいない教室を後にし、玄関へと向かう。
下駄箱に、晃の外履きを見つける。

あれ？

あきちゃんまだ残っていたの？

そう思うと足先が自然に向いてしまう。

四組へと・・・

次の瞬間だった。

「萌ちゃん。」

腕を掴まれた。

突然のことに驚き、振りほどこうとしたが強く力が入っていて動
かなかった。

「やっと捕まえた。」

「祐也・・・」

「萌ちゃん、俺の事ずっと避けてただろ。」

「そ、そんなこと・・・」

「嘘だ。」

強い口調。

「避けてただろ。」

真っ直ぐ目を見てくる。

掴まれた腕。

怖ささえ感じてしまう。

「話がしたい。」

「は、離して……」

「逃げるなよ。」

「……」

「一度しか言わないからちゃんと聞いて。」

「ゆ、祐也痛い……」

「聞いて。」

腕を掴む祐也の手にさらに力が入る。

「わ、わかったから。祐也痛い……。」

「聞いてくれるね。」

こつくりと頷く。

「ありがとう。」

そう言つと手の力が弱まった。

「俺が今、好きなのは萌ちゃんだよ。」

「付き合ってくれないか？」

いつもの、柔らかい口調に戻っていた。

「わ、私は……」

涙をこらえるので必死だった。

ここで泣いてしまったら、認めることになってしまう。

だめなの。

祐也じゃだめなの。

そばにいて欲しいのは・・・

そう言わなきゃ。

ちゃんと言わなきゃ。

はっきり言わなきゃ。

ほら、祐也に・・・

「返事は後で聞かせて。」

葛藤している自分に向けられた答えは意外だった。
思わず顔を上げる。

「萌ちゃんにはゆっくり考えてもらいたいんだ。今ここでは聞きたくない。」

「・・・・・・・・」

「待つてるから。」

そう言つとの頭を撫で、ほっぺたに触れてくる。

「じゃあね。」

祐也の手が離れる。

体が金縛りにかかったかのように動かなくなっていた。

あきちゃんに会いたい。

あきちゃんの顔が見たい。

あきちゃんの手に触れたい。

あきちゃんの・・・

金縛りを振りほどくかのように必死に自分の体を動かした。
何度も転びそうになりながら、もつれる足を前に出し、走った。
下駄箱から四組へのいつもの道が、とてつもなく遠く感じる。

毎朝、下駄箱であきちゃんの靴を見ると嬉しかった。

朝の時間、会えるのが嬉しかった。

早起きして、学校に来るのが。

好きな人が同じ学校にいる。

廊下で、教室で、すれ違うたびにドキドキする。

あなたを目で追うだけで満たされる。

あなたが振り返ってくれたらそれは宝物。

あなたが笑ってくれたら、見つめてくれたら、なんて素敵なこと。

それが・・・

幸福な時間。

やっこの思いで教室へとたどり着く。

四組の扉を開ける。

いつもより扉が重く感じてしまう。

そこに、あきちゃんはいた。

「あきちゃん。」

おそろおそろ声に出す名前。

声が震えているのが自分でもわかった。

「なに泣いてる？」

「泣いてないよ。」

「泣いてる。」

「泣いてないよ。」

顔見てほっとしたら、溢れてくる涙を止めることが出来なかった。

「ごめんね、なんでもない。」

そう言つと晃に背を向け涙をとめようと手で拭った。

「なんで泣いてる？」

「泣いてないよ。」

「泣いてる。」

「泣いてないよ。ほら、笑ってるよ。あきちゃんという時は笑ってるもん。」

笑顔を作り振り返って見せた。

「泣いてるだろ。」

「泣いてないよ。」

再び晃に背を向け、空いている椅子に座った。

「どうした？」

晃が隣の席にやってきた。

「なんでもない・・・。」

顔を上げられない。

そばにいてくれるだけで充分だった。

気持ち徐徐に落ち着いてきた。

「なんで泣いてる？」

「泣いてないよ。」

「おまえなあ・・・」

「あ、あのねっ、席替え、席替えしたの。」

話を変える。

顔を上げたに晃も話をあわせることにした。

「それでねっ、隣はけいちゃんなんだよー。すごいでしょ。」

「斜め前にはにのもいてねー。」

「授業始まる度にけいちゃんがにので黒板が見えないーってね、」

黙って聞いている晃。

気持ちが落ち着くと自然に笑える自分に戻れた。

「それでね」

話しながら気がつく。

あきちゃんが・・・

私の思っていた夢が・・・

叶う事のない夢が・・・

実現した。

隣の席に、あきちゃんが座っている。

あれれれ？

叶っちゃった。

叶っちゃった。

あきちゃんと隣の席。
嬉しい。

気がつくと、さっきまでの涙は吹き飛んでいて。
心から笑顔になっていた。
隣にあきちゃんがいる。

「ほんと忙しいやつだな。」

晃が見つめてくれてる。
晃も笑顔になっている。

「泣いたり、笑ったり。」

そう言うとき、晃の手がの頭に触れ、髪に触れ、
そのまま頬をつたって涙の後を消してくれた。

ありがとう。
あきちゃん。大好き。

この想いをあなたに伝えたい。
今すぐにでも伝えたいよ。
あなたにとって私の想いが迷惑でないならば・・・

「あ、あきちゃん・・・」

「あのね・・・私」

“キーンコーンカーンコーン”

突然鳴り響いたチャイムの音に驚いて言葉が続かなくなってしまった。

静かな教室に響き渡るチャイムは下校の合図だった。
それはまるで、この場を終わらせるかのよう。

「か、帰らなきゃね。」

晃は何も言わずに鞆を持って教室を出て行く。
後続いた。

「そういえばあきちゃん、こんなに遅くまで残ってたの？」
「ああ、ちよつとな。」

それ以上は聞くなと先を歩く晃の背中が語っているようだった。
でも、追いつきたくて、
あなたの隣をもう一度歩きたくて・・・
小走りで追いついて、
並んでみた。

晃の顔を下から覗く。
すると、口が動くのが分かった。

「進路のことです。担任に呼ばれた。」

「高校のこと？」

「ああ。」

あきちゃんの進路。
聞きたかったこと。

あきちゃんから話してくれるだなんて。
でも、正直聞くのが怖い。

「あきちゃん、と、東京に行くってほんと？」

「ああ。」

「そ、そうなんだ。」

それ以上は何も言えなくなってしまう。
再び晃の背中を見て歩くことになった。

校門まで歩いた。

ここから先は別々の方向になる。

知ってしまったあきちゃんの進路。

これから先も・・・別々。

そう思ったからなのか、今までは考えもしなかったことが頭を過ぎった。

一つの質問。

どうしても聞きたかった。

聞いてしまいたかったのかもしれない。

私の想い、迷惑ではないかと・・・

「あきちゃん、あの・・・もう少し話せないかな？」

顔を見ることは出来なかった。

しばらく沈黙になった。

「今日はもう遅いから帰れ。明日の朝早く来ればいいだろ？」

「う、うん。」

「じゃあな。」

そう言つとまた晃の背中を見続けることになった。

翌朝。

昨夜は眠ることが出来なかった。

祐也から言われた事、

あきちゃんの前で泣いてしまった事、

あきちゃんに触れられた事、

あきちゃんの進路を知った事、

色々な事があつたけど、それでも前に進みたいと思う気持ちは変わらなかった。

いま、どう思っているのか。

どう思われているのか。

あの夏の日、あきちゃんに想いを伝えた。

あきちゃんも気持ちを話してくれた。

あれから私の気持ちは変わっていない。

でもあきちゃんの気持ちは変わっているかもしれない。

あの時は想ってくれていたかもしれない。

でも・・・

人の気持ちは変わるもの。

だから聞きたい。

だから知りたい。

いまのあきちゃんの気持치가。

下駄箱には晁の外靴があつた。

緊張しながら教室へと向かう。

そういえば・・・

最近あきちゃんの登校時間が早くなっていた。

勉強をしているわけではなさそうだけれど、

私よりも早く学校に来ていた。

おかげであきちゃんと朝から会えて話をすることも増えていたけれど。

私を避けるならば朝早く来ることは考えないよね。

朝私と話す時間、嫌ではなかった、そう思ってもいい？

四組の前に着いた。

一呼吸してから元気に扉を開けた。

「あきちゃん、おはよう。」

いつも通り笑顔で挨拶をする。

いつも通り何も言わない晃。

「ほ、ほんとに早く来てくれたのだね。」

晃の前の席に腰掛ける。

目が合う。

「寝れなかったのか？」

「あ・・・えつと・・・うんと・・・」
「話って？」

寝不足の顔を見事当てられて返答に困っていると話題を変えてくれた。

「あ、うん。」

「あ、あのね、」

深呼吸をする。

大丈夫。
勇気を出して。

「私があきちゃんを好きでいるの、迷惑？」

「べつに。」

「迷惑じゃないの？」

「ああ。」

「ほ、ほんと？」

「ああ。」

「本当？」

「本当。」

「おまえ、この会話になるとしつこいからな。先に言っぞ、本当だ。」

前の事を思い出した晃の顔には笑みが浮かんでいた。

「良かった。」

晃の優しい顔を見ていると自然と笑顔になる。
晃の声を聞いていると自然と落ち着く。

はぐらかされなかった、
拒否されなかった、
しっかり答えてくれた。

もう一度晃と向き合えたことが嬉しかった。

鞆を置きに五組へ行った。

「めぐちゃんおはよん。」

千夏とヒロアキがいた。

「あれ？二人とも・・・」

「晃君とゆつくり話せた？」

「ちなっちゃん、知ってたの？」

「ヒロアキがね。」

「ヒロアキ・・・ありがとう。」

「別に。オレが入ってややこしくなるよりはいいだろ。」

「やるねっ、ヒロアキ。」

「それより、しーな、晃君の進路の事知ってるか？」

「うん。聞いた。」

「そっか・・・。」

「四組では有名な話なの？」

「まあな。何でか理由は知らないけど、東京の高校受験する事は噂になってる。」

「めぐちゃんから聞いてみたら？」

「えっ。私が？」

「今の晃君なら話してくれると思うけどな。」

「そ、そうかなあ。」

「大事なコト、めぐちゃんには話してくれてるじゃない。最近晃君早く来ているの、めぐちゃんと話す為でしょ。」

「う、うん・・・」

「そうだ、しーな、祐也の事は大丈夫か？」

「あ、うん・・・ちゃんと返事しないとね。」

「返事？」

二人同時に言葉が出る。

「あのね、昨日祐也と話したの。」

「それで、すぐにではなくていいから返事が欲しいって言われたの。」

「ふーん。ついに祐也君が動いたか。」

「しーなは大丈夫なのか？」

「うん、ありがとう。今のところ大丈夫だよ。」

自然と笑顔が出た。

この二人が相談にのってくれて、いつも励ましてくれる。

あきちゃんが優しくしてくれて、元気をくれる。
だから今の私は私でいられるの。

「めぐちゃーん、先生が職員室に呼んでいたよ。」

「うん、わかった。」

「ちなっちゃん、ヒロアキまたね。」

教室を後にする。

残された千夏とヒロアキ。

「祐也君情報、あんた何か持ってるでシヨ。」

「……」

「めぐちゃんに話しても大丈夫だと思うよん。あの子強くなったから。」

「そうだな。前は泣いてばっかだったのにな。」

「恋する女の子は強くなるのねん。」

「なるほどな。」

「いつ？」

「……」

「もういいんじゃない？祐也君本人が動き出したのだから。」

「……」

「皆それぞれの想いを話しましょうよ。」

「・・・」

「ヒロアキさん？」

「わーかったよ。話せばいいんだろ、話せば。」

「はいな。」

「じゃあ、今度時間作るな。」

「よろしい。」

満足そうに笑う千夏に対し、やや疲れきった表情のヒロアキだった。

4

今日は校外学習の日。

六クラス中、三クラス毎午前と午後に別れて地域の保育園、幼稚園、老人ホーム施設を訪問する。

四組と五組は一緒に午前訪問。

朝のホームルームで配られた、訪問先のプリント。

自分の名前と訪問先を確認する。

すると、なんと。

「うっ」

「な、なに？今の？」

意味不明な音声を発したところ、隣の席から恵子が慌てて声をかけてきた。

「ひひ」

「め、めぐ？」

「またも、変な言葉を発したところ、恵子が不安そうな顔で見つめてくる。」

「めぐ、壊れた？」

「だ、だって、けいちゃ・・・ひふひふ。」

「??？」

萌の指差したところを見る恵子。

「なるほどね。」

プリントを見比べ、納得したように頷く恵子。

「そりゃ、壊れるはずだわ。」

なんと。

訪問先が、晃と同じ保育園へ行く班になることが出来たのだ。

こ、これはうれしい。

何選考で決められたかはわからないが、感謝である。

そのホームルームでは事前説明を兼ねていたが、もはや担任の話を聞く余地もなく、一人プリントを眺めながら、顔がニヤニヤしてしまう。

穂高 晃

椎名 萌

同じところに名前のあるプリントを、穴が開くくらい、ただただ、見つめていた。

このプリント、捨てられないな。

ホームルームが終わると、徒歩でそれぞれ地域の訪問先へと行った。

学校から5分と、近くにある保育園へ到着。

そこには、想像以上に元気に走り回る園児達の姿があった。

保育士は園児達を静かにさせようと必死になっているが、皆聞いていないかのように走り回っている。

その様子を微笑ましく眺めていると、晃に話しかけられた。

「うるさい。どうにかしろあれ。」

「あれ、もしかしてあきちゃん子供嫌い？」

「嫌い。」

目が合ったので思わず笑ってしまった。

「なんで笑う？」

「だって。あきちゃんだって小さい頃はああやってはしゃいでいたと思うよ。」

「俺は静かな子だった。」

「あはは。自分で言うかな。」

不思議だな。

今日は二宮も竹田も関も、亮一も恵子も、誰も一緒の班にはいない。

こうしてクラス別々の生徒が集まった班の中で、あきちゃんと話していることが、話せていることがなんだか不思議に思える。

一年前の去年、私はまだあきちゃんを知らなかった。

丁度一年前、去年の秋、写生大会で描いたあきちゃんの絵が気になり、穂高晃という人と知り、いつの間にかあきちゃんが存在が大

きくなり、あきちゃんへの想いも大きくなっていった。
そして今、隣に立っている。

ねえあきちゃん、私少しは成長したかな？

私、少しはあきちゃんに相応しくなったかな？

あきちゃん、少しは私のこと想っていてくれるかな？

子供達と触れ合う時間、いつもは無表情な晃もさすがに子供相手に苦戦しているようだった。

その横顔がなんだかとても可愛く思えた。

意外にも晃は子供達から人気を得て、抱き上げてぐるぐる回してもらいたい子供達の列が出来ていた。

無邪気に服や腕を引っ張る子供達。

あきちゃんの表情を狂わせる程の存在。

子供達のパワーは計り知れないと思った。

保育園訪問の時間が終わると少し寂しくなった。

また別々のクラスになるのだね。

あきちゃんと過ごせる時間減っちゃうね。

帰り道、少しだけしゃべれた。

学校へ戻るとちょうどお昼になるところだった。

午前中一緒に授業として受けられたみたいでなんだか嬉しかった。

下駄箱で靴を履き替え、教室まで一緒に歩いた。

「楽しかったね。」

「そうか？」

「可愛かった。」

「どこが？あんなチヨロチヨロしてうるさいのか？」
「うん。」

あきちゃんの手がまた首をくすぐろうとしているのに気づいたので、

「もお、やめてってばー。」

そう言っで手で振り払おうとすると

え？

その手をあきちゃんに持たれた。

温かい・・・

あきちゃんの手。

大きくて、

細い指、

ごつごつした手。

さっきまで子供達がつないでいた手。

今は私が触れている。

あ、

手、つなぐのこれで三回目だね。

そのまま廊下を歩いているのが信じられなかった。

これは夢？

現実？

もうわからなくなっていた。

それほど嬉しくて。

うれしくて。

幸せで。

これよりうれしいことが、幸せがあるだなんて考えていなかった。
だから・・・

私はこの時あきちゃんが言った言葉を、後でものすごく後悔することになる。

「やっぱおまえのこと好きだわ。」

取り返しがつかないよね。

なんでこんなことになってしまったのか。

すっかり調子にのっていた私。

嬉しくて、バカみたいに浮かれていて。

はつきり言われたのに、

せつかく言ってくれたのに、

聞こえなかった振りをして、

何事もなかったかのように次の話題を投げかけたのは私。

呆れたよね。

もう絶対に言ってもらえない。

バカだよね。

本当に。

自分でも呆れる。

どうしてこんなことしてしまったのか。

ただ、

恐かった。

また涙を流すのが。

怖かった。

その先に何があるのかわからなかったから。

うつん、

わかっている。

本当はわかっているの。

気づいているの。

だから前に進まなきゃいけないのに・・・

私は自分で進むことを拒んでしまった。

恐れてしまった。

あきちゃんから逃げてしまった。

少しも成長していない私。

恋愛に臆病で、結局逃げ出してしまふ。

こんな私嫌。

あやまらなきゃ。

とにかくあやまらなきゃ。

もう二度と口にはしてもらえないかもしれない。

それでも、気まづくなるのは嫌だから。

私をもっとしっかりしなくては。

明日

謝ろう。

翌日、朝から緊張していた。

会うのが恐かった。

どうして？

こんなにあきちゃんのこと好きなのに、
好きなのに会うのが怖いなんて。

何がそんなに？っていう程に恐かった。

ちなつちゃんの前で涙か止まらなかった。

「めぐちゃん・・・」

「ちなつちゃん、もうこんな自分嫌だよ。」

小さな千夏に泣きつく。

恐くて恐くて体が震えているのが自分でもわかる。

「そうだね、めぐちゃんは損な性格なのねん。」

「両思いなのにうまく進展しなかった恋、私見てきたからね。今回はあきらめて欲しくないな。」

「ひつく・・・両思い？」

「そう。」

「違うよお。」

「めぐちゃんがそう思っているだけ。私からみればあれは両思いだったわ。」

「・・・つく。あれって？」

「ん？今話すと話がややこしくなるから、今回のこと考えよう。」

「ん・・・。」

「めぐちゃんは晃君とどうなりたいとかはあるの？」

「どう？」

「そう。ただ好きだ好きだって気持ちをぶつけてばかりじゃなくて、その先を考えたことある？」

「・・・ない。」

「きつと、晃君も同じなのだと思うよん。めぐちゃんを好きな気持ちは本物。でもその先どうしたらいいのかは考えていないと思う。」

「うん。」

「だからね、そんなに気にすることないと思うの。」

「そうかなあ？」

「相手が晃君だからね、晃君に合わせて考えたら、二人ともゆつくり恋愛していけばいいと思うよん。」

「ゆつくり？」

「そう。あたしはね、もうめぐちゃんに押せーとか、はつきりさせなーとかは言わないよん。だってめぐちゃんよりも晃君の方がお子ちゃまなんだもの。そんな晃君は昨日の今日でめぐちゃんへの気持

ちが冷めたりなんかはしないよ。むしろ晃君も同じこと悩んでるんじゃないかな。」

「あきちゃんが？」

「今日どうやって話したらいいかな、気まずいなってね。めぐちゃんの恐いっていう気持ちもわかる。めぐちゃんにとっては初めてちゃんと相手と向き合って恋愛しているのだからね。」

「うん・・・。」

「でも大丈夫だよ。変わらぬ思いがあれば大丈夫。ねっ。」

「うん。」

千夏の言葉に涙が止まった。

でもやっぱり恐かった。

めぐちゃんは恋をする毎に確かに成長はしていると思う。

でもね、恋する自分が成長するばかりで、相手の事を考えるところまでは至らなかったのね。

人を想うことに一生懸命になりすぎて、

人から想われることに慣れていない。

人から想われる自分なんてはじめから切り離して考えているのかもしれない。

まっすぐなめぐちゃんは、本人が気がついていないだけで実は皆から愛されているんだよ。

だから大丈夫。

何があっても変わらないよ。

そう言ってあげたい。

二時間目、移動教室から戻って来た時、ちょうど晃が四組から出てくるところだった。

反射的に体が動いてしまった。
走って五組へ駆け込み、会うのを避けた。

教室の中からそつと廊下を見ていると、なんとちょうどあきちゃんを通つて。

あきちゃんもこつち見ていて目が合ってしまった。
すごく辛かった。

勇気を出さなきゃ。

話しかけて昨日のこと謝らなければ。

昼休み、勇気を出して廊下に出たものの、あきちゃんはタケちゃん関くん達と話している。

私はただその場にいるだけで、あきちゃんの声が聞いているだけで、会話に入ることもあきちゃんに話しかけることもできなかった。

あつという間に昼休みが終わり、チャイムが鳴る。

関くん達と一緒に教室に戻る。

顔が上げられなかった。

だから、そんな私をあきちゃんが見つめていたことなんて気づくはずがなかった。

とうとう五時間目が終わってしまった。

この十分間が勝負だ。

そう思つて廊下へ出た。

すると晃が廊下側の窓から顔を出した。

「あ、あきちゃん。」

何も言わないがこっちを見てくれている。
続けて今言わなきゃ。

「あ、あのね。」

「あの・・・」

言葉に詰ってしまう。

言わなきゃ、

謝らなきゃ。

「あの、昨日、昨日ね・・・」

涙でそう。

どうしよう、

言わなきゃ、早く

「タケに理科の一分野貸してって言うて。」

「えっ？」

「いいから、借りてきて。」

「う、うん。」

言われるまま五組に戻り竹田から教科書を借りてくる。
再び晃のところへ行き、教科書を渡す。

「これタケの？」

「そうだよ。」

「おまえのかと思った。」

「え？」

チャイムが鳴り、そこで会話は終わった。

あれ？

私謝るつもりで行ったのに・・・
言えなかった。

あきちゃん呆れていた？

六時間目が終わり、掃除になった。

教室掃除の私はほうきで床を掃いていた。
すると、

五組に晃が来た。

「これ、返しといて。」

「もうすぐタケちゃん来るよ？」

「いや、返しといて。」

私に借りるのも返すのも頼むだなんて、何を考えているのかなあ。

「あ、あきちゃん、」

「ん？」

「あ、あのね、あの・・・」

今度こそ言うのだ。

「昨日ね、ごめんね、私・・・あの・・・ごめんなさい・・・」

「昨日？ああ、それで寝不足か？」

「え？」

「うう。」

そう言う私の目の下をあきちゃんが指でなぞる。

その手がとても優しくて。
また泣きそうになった。

結局謝ることしか出来なかったけれど、
でも、あきちゃんはおわかってくれているような気がして。
優しさにまた救われた。

今朝、ちなつちゃんに言われたことを思い出した。

あきちゃんも気まづくならないか悩んでいるのではないか。
変わらない想い。

そうだね、

あきちゃんが、なかなか話を切り出さない私に与えてくれたきっ
かけだったのかもしれない。

昨日の今日で変わることなんてない私の想い。

うん、変わらないよ。

ありがとう、あきちゃん。

ごめんね。

ニヤケ顔でタケちゃんに教科書を渡すと、教科書で思い切りぶたれ
た。

でも痛くなかった。

5 .

十二月には早い雪が舞ってきた。

廊下の窓から見える山々はすでに白い帽子をかぶっていた。

「めぐ！雪降ってきたよ！」

隣の席の恵子に言われて窓から外を見ると、中庭の芝生が薄っすら白いじゅうたんのようになってるのが見えた。

「寒いと思ったら。」

「今年は早いね、初雪。」

「あーあ。受験生は雪が降っても遊べないつと。」

そう言っ て両手を上に伸ばしシャーペンを持っ たまま伸びをする恵子。

「めぐは最近遊んだ？」

「ううん。土日はほとんど塾。」

「だよねー。でもたまには遊びたいよ、息抜きにさ、パフェでも食べに行こうよ。」

「行きたいね。」

「っ て言っ ても塾の違っ 私達が予定を合わせるのも難しいのだけだね。」

「そうだね。」

「めぐは第一志望変わらずT校？」

「うん。けいちゃんはI校？」

「そう。入れたらだけどね。」

「けいちゃんなら大丈夫だよ。」

「めぐとは高校別々か。つまんないな。」

授業開始前のチャイムが鳴る。

他のクラスから遊びに来ていた生徒達が戻り始める。

廊下には教室移動の為生徒達が溢れ出していた。

ざわざわした空気の中、皆それぞれに次の授業の準備をしている。

「あ、こっち見た。」

「え？」

「いま、めぐのこと見てたよ。」

「へ？誰が？」

「穂高。」

「うそお。」

「ほんとだよ。廊下からこっち見てたよ。目合ったもん。」

「まさかぁ・・・」

次の授業が移動教室な四組。

確かに五組の前を通っていく生徒達が見えた。

「そつえばめぐ、どうなったの？」

「えっ？」

「穂高よ。穂高。うまくいつてんの？」

「うーん・・・す、好きだけど、それだけかな。」

「まあ、受験と恋愛の両立は難しい？どこか一緒に出かけたりしてるの？」

「全然。そんなんじゃないもの。」

「そうなの？」

「うん。遊んだのは夏に一度だけ。皆も一緒に。」

「あらあら。じゃあ、冬休み、また遊べるかもね。」

「どうかなぁ・・・」

「まあ、暇だったらあたしとパフェ食べに行こうね。」

「うん。」

冬休みかぁ。

この間、一緒に買い物に行く話が出たね。

でも、嘘って言われたんだっけ。

あきちゃんと・・・ううん、

皆と一緒に良いからまた遊びたいな。

学校以外であきちゃんと会える機会なんてないから。

放課後

今日は日直当番で残っていた。

「あれ？日直、椎名一人？斉藤さんは？」

「塾の時間だから先に帰ってもらったよ。」

「あつ！椎名、何食ってる？！」

「ごめんなさい。生活委員の竹田くん。」

「おまえ悪いと思ってないだろ。」

「思ってます。思ってます。はい。」

そう言つと竹田の手にもチョコレートを一枚置く。

その手を口へ運ぶ竹田。

「おいしい？」

「まあまあな。」

「はいこれで共犯。」

「椎名　！！」

「あはは、怒らないでつて。ひゃあああー@@@」

声をあげ、首をすくめる。

「タケヤン、首はやめてつってばっ！」

「早く日誌書けよ。戸締り見てくるから。」

「はいはい。書きます　ひゃあああー@@@」

再び声をあげ、首をすくめる。

「ちょ、だ、誰??」

振り返ると首をくすぐってたのは晃だった。

「タケ、終わるか?」

「おう。もう少し。」

戸締りチェックをしながら答える竹田。

「あきちゃんも食べる?」

「おいっ、椎名!」

「チヨコか。甘いな。俺のガム食うか?」

チヨコには手を伸ばさず、自分のポケットからガムを取り出した。

「おいっ! 晃!」

「つたくおまえらは生活委員の俺の前で堂々と菓子を出すな!」

「あきちゃんありがとう。」

「そして食うな!」

「あきちゃんタケちゃん待ってるの?」

「ああ。」

「おまえら俺の話聞いてないだろ!」

「一緒に帰るの?」

「買い物。」

「おれは何も見えてないからな!」

二人の会話に諦めたかのように竹田は戸締りチェックに戻った。

「時計?」

「いや、ゲームソフトの発売日なんだ。」

「えー、ゲーム？受験生なのにゲーム？」

「受験は関係ねーだろ。」

「余裕だね。」

「椎名、早く日誌書けよ。晁とゲームが待ってる。」

「わかったよー。でも手が冷たくて思うように動かないのよ。」

「今日雪降ったもんな。」

竹田が窓の外を見ながら言う。

一度シャーペンを置き、両手に息を吹きかけて暖めていると、

「冷たいな。」

えっ？

その手を晁がとり、握っているではないか。

ええつつつ！

ちよっ！

う、嬉しいけど、タケヤンがいるのに・・・

見ている前で・・・

「隣行ってくるから戻って来るまでに書いとけよ。」

「は、はい。」

教室を出て行く竹田。

未だ右手を握り締めている晁の左手。

「おまえ手も小さいな。」

そう言つと今度は自分の右手との右手とを合わせて大きさを比べている。

「第一関節より下だな。」

「そ、そう？」

温かい。

大きな手。

細長い指。

あきちゃんの手。

すっかり手も温まり、緊張で体全身がぼかぼかしているのがわかった。

日誌の続きを書いていると向かいに座っている晃の視線を感じた。何も言わずに真っ直ぐ見ている。

顔が赤くなっているのに気づかれたくないので日誌から目を離さずに聞いた。

「な、なに？」

「祐也と付き合うのか？」

あまりにも突然の事で一瞬頭が真っ白になった。

「えっっ・・・な・・・」

言葉を失った。

次に出てきたのは涙だった。

慌てて拭う。

自分でもびっくりした。

「また泣いて・・・」

そう言つと晃が頬に触れてくる。
涙を拭いてくれる。

晃の手よりも温度の高い頬。
触れられたところが更に熱くなる。

「だって・・・あきちゃんが変なこと言うから・・・」

「違うのか？」

「違うよお。」

だんだん悲し涙になってきてしまった。

私の想いは伝わってなかったのだろうか。

あきちゃんの口から祐也の名前が出るだなんて。

あきちゃんから祐也の事が・・・

あ、あれ？

なんであきちゃんが祐也の事知っているの？

あれ？

あきちゃん？

そう考えたら涙が止まった。

「あきちゃん、何で祐也の事知っているの？」

「ああ。」

「知ってるの？」

「ああ。」

「聞いたの？本人から？」

「ああ。」

「そっか、知っていたのだね。」

再び口を閉ざす。

沈黙の中、日誌を書き進めた。

あきちゃんは、全て知っていた。

私が祐也を好きだったことも、祐也が私を好きなことも。きつと、私がいまあきちゃんを好きなことも。

皆の気持ちを全て知っていて、

あきちゃんの気持ちはどこにあるの？

日誌を書き終えた。

シャーペンを片付け始めると晃が口を開いた。

「なんで泣いた？」

「え？」

「なんで泣いた？」

「えつと、あきちゃんから祐也の事言われたから。」

「辛いのか？」

「う、うん。」

無表情だけど真っ直ぐ見てくる晃。

恐る恐る、晃の質問に答えていく。

「辛いから泣くのか？」

「す、好きな人から言われたらショックだよ。」

「ふーん。」

好きな人。

さりげなく文章にのせてみたのだけれど気づいたかな？

そつえば・・・

あきちゃんが、こんな風に私が泣いていると気にしてくれるのは

なぜなのだろう。

そんな風に考えていた。

「俺がおまえと付き合わない理由知りたいか？」

「しりたい！」

また唐突な晃の発言だったが、今度ばかりは即答で答えた。
こんな機会めったにないに違いないと思ったから。

「俺じゃあおまえを楽しませることが出来ないから。」

「えっ？」

「俺は何でおまえが泣いているのかもわからないし、俺といて何でおまえが笑っているのかもわからない。」

「だから俺より祐也と付き合う方がいいだろ。」

そう言うのと、仕事を終えて来た竹田と合流し、二人は教室を後にした。

翌日

「なるほどね。」

昨日の出来事を千夏とヒロアキに話した。

「晃君なりにめぐちゃんの事、考えていたのねん。」

「うん……。」

「きつと、めぐちゃんの事知ろうと思って向き合ってくれてたのねん。でも、向き合ってみただけでわからなかった。そんな時に祐也君

からめぐちゃんの事を聞いて、それで少し距離を置いた時期があったのねん。」

「うん。たぶん、それが私悩んでた時期。嫌われたのではないかって。私の気持ちが悪かったのではないかって。」

「でも晃君もめぐちゃんの気持ちは知っていたからね。色々悩んだと思うよ。」

「うん。だからこここのところ優しくかったの。夏が終わって、秋に気まづくなった分、最近はおきちゃん優しくったんだ。話もいっぱい聞いてくれて。だから・・・」

「だから？」

「やっぱり好きだなんて。」

「うんうん。」

「夏休みの思い出が印象深くて、でも秋は辛くて、祐也の事も、芳沢くんの事もあって自分の気持ちが変わらなくなった時もあった。」

「でもめぐちゃんを楽しみだけじゃなくて苦しい事も乗り越えたから、本当に晃君の事好きになれたのじゃないかな。」

「うん。」

「それでいいじゃない。」

「お互いの気持ち、確かめて、付き合うのだけが恋愛じゃないと思うよ。晃君も、めぐちゃんも、自分の気持ちに正直になることが必要なんじゃないかな。今は。」

「うん。ちなっちゃん、ありがとう。」

「いーえっ。」

それまで黙って聞いていたヒロアキが口を開いた。

「で？祐也の事はどうすんだ？」

「うん。きちんと断ろうと思う。」

「そっか。」

少し神妙な面持ちでヒロアキが話を始めた。

「しーな、オレの話聞くか？」

「話？」

「祐也の事。晃君との事。どうする？」

「うん・・・」

「めぐちゃんが必要ないと思ったなら無理に聞かなくてもいいと思うよ。」

「うん。」

「しーなには聞き苦しい話だからな。」

少し考える。

「ヒロアキ、話してもらえる？」

「しーな・・・」

「私ね、もう逃げないって決めたんだ。しっかり向き合っていきたいから。祐也とも。だから話聞かせて。」

「えらいのねん。めぐちゃん。さてと、では話をしてもらいましょうか。ヒロアキさん。」

「わかった。」

「知っていること隠さず吐いちゃいなさいよ。」

「・・・。知らねーぞ、またオレ殴りかかられても。」

「いーわよ、ヒロアキなら。めぐちゃんのためなもの。」

「北川、ひでーよ。」

「いーから、話さないよ。」

「はいはい。」

「祐也が、二年の時かしーなのこと好きなのはほんと。」

話し始めたヒロアキをだまって見つめる千夏と。

「栗原と付き合うことになったのはけっこう単純で。告られてまんざらでもないし、何よりその当時しーなはもて過ぎていた。」

「へ？なにそれ？」

驚いた表情のに動じず話を進めるヒロアキ。

「テニス部の奴らと暴露会してさ、好きなやつを言ってたの。その時にしーなに票が集まった。その後すぐだったよ、祐也が栗原と付き合うつて言ったのは。」

「俺には信じられなかった。でも祐也は栗原を選んだ。実際二人はうまくいったし、それを知ったしーなはぼろぼろだったけど、そんなの祐也が気付くはずもないんだ。祐也はおまえの気持ちを知らなかったから。もし栗原より先にしーなが告っていたら、祐也と付き合ったのはしーなだったよ。そんな単純な話だったんだ。でも・

・・」

「祐也君は気付いてしまった。」

千夏がぼつりと言う。

「そう。栗原と付き合えば付き合うほどにしーなのが好きな自分に。祐也も悩んだと思う。二人の女が好きだなんて、あいつも根はまじめだから自分を許せなかったと思う。そんな時に、修学旅行でまた好きなやつの話しになってさ。そこでしーなが祐也のこと好きだっていう噂話が出たんだ。すごい表情だったよ。まさかと思っただろうな。で、それ以降、祐也はしーなの事を気にし始めた。栗原と付き合っていないがらしーなのことも追いかけていたな。でも、しーなに別の男の存在が現れた。」

「それが晃君？」

「いや、始めはくんだった。」

「ああ、あの時の噂ね。」

「そう。まあ、噂を信じた祐也も結局は真実を知るわけだけど。知った上でなおしーなこと気になったんだろうな。しーなが次に誰を見ているかを今度は自分で気付いた。晃君な。それで祐也はいよいよ栗原と別れることを選んだ。別れてまで本気だつて事を伝えたかったんだろうな。」

「なるほど。」

千夏も真剣な表情になっていた。

「祐也は最初オレを頼ってきたのだけど、オレは協力的じゃなかった。だから自分で晃君に話したんだと思う。写生大会の日のあれは、晃君はオレが祐也に情報を流してると思ったのだろうな。でもオレはしーなと晃君が付き合ってるだなんて言ったことはない。そっからは俺も知らない。勝手に祐也が暴走しているとしか考えられない。」

とまあそんな話だ。」

話し終わったヒロアキに千夏から拍手が送られる。

「あんたまともにしゃべれるんじゃない。」

「おいおい。」

「そもそも、オレがこんなことばらしていいものかどうか・・・」

「いーの。あんたはめぐちゃんの味方でしょー。だめよ、どう考えても今回は祐也君が悪い。男として最低よ。」

「しーな？だいじょぶか？」

「う、うん。平気。」

「ありがとう、ヒロアキ。色々話してくれて。ごめんね、一番近くにいたヒロアキの気持ちにさえ気付かないなんて。ヒロアキは大好きな友達よ。」

そついうと教室から出て行く。

残されたヒロアキと千夏。

「北川・・・、」

「なあに？」

「あいつ・・・いま・・・」

「うん。」

「オレの気持ち気付いたか？」

「だよ。めぐちゃん、強くなったね。」

「はあ。オレは失恋決定かー。」

「いいじゃないの、好きな人から大好きと言われたのだから。」

「友達としてね。まあ、いつか。オレはいつかこうなるとわかっていたし、あいつのためなら損な役でも仕方ないか。それでも好きなオレって可哀想。」

「けなげでいいと思うよん。あたしは好きよ、ヒロアキのそういうところ。」

「おまえに好かれても嬉しくない。」

「あつそ。」

「でも偉いぞつ。男が上がったよん。」

「さーて、どうなることやら。」

もう逃げていてはだめだね。

ちなちゃん、ヒロアキ、芳沢くん、祐也、あきちゃん・・・

皆それぞれの想いがある。

それぞれのかたちがある。

だから、私も表さないと。

言葉にのせて。

祐也に手紙を書こう。

去年、ちゃんと失恋しなかった、ちゃんと話しておかなかった、

だから話せてよかった。
そう思えるように。

卒業まであと三ヶ月。

そのうちの一日はなんだか大事な一日のように感じてしまっただろうな。

あきちゃんのいない学校生活。

高校へ進学したら別々の生活になる。

わかっているようで、わかっていない。

決まっている別々の進路。

でも今はあきちゃんのいない学校生活のイメージをもつことが難しい。

うつん、あきちゃんだけではない。

けいちゃん、にの、タケちゃん、ちなつちゃん、ヒロアキ、祐也・

・
皆別々の学校生活を送ることになるのだな。

卒業か・・・

やがて来るその日までに、

私はどんな答えを出すのだろう。

8・卒業く旅立ちの歌く

新年

一月二日。

高校受験に合格しますように。

あきちゃんとうつと一緒にいられますように。

「おまえ何願ったの？」

「な、内緒だよ。」

「ふーん。」

新年明けて初詣。

今日はあきちゃんと初詣に来ています。

「もえつ、お好み焼き食う？たこ焼きがいい？」

「にの、並んでこよーぜ。」

「俺はじゃがバタにしよう。」

「ボクも行くー。」

初詣は当然ながらあきちゃんと二人・・・

ではなく、にのにタケちゃん、関くん、北山くん、健太くん、にいつちゃんとお馴染みのメンバーです。

まあ、こうして皆で来れるだけでも良かった事なのだけだね。

長い冬休み、受験生に正月はなく、大晦日まで塾の冬期講習。

そして新年三日からは再び模試試験が控えているスケジュールの中で、あきちゃんに会える確立はまさに低かった。

でも、皆が誘ってくれた。

あきちゃんに会える。

これほど嬉しいことはなかった。

「あきちゃんは？」

「ん？」

「何お願いしたの？」

「受験合格だろ。」

「そ、そっだよね。そっかあ。」

思わず苦笑いをしてしまった。

高校受験合格、受験生なら誰もが願うだろう。

でも、私は素直に願えない。

なぜならあきちゃんは合格したら・・・

東京へ行ってしまう。

別々の進路。

別々の生活。

嫌な子だよね、私。

「暗い顔してる。」

「えっ？」

「どうした？」

「なんでもないよ。」

あきちゃんは、どう思っているのだろう。

私はあきちゃんの進路を知ってから、考えているようで考えていなかった。

よくわからなかったのだと思う。

あきちゃんがいなくなるということが。

あきちゃんのいない学校生活が。

でも、冬休みに入って、学校へ行かない日々。
塾へ行って、家に帰って、食事をして、お風呂に入って、寝る。
そしてまた朝が来る。

あきちゃんに会わない生活。
急に不安になったよ。
寂しくなったよ。

でも・・・

冬休みは期間限定だから。

休みが明ければまた学校で会える。
だから・・・

やっぱり実感は持ちにくいよ。

あと二ヶ月したら卒業。
あと二ヶ月しか一緒にいられないなんて
そう。

私の二つ目の願いは・・・

「どうした？」

「あ、寒いからね、下向いていただけだよ。」

気持ちを知られなくて誤魔化した。

「冷たいな。」

私の手に触れたあきちゃんが言った。

お参りするため、手袋を外したままだった。

そしてそのまま、

あきちゃんが手をつないで歩いてくれた。

細長い指、きれいな手。

温かい、あきちゃんの手。

嬉しいな。

ここまで温まる。

ふと見るあきちゃんの横顔。

あ。

髪伸びたね。

背もまた伸びたかな。

冬休み、会えなかっただけでも変わるのだね。
あきちゃん。

「が、願書とかもう出すの？」

「ああ、今週な。」

「東京まで？」

「まさか。郵送。」

「そ、そっか。」

東京。

その言葉を口にするのが怖かった。

でも、受け入れなければならぬ現実。

今は隣にいるあきちゃん。

手をつないでいるあきちゃん。

手を伸ばせば触れられる距離にいる。

「おまえは丁校にしたのか？」

「うん。」

「試験日いつ？」

「27日。」

「早いんだな。」

「あきちゃんは・・・」

「ん？」

「じ、地元の高校は受けないの？」

「ああ、滑り止めで一校だけ。」

「そっかあ。」

「まあ、こつちじゃ出来ないことだからな。」

「あきちゃんのする勉強って？」

「映像。映画関係の仕事に就きたいんだよ。だからその学校に。」

「ひ、一人暮らしするの？」

「いや。親戚の家があるから下宿させてもらう。」

「そうなんだ・・・」

「受ければの話だけだな。」

「受かるよ！あきちゃんなら大丈夫だよ。」

それきり、あきちゃんは何も言わなかった。

あきちゃんが自分の事話してくれるのは嬉しい。

あきちゃんのやりたい事、将来の事。

すごいな、自分の事をしっかり考えている人。

私は？

とりあえず地元の高校に進学して、その先は・・・
何も考えていない。

ずっとつないでいることは出来なかった手。
当たり前のことなのだけど。

つないでしまったから放す時が来る。

知ってしまったから終る時が来る。

出会ってしまったから・・・離れる時が来る。

じゃあ、出会わなければ良かったの？

知らなければよかったの？

手をつながなければよかったの？

答えはもう出ているよね。

そう。

わかっている。

それは物でもない、形でもない、大切な思いだから。

2

新学期が始まった。

久しぶりの学校、久しぶりの友人。

でも、模擬試験が待っていた。

新学期早々、午後は国・数・英の三科目の試験が行われた。

「きつつう」

「はあ。終わったね。」

「何か食べて帰りたいね。」

「そんなわけにもいかないっしょ。」

「明日、理・社が残ってるものね。」

「はあ、嫌だ嫌だ。」

「あれ？めくは？」

「職員室行ったよ。」

「用事あるから先に帰っててって言ってたよ。」

「あら、そう。」

「せっかく想い人が来ているのにね。」

そう言って廊下にいる晃を見る恵子。

「よう、穂高。」

「あんた東京の高校行くんだったね。」

「・・・・・・」

「めぐから聞いたよ。」

「・・・・・・」

「まあ、私ができる程偉い立場でもないけどさ、めぐの事あんまり泣かさないでよ。」

「あいつ泣いたのか？」

それまで何も言わなかった晃が口を開いた。

「ううん。最近はないよ。」

「あいつよく泣くのか？」

「さあね。普通の女の子だからね。」

「その普通感覚がいまいちわかんねー。」

「ははは。穂高、あんた変わったね。うん、なんかいい感じになったよ。男らしくなった。」

「は？」

「いやいや。気にしないで。何でもないから。ふふふ。」

「そうだ、穂高、一つ良い事を教えよう。めぐはね、名前で呼ばれると嬉しいんだぞ。名前で。」

それだけ。じゃあね。」

楽しそうに立ち去る恵子。

「失礼しました。」

担任との話が終わり職員室を後にする。

と、偶然、祐也とバッタリ会ってしまった。

「萌ちゃん。」

い、い、い・・・

ど、どうしよう。

気まずい。

「明けましておめでとう。」

「お、おめでとう。」

「今年もよろしくな。」

「こ、こちらこそよろしくお願いします。」

そんな新年の挨拶をしてしまった。

とりあえず教室まで一緒に歩くことになって。

き、緊張するけど。

ちゃんと話さなきゃね。

逃げずに。

「萌ちゃんはT校？」

「う、うん。」

「ゆ、祐也は？」

「俺はH校の推薦。」

「推薦？」

「そう。受けてみないかって担任に言われた。」

「そっか、そうだね。祐也生徒会やっていたし、部長もやったし、学級委員も。そっかあ、推薦かあ。わあー、すごいねー。」

祐也らしいなと思い、納得して話していると、緊張もあってか饒

舌になっていた。

そんな萌の表情を、祐也は黙って見つめている。

「あ、ごめんね、私一人で喋って・・・」

祐也の視線に気づき、自分の置かれている状況を悟った。

「今日の試験は出来た？」

「う、どうか・・・」

「萌ちゃんなら大丈夫だね。」

「そんなことないよ。」

「そうだよ。だってまた綺麗になったから。」

「えっ？」

「うそうそ。ごめんね。困らせた？」

「う、ううん。大丈夫。」

内心、驚いて言葉にならなかったよ。

綺麗になっただなんて、何を見て言ったのだろっ、この人は。

「そだ。手紙、ありがとうね。」

「あ、ううん。」

「返事、書こうと思ったのだけど、冬休み入っちゃったしね。」

「へ、平気だよ。」

「ま、受験もあるしさ。高校もお互い別々だけど、ちゃんとはずっ
と一緒にいられたらと思うっているよ。友達としてでもね。」

「う、うん。」

「明日も試験頑張ろうな。」

「うん。」

「じゃあ。」

「うん。あ、祐也。」

「ん？」

「あ、ありがとう。」

自然と言葉が出た。

祐也も笑顔で応えてくれた。

先月、祐也に充てた手紙。

私の気持ちを正直に書いた。

返事をもらえるだなんて全く思っていなかった。

こうしてまた話してもらえるだなんて。

私は幸せ者だね。

一つの恋が終わったけれど、祐也からはたくさんのことを学んだ。
人を想う気持ち、人に優しくする気持ち。

思うようにはいかないのが人の気持ち。

大切なもの。

そしてそれを誰かに伝えたくて、誰かを想いたくて、優しくして
あげたくて。

そんな温かい気持ちを教えてくれたのが・・・

「あきちゃん。」

祐也と別れ教室へ戻ると晃がいた。

「まだ帰らなかったの？」

「ああ。」

「あ、タケヤン待っているの？」

「ああ。」

あれ？

なんだか硬い表情をしているな。

「あきちゃん、疲れているの？　なんだか顔が・・・」

そう言つと晃の手が髪に触れた。

髪の毛の先まで緊張が走る。

「痛っ！」

「あきちゃん、ひっぱらないでよ。痛いよ。」

触っていたかのような手があったが急に髪のを引つ張った。

「おまえは嬉しそうな顔してるな。」

「そう？」

「なんか良い事でもあったか？」

「ないよ。」

教室に戻ってきたらあきちゃんがいたから嬉しくて。とはさすがに恥ずかしくて言えない。

「楽しかったのか？」

「なにが？」

「話して。」

「だれと？」

「祐也と。」

えっ。

見ていたの？

「み、見てたの？」

「見えたの。渡り廊下。」
「あ、そっか。」

教室の窓から、渡り廊下は丸見えだった。

あきちゃん、
もしかして、私が祐也と話して嬉しそうな顔していたと思ったの？
まさかね。
そんな嬉しい勘違いはないよね。

「大丈夫なのか？」
「あ、うん。もう大丈夫だよ。ありがと。」

心配はしてくれているのかな。
そう思ってもいい？
なんだか嬉しくなってきたしまい、ついつい顔がにやけてしまう。

「なんで笑ってる？」
「え？」
「笑ってる。」
「あきちゃんと話しているからだよ。」

今度は素直に言ってみた。
特別に反応はない。
それがあきちゃんなのだけだね。

「晁、お待たせ。」

竹田が戻ってきた。

「お、椎名、いたのか。おまえも帰るか？」

「うん。」

「じゃあ行くか。」

「あれ？あきちゃんは？」

「俺んち。」

「え？タケヤンちに行くの？」

「そう。」

「べ、勉強？」

「まさか。ゲームだよ。」

「うっそお。明日も試験・・・」

思わず二人の顔を交互に見てしまった。

あきちゃんがタケヤンの家に行くということは、近所に住む私にとっては一緒に帰れるので嬉しい。

こういう時間もいいなと思うのだ。

ただ、後ろから付いて歩いているだけでもね。

二人は並んでゲームの話をしている。

結局私が会話に入れることはなく、タケヤンの家に着いてしまった。

「じゃあ・・・」

挨拶をしようとしたのだが二人が気づくはずもなく。
ばいばい位言わせてくれてもいいのにな。

下を向いていると思いがけない言葉をかけてくれた晃。

「帰るのか？」

慌てて顔を上げる。竹田と目が合った。
なぜが笑っている竹田。

「寄ってけば。」

「い、いいの？」

「どーぞ。」

既に自分の家に帰ったかのように玄関に上がっている晃。
突然の事だが、一緒に居れる時間が増えた事に感謝したい。

「おじゃまします。」

男の子の家だなんて緊張してしまう。

あ、でもタケやんの家は小学生の頃一度来たことがあったな。

鞆を置くと早速ゲームに向かう二人。

何だかわからぬままとりあえず私も画面を見続けた。

「よっしゃっ！」

「おいおい、今のはなしだろ」

「強えーよ。」

どうやら二人は対戦物のゲームをやっているらしいが、私にはどちらが強いとかどちらが勝っているのかさえもわからなかった。

でも、

あきちゃんのゲームに向かう真剣な表情、タケやんに勝って嬉しそうな表情、押されていて困った表情、負けそうになって悔しそうな表情、ここにいるだけであきちゃんの喜怒哀楽が見られる。

こんなにもくるくる変わるあきちゃんの表情を眺めていられるだ

けで幸せな気分になる。

男友達にしか見せないあきちゃん表情をこんなにも真時下に感じる事が出来るなんて。

今までは考えられなかったこと。

あきちゃんと出会って、もうすぐ一年か。

といってもあきちゃん存在を知ってからなのだけだね。

あきちゃんを好きになってからは半年位かな。

長いようで短い期間。

不思議だね。

あきちゃんを知る機会がなければ、このまま話すことも、こうして一緒に過ごすこともなく過ぎていった時間。

ただ、同じ学校に通うだけの同級生として。

そしたら私は別の人を好きになっていたのかな。

別の恋をして、別の学校生活を送っていたのかな。

ううん。

私には、あきちゃんのいる学校生活が良い。

あきちゃんと過ごす時間が良い。

付き合うとか、恋愛とかまだよくわからないけれど、今はこうして一緒に過ごしていられることが幸せに感じている。

卒業までの期間をどう過ごすか、ずっと悩んでいた。

もう一度気持ちをぶつけて、私の気持ちをわかってもらって、あきちゃんの気持ちを確かめることもできるかもしれない。

つきあって、一緒に帰ったり休日はデートをしたりするのも憧れる。

でもね、

でも・・・

これ以上あきちゃんに気持ちをぶつけて何になるのかな。

自分の気持ちを押し付けただけで、相手の事を考えていない。そんな女の子にはなりたくない。

付き合うことがゴールでもない。

デートで悩ませたいわけでもない。

だから私は・・・

こうしてあきちゃんのそばにすることを選ぶ。

私はあきちゃんの事が好きで、それをあきちゃんにも伝えて。

それであきちゃんと一緒にいられる。

卒業して、離れることが決まっても、それでも今を大切にしていって、この想いを大切にしていく。

それで良いじゃない。

離れることになるのは悲しいけれど、涙がでそうになる位淋しいけれど。

でも、私が泣くとあきちゃんの表情が変わるの。

困ったような顔をするの。

だから泣かないよ。

あきちゃんの優しい顔が好きだから。

あきちゃんの笑った顔が好きだから。

“ピンポーン”

「誰だよ、いいとこなのに・・・」

ゲームを止め、訪問者の対応をする竹田。

部屋に残された二人。

「楽しいか？」

「えっ？」

「楽しそうな顔してる。」

「そう？」

じつと顔を見つめてくる晃。

そんなまっすぐ見つめられると緊張で息が止まりそうだよ。
苦しくなつて視線を外してしまう。

「あ、あきちゃんはよく来るの？タケやんち。」

「たまにな。」

「そうなんだ。」

ほんとだね、あきちゃんに「帰るのか」って聞かれたの、嬉しかったんだ。

まだ一緒にいてもいいと言ってくれているような気がしてね。

「タケんちが一番広いからな。」

「あきちゃんのお部屋は？」

「六畳。」

「一人部屋？」

「一応な。」

「ふーん。」

「でも部屋にゲームはないぞ。」

「そうなんだ。」

「見に来るか？」

「えっ？」

「うそ。」

「あきちゃんちに？」

「うそだよ。」

「行っていいの？」

「うそだって。」

「えーいついつ？」

「うそ。」

「おじゃましま ひゃあああー @ @」

「だから嘘だって言ってるんだろ。」

「きゃーやめてってば、くすぐりたいー」

「おまえが素直に話を聞かないからだろ。」

そう言って首をくすぐってくるあきちゃんの顔は、今までで見たことのない位笑っていた。

顔をくしゃくしゃにして、無邪気な笑顔だった。

「だってあきちゃん嘘って言って前も騙されたもん。もう騙されないよ」だ

えっ？

あ、あれれ？

う、うそおおおおお。

首をくすぐっていた晃の手が・・・

片方肩に、片方頭に・・・

まるで後ろから抱きしめられているかのように。

こ、これは夢？

これは夢？

これは夢？

「やっぱおまえ小さいな。」

そういうと、おでこにあきちゃんの口がそっと触れた。

ゆ、夢じゃないっ。

えっ、

ちょ、

ええー！！

ど、ど、どしたらいいの？！

あ、頭が。

か、体が。

固まる・・・

う、動けない。

た、タケやーん。

階段を上ってくる足音が聞こえてきた。

ほっとしたのはなぜだろうか。

「飲むか？」

「おっ、サンキュー。」

コーラとウーロン茶が運ばれてきた。

「ほれ、椎名は炭酸飲めねーもんな。」

「あ、ありがと。」

竹田から受け取った飲み物で、緊張で乾いた喉を潤した。

晃は一体どんな様子なのかと思い、ちらつと視線を向けた。すると、とんでもない言葉が返ってきた。

「顔赤いぞ。」

「！！！」

なっつ！

言葉にならなかった。

何を言うのかと思ったらこの人は。

「熱あんのか？」

そう言うとの額に手を当てる晃。

「なっ！」

「ないよ。」

そう言うので精一杯だった。

こいつは一体何を考えているのだ。

あんたのせいで顔が赤くなっているというのに。さらに赤くなるようなことしないでよーっ。

しかも、タケヤンが見てるのに。

何てことを。

「だいじょうぶだよ。げ、ゲームの続きやって。ねっ？」

「あ、私はそろそろ帰ろうかな。明日試験だし。」

必死に火照った顔を隠そうとその場を繕おった。

不自然な態度に、竹田は首を傾げていた。

あ・・・

バレバレかな、こりゃ。

「今更試験勉強してもなあ。」

そう言う竹田の意味深な様子には全く気づいていない様子の晃は、さっさとゲームに向かっていた。

「ははは。じゃーね。」

もう笑って誤魔化すしかなかった。
今度は帰ると言っても晃は何も言わずにゲームに夢中になっていた。

竹田にだけ手を振り、玄関を後にした。

竹田の家を出ると大きく息を吐いた。

はあ。

な、なんだったのだろうか。

あきちゃん、あんな事しておいて、
ドキドキしたのは私だけ?!

恥ずかしくて、まともにタケやんの顔が見れなかったよ。
気づいただろうな、タケちゃん。

それに比べてあきちゃんは・・・

普通に普通に、見事な位いつも通りに戻っていたな。

お、男の子ってよくわかんない。

思い出しただけで恥ずかしくなるよ。

でも・・・

今思い出すとすごい事だったのだな。

あきちゃんに・・・

触れられて。

実感というか、嬉しさとかそんなの感じている余裕がなかったよ。
突然でびっくりして・・・

けれど・・・

少しだけ残っているあきちゃんの温もり。

あきちゃんの大きな手。

いつもよりずっと近くで聞こえた声。

今日の事は忘れないよ・・・

先週行われた模試の結果が発表された。

上位三十名の名前が掲示板に張り出された。

「ひゃー一位496点だつて。一体どんな頭してんのよ。」

「すごいね、松岡くん。」

「五教科のうち、何科目かは満点取ってるってことでしょ？ありえないよ。」

一緒に掲示板を見に来た恵子が叫んでいる。

この一年間、首位をキープし続けた松岡くんは、最後の模試でも一位を獲った。

その後を見ていく。

「なんだかんだめぐも十位だし。」

「あ、でもあきちゃん七位だ。」

「あ？ほんとだー。穂高みたいな奴がなんで頭いいんだろうね。」

「けいちゃん、それは・・・」

ほんと。

あきちゃんいつ勉強してるのだろう。

この前もゲームしてたのに。

あ、

思い出しちゃった。

この前の事・・・

「ていうか、やっぱ松岡は人間じゃないんだよ。きつと。うん。そう思えば納得がいく。」

「誰が人間じゃないって？」

「げっ、松岡！」

恵子の後ろに現れたのは松岡だった。

「いやさ、松岡君はすごいな。頭も良いし、優しいし、お素晴らしいわ。ってねっ、めぐっ。」

「えっ、私？」

「そう、そう言ってたのよね、めぐっ。」

「う、うん。」

恵子の勢いに押されて話を合わせることにした。

「なるほどね。椎名さんはどこ受けるの？」

「T校です。」

「そっか。僕はM校だから最寄り駅が一緒だね。高校生になっても駅とかで会えるかな。」

「あ、そっか、一緒の駅だ。私が受ければの話だけど。」

「大丈夫だよ、椎名さんなら。」

「はいはい、どうせ私は電車に乗らないI校ですよーだ。」

「斉藤さん、ずいぶんと僕と椎名さんとで態度が違うのは気のせいかな？」

「あたしはあんたの誰にでも優しいその性格が苦手なだけよ。じゃあね。」

そう言つと先に教室へ戻ってしまう恵子。
残されたはなんとか笑顔を作り、

「ま、松岡くん、ごめんね。」

「なんで椎名さんが謝るの？」

「けいちゃん、悪気があってあんな事言う子じゃ・・・」

「知ってるよ。」

「え？」

「あの時ね、斉藤さんの事はよくわかったから。」

「？」

不思議そうな顔をしていると松岡は微笑んで話してくれた。

「前に椎名さんに変な噂が立った時、彼女身を張って椎名さんのこと守ろうとしていた。皆の前で堂々とね。ああ、女の子って強いんだな。って思った。守ってあげるだけじゃダメだったと斉藤さんから教えられたよ。」

「松岡くん、それって・・・もしかして、けいちゃんのこと・・・」

そこまで言いかけると松岡くんの表情が変わった。

さらに穏やかな表情で笑っていた。

それ以上は言っては駄目だよ。

まるでそう言っているかのように。

恋をして

人を好きになる気持ちを知って

誰かを想って

その想いが大切に

そんな想いは誰もが持っているものだとなった。

だから・・・

もしかしたら松岡くんが持っているものが見えたのかもしれない。自分にはないものを持つ人に魅かれる。

成績優秀で運動能力にも優れ、性格も穏やか。

そんな完璧な人に見えた松岡くんも、同じ想いを持っていたのか
もしれない。

人を想う気持ち。

それは大切なものだから。

大事にしていきたいね。

昼休み。

なんだかボーっとしていたくて、皆と離れて教室にいた。

「おい。」

「おいっ。」

「おい、そのの。」

呼ばれているのに気がついて廊下を見ると晃がいた。

「わたし？」

「おまえしかいないだろ。」

周りを見渡すと確かに教室に一人だった。

「だって、誰呼んでいるのかわからなかったよ。」

「めぐみ。」

「えっ？」

「だろ。」

「ええっ？」

思わず聞き返してしまった。

あきちゃんが、私を名前で呼んでいる？！

最近の私は驚いてばかりだな。

驚かせている当の本人は何も感じてはいないのだろうけれど、
相変わらず無表情な晃を横目に見る。

教室に入ってきて、前に座ると、

「顔赤いぞ。」

そう言っ て額に手を当てた。

うつ・・・

うそ。

こ、これは・・・

この間の事を思い出しちゃうよ。

「熱いな。」

「だ、大丈夫だよ。なんでもないよ。」

「いいから保健室行けよ。」

「平気だよ。」

「行けよ。」

あまりにも晃の顔と声が真剣だったので、この場は逆らえなかった。

「わ、わかった。後で行く。」

返事を聞くと晃は行ってしまった。

あれ？

あきちゃん何しに来たのだろう。

何か用事があったのかな？

タケヤン？

誰もいないの見ればわかるのにね。

五時間目は家庭科だった。

次の調理実習に向けて、班毎にメニューを考えていた。

「めぐはあげるの？」

「え？」

「穂高に。」

「え、何を？」

「チョコよチョコ。来月バレンタインデーでしょ。」

「あ。そういえば。」

「あんたまさか忘れてたの？」

「もうそんな時期なのか。早いね。」

「けいちゃんは？あげる人いるの？」

「いるわよ。義理も本命もね。」

楽しそうな笑みを浮かべている恵子。

バレンタインデーか。

そういえば今まで本命チョコあげたことないな。

なんだかんだ毎年義理チョコもあげたことないな。

ホワイトデーのお返しとかもなんだか悪いような気がしてね。

今年は作ってみようかな。

中学最後だし、にのやヒロアキ、タケヤンにもお世話になってい
るしね。

つつい、お菓子の本を開いてしまっ。

パラパラめくっていると、

「じゃあ、うちの班はチョコで決まりね。」

満足そうに恵子が言った。

班の女子は誰も反対しなかった。

バレンタインか。

あきちゃんに・・・あげてもいいのかな。

迷惑じゃないかな？

前に、あきちゃんの誕生日にクッキーを焼いた。

あの時はもらってくれたね。

渡してみようかな。

授業が終わって教室へ戻る途中、保健室の前を通った。

そつえばあきちゃんに行けと言われていたのを思い出す。

「めぐちゃん、どうかした？」

「あ、先に行って。ちよっと寄ってく。」

「わかった。」

友達と別行動をとり、保健室のドアを開けた。

「あら、珍しいわね。どうしたの？」

「ちよっと、熱測らせてください。」

「どうぞ、そこ座ってね。」

「はい。」

健康がとりえな私はここ何年も保健室にお世話になることはなかった。

もうすぐ卒業するのにな。

保健室を使ったことがないなんて。

やがて検温が終わったことを知らせる音が鳴った。

「37度7分。」

「よく今まで授業してたわね。違和感なかったの？」

「うーん、そういえばお昼休みは少しだるかったです。」

「どうする？今すぐ帰ってもいい状態よ。早退で良いかしら？」

「いえ。ここまで来たらあと1時限ですから大丈夫です。」

「受験生なのだから無理せず帰ったら？」

心配そうに見つめる保健師に、なんだか温かみを感じた。

「受験生だから・・・」

「え？」

「もうすぐ卒業だから、もう少し学校にいたいです。」

そう答えると、保健師は笑った。

「そう。じゃあ、あなたに任せるわ。でも気分悪くなったらすぐに言うのよ。」

「はい。ありがとうございました。」

保健室を後にすると、先まで熱かった体がなんだか軽くなった気がした。

もしかして早退できるのは嬉しいことなのかもしれない。

でも、今の私は例え一時間でも早く帰りたくはなかったのだ。卒業までの時間を、皆と過ごす時間を、あきちゃんのいるこの時間を、少しでも失いたくはなかったから。

廊下までやってくると四組の前に晃がいた。
続いて五組から恵子が出てきた。

「何度？」

「さ、37度・・・」

会つてすぐさま晃に聞かれ、下を向きながら答えた。

「37度？」

「なに？めぐ熱あつたの？」

「7ぶ。」

「7度7分か。」

「なになに？穂高あんた知つてたの？」

「見ればわかるだろ。」

「は？わかんないわよ。めぐ大丈夫なの？」

「うん、もう平気。」

「もうつてあんた早退する？」

「しないよ。大丈夫だから。」

「そうなの？」

「うん、次英語だよ。準備しなきゃ。」

「あ、待ってめぐ。」

後を追つて教室に戻る恵子。
二人の後姿を見つめる晃。

「なんだ、しーな熱あんのか？」

様子を見ていたヒロアキが話しかけた。

「晃君知ってた？」

「ああ。」

「ふーん。」

「あいつでも風邪ひくんだな。」

「そだな。でもしーなっていつも肝心な事言わないんだよな。本当は平気じゃないのに無理してたりさ。」

「おまえには言うだろ？」

晃が不思議そうな顔をしてヒロアキに言う。

「へ？しーなはオレには言わないよ。」

「そうなのか？」

「おう。」

「ヒロアキには何でも話すのかと思った。」

「そんなことないぞ。」

「泣くのは？」

「え？」

「あいつおまえの前で泣くのか？」

「おお、よく泣いてたな、昔は。最近は強くなったけどな。」

「強くなった？」

「そつ。誰かさんのお陰でね。おっと、チャイム鳴った。授業授業つと。」

教室へ戻るヒロアキ。

難しそうな顔をしている晃だった。

翌朝。

「おはよう。」

四組に入ると晁、ヒロアキ、千夏が来ていた。

「めぐちゃんおはよん。」

「おーっす。」

「体調は？大丈夫？」

「もうすっかり。」

笑顔でピースをして見せた。

鞆を持ったままで晁の席へ駆け寄る。

「あきちゃん、おはよう。」

「下がったのか。」

「うん。もう元気だよ。」

「タフだな。」

「昨日はありがとう。」

「休むかと思った。」

「え？」

「今日。」

そう言つと、読んでいた小説を閉じて萌を見つめてくる。

あきちゃんの目。

あきちゃんと目が合う。

あきちゃんが私を見てくれている。

「休まなくて残念？」

「べつに。」

「あ、もしかして私いない方がうるさくなくて良かったって思っ

る？」

「べつに。」

「あ、図星なんだ。」

「うるさいぞ。」

「どうせ私はうるさいですよ」

「やめて。」

ひゃあああー @ @ @きや

からかわれるのは嫌な晃は、反撃をしてきた。

「ずるいよあきちゃん、首はくすぐったいつて。」

「もぉ。あきちゃん、やめてよ。あきちゃんてばー。」

続く晃の攻撃にくすぐったいけれど自然と笑顔になる。

二人を見ていたヒロアキと千夏が言う。

「めぐちゃん良かったね。」

「ああ・・・そうだな。」

「ヒロアキったら強がっちゃってえ。」

「悪かったな。」

「ふふふ。」

「あのさ、北川。」

「なによん？」

「オレ昨日晃君と話してさ。」

「うんうん。」

「しーなが好きになった男が晃君でよかったと思った。」

「あらあら。何があったのかしら？」

「まあいろいろとなつ。」

「ふーん。でも、良かったね。偉いぞ。そんな風に言えるなんてヒロアキもいい恋愛したのねん。」

「おまえに誉められても嬉かないがな。」

「まあ、素直じゃないんだから。」

そう言うと思いつきヒロアキの肩を叩いた。

「い、痛つて。」

「ヒロアキとは高校でも仲良くできそうねん。」

「マジかよ。オレだけこいつと一緒にの高校かよ。」

「嬉しいと言いなさい。嬉しいと。」

「はいはい。」

4

そしてやってきたバレンタインデー当日。
つ、ついにやってきた。

今週調理実習で作ったチョコレートマフィン。
昨日家で作ったトリュフチョコレート。

さて、どうやって渡そう。

朝？

休み時間？

放課後？

み、皆のいる前で渡すのかなあ。

緊張してきた。

とりあえず、四組の前に差し掛かると、教室の扉は閉まったままだった。

そのまま通過することにした。

まずは五組。自分の教室から入ることにした。

「おはよん、めぐちゃん。」

「お、おはよう。」

「おっす。」

「椎名さんおはよう。」

千夏、ヒロアキ、芳沢くんが来ていた。

いつもより一つ多い鞆を持っているだけでなんだか恥ずかしくな
ってしまった。

「はい、めぐちゃん。」

「え？」

「バレンタインチョコ。」

「え？私に？」

「そうだよん。」

「ちなつちゃん、ありがとう。」

「大好きなめぐちゃんにあげるのは当然ねん。」

「おまえらアホか。」

そう言っているヒロアキも同じものを持っていた。

千夏からもらったのだろう。

「今日はバレンタインデーだね。女の子は楽しそうでいいね。」

芳沢くんが微笑みながら言った。

「は、はい。」

「え？」

「よ、良かったら食べてください。」

「自分に？」

「う、うん。はい、ヒロアキ。」

芳沢さんとヒロアキへチョコマフィンの入った包みを渡す。

「おつ、しーながくれるだんて初だな。大丈夫か？これ食えんのか？」

「し、失礼ね。大丈夫よ。た、たぶん・・・」

「多分ってしーな十分怪しいぞ。」

千夏のお陰で渡すきっかけが出来、二人にはすんなり渡すことができたのだった。

「うわー、椎名さんからもらえるだなんて嬉しいな。」

「あの、そんな大した物じゃないし、ほんと少しだから気にしないでね。」

「いやいや、ありがとう。嬉しいよ。」

素直に喜びを表現する芳沢。

「あ、食える。」

既に袋から出して食べているヒロアキ。

「しーなちゃん、俺の分は？」

そこへ北山と関が登校してきた。

「あ、おはよう。」

「おはよう。」

「よっちゃんもらったんだ。いいな。」

「す、少しだけど食べる?」

北山と関に勧めてみる。

「マジで? いいの? やった!」

チョコマフィンに手を伸ばす二人。

「しーなちゃん、あきちゃんの分もあるの?」

「えっ?」

「当たり前だよー。いつ渡すの? 俺呼んできてやろつか?」

「えっと・・・」

「いーね、ラブラブで。」

「北山君、言い過ぎだよ。めぐちゃん困ってるでシヨ。」

千夏が北山を睨む。

「まあまあ。それ位うまくいっててもらわないとね。俺が諦めた意味がないじゃん。」

「え?」

「それ、何のこと?」

「ああ、夏にさーおれ、ほっへへははひ」

「あ? 何言ってるかわかんないわよ。」

千夏の鋭い言葉が入る。

「ほら、キタ、食べるか喋るかどっちかにして。北川さんも落ち着いてね。」

二人の雰囲気を見かねた芳沢が間に入る。

食べ終えた北山が話し始める。

「あーうまかった。しーなちゃんサンキュー。」

無言のまま鋭い視線を送っている千夏に気づくと慌てて話を始めた。

「あ、夏の話ね。あれね、俺さ、しーなちゃんの事いいなって思ってたんだよね。でも夏の終わりにあきちゃんから言われてさ。つつい話にのっちまったってわけ。」

「なによ、その話って。」

「しーなちゃんの事はやめとけて。諦めたらゲームの攻略本くれるって言うしさ。俺だってしーなちゃんが誰を好きかは薄々気づいていたし、まあ、いっかなって。」

「よくないわよ。あんたさっきから聞いてればなにがゲームの攻略本よ！交換？！めぐちゃんは物じゃないわよつ。」

「北川、落ち着けて。」

暴れだす千夏を止めるヒロアキ。

「まあ、それだけじゃないさ。俺が諦める代わりに、あきちゃんにはちゃんとしーなちゃんと付き合うようにって約束させたしね。」

「なっ！！」

「あーあ、しゃべっちゃった。あきちゃんに怒られるな、こりゃ。ま。いつか。それはそれでおもしろそう。」

「あんたなに一人で楽しんでるのよ。」

「おっと。邪魔者はそろそろ退散しようかな。しーなちゃん、上手かったよ。ありがとーじゃーな。」

「あーム力ツク！何なのよ。」

「北川もついいだろ。」

「だいたい何でゲームの攻略本なのよ。」

「行き詰った時は喉から手が出るほど欲しくなる物だな。」

いつの間にか登校してきた竹田が言った。

「だな。」

関くんまで共感していた。

「もう。これだからゲームオタクは嫌いよっ。」

千夏はぶんぶんに怒っているのがわかる。

そしてなだめようとしているヒロアキ。

この状況でもどうにか穏便にと微笑んでいる芳沢。

ゲームの話を続けている竹田と関。

バレンタインデーの朝のはじまりはなんだかすごかったけれど、
でもこういうのも良いなっと思う。

皆と過ごす時間。

笑ったり、時には怒ったりもする。

こうして皆が集まってくるこの空間は好き。

卒業したら皆バラバラになってしまうけれど、今は皆で楽しく過
ごす時間が嬉しいね。

そして、昼休みになってしまった。

朝のうちに皆には無事渡すことが出来ただけれど。

本命の・・・

あきちゃんにはまだ渡せていない。

タイミングがわからない。

「なにめぐ、まだ渡せてないの？」

「呼んできてやろうか？」

自分の席から動こうとしないのところへ恵子と竹田、関がやってきた。

「いい。自分でがんばるもん。」

「後になればなるほど。」

「渡し辛くなっていくよお。」

「他の子からもらってたりして。」

「もおーだいじょぶだってばー。」

萌の反応に三人とも笑いをこらえている。

「だはははは。」

一人、噴出してしまったのは関だった。

「椎名さんってほんとわかりやすいよね。」

「そんなことないもん。」

「冗談なしで、早めに渡した方がいいよ？楽になれるし。」

「そうだな。もう遅いかもしれないけどな。」

恵子と竹田も身を乗り出してきた。

「タケやんのいじわる。」

まだ笑っている関。

「ほ、ほんとに・・・誰かからもらったりしてるのかな？あきちゃん、もらったこととかあるのかな？」

不安そうな表情へと変わっていく。

「あ、俺聞いたことある。」

「えっ？」

「誰？」

三人の視線が関に集まる。

「一年の時、もらってたな。クラスの女子に。」

「へえ。穂高が。」

「やるな。」

「そ、そうなんだ。あきちゃんもらったことあるんだ。」

「穂高には関係のないイベントだと思ってたよ。」

「けいちゃん。」

「あ、ゴメン。言い過ぎた？」

「ま、渡せるといいな。」

「今日中にだけだな。」

「タケやんのいじわる。」

「おっ、噂をすればご本人登場ー！」

「えっ？」

振り返ると廊下から晃が顔を覗かせていた。

「タケ、辞書貸して。」

「おうっ。」

「サンキュー。」

「ほら、めぐ！」

隣の恵子が腕をつつく。

む、無理だよ。

さっきまで皆であきちゃんの話してたのに。
ど、どうしろっていうのよ。

顔を合わせる事が出来ずに下を向いてしまう。

あきちゃんがどんな顔をしているのかはわからなかった。

ただ、皆の楽しそうな視線が注がれていることだけは確かだった。
あきちゃんが変に思うじゃない・・・

そのままあきちゃんを見ることなく、休み時間は終わった。

そしてとうとう放課後になってしまった。

「メグ、健闘を祈る！ちやお。」

そう言つと笑顔で帰っていく恵子。

「良かったな、椎名。幸いにも晃は今日日直だ。そして俺は委員会の当番だ。」

「放課後チャンスは巡ってくるね。椎名さんゴーゴー。じゃあまた明日。」

関までも嬉しそうに帰っていく。

クラスの皆も徐々に減っていき、
三十分もすると校舎全体が静かになっていた。

ついに生活委員の竹田と二人になった。

「晃今一人だぞ。」

四組から帰ってきた竹田が教えてくれた。

「俺って優し〜。」

「うん・・・行ってくる。」

重たい腰をあげ、いざ四組へ。

緊張するな。

ちゃんと渡せるかな。

いや、もらってくれるのだろうか。

不安になってきた。

恐る恐る四組へ辿り着くと、日誌を書いている晃の姿が見えた。
静かな教室で一人、机に向かう横顔はとても綺麗に見えた。

「あきちゃん。」

発した言葉が響いているのに自分で驚いてしまった。

一瞬こっちを見てくれたが、何も言わずに日誌へと戻ってしまった。
た。

そおつと近づいた。

「あきちゃん、」

再び名を呼ぶ。

反応はない。

緊張から今度は私が下を向いてしまった。

沈黙が続く。

ちゃんと言わなきゃ。

せつかくタケちゃんも、けいちゃんも、関くんも応援してくれたのだから。

自分でがんばると決めたのだから。

再び顔を上げる。

すると、晃の視線は一度窓の外へと向けられた。

そして視線が戻された時、

目が合って、ドキッとした。

「あきちゃん、あのね・・・」

言葉が上手く続かない。

晃の視線は再び日誌に向けられる。

「あの・・・」

「あきちゃん？」

「き、聞いている？」

思わず言ってしまった。

その一言で晃の表情が変わった。

「無視したのはそっち。」

「えっ？」

「朝から。」

「えっ？し、してないよ。」

「した。」

「してないよ。」

「してた。」

「うー、覚えてない。」

「朝と、昼休み。」

「えっ？朝？昼休み？無視してたわけじゃないよ。」

思い出しながら慌てて答える。

「朝はあきちゃん・・・来ていたの？」

「ああ。」

「なんだ、来ていたなら声かけてくれればよかったのに。」

「楽しそうだったから。」

「えっ？」

「おまえ楽しそうだったから。」

朝・・・

そういえば皆にチョコマフィンを渡して、北山くんが来てあきちゃんの話聞いて。

「あ、あれは楽しかったわけでは・・・」

言い訳も聞かずに日誌を書き進める昇。

「そ、それに昼休みも無視していたわけではなく、つ、つまり・・・その・・・」

どう説明したらいいのか分からず、言葉に詰まってしまっ。

はっあ。

何やっているのだろう、私。

これではチョコレート渡すどころじゃないじゃない。
あきちゃんに、ちゃんと聞いてもらえるように話さなきゃ。
しっかり顔上げて、目を見て・・・

あ、あれ？

あれ？

顔を上げ、見つめた目の前にいる晃は相変わらずの無表情・・・
ではなく、怒っているというよりはむしろふて腐れたような表情を
しているではないか。

こんなにも晃が表情を出したことあっただろうか。

いつも無表情で何を言ってもあまり笑ってくれないあきちゃん。
最初は何を考えているのかさえつかめなかった。
でも、

あきちゃんの笑った顔、優しい笑顔、怒った顔、だんだん見れる
ようになってきて、

ほら、

今はどういふ表情をしているのかわかるようになった。

「あのね、あきちゃん、今日はあきちゃんに渡したいものがあるん
だ。」

「はい。」

笑顔で紙袋を差し出した。
すると晃の視線が動いた。

「何これ？」

「今日はバレンタインデーだから。」

「それから、無視なんてしてないよ。朝からあきちゃんに渡すのに
緊張していて、うまく話せなかったんだ。」

ありのままを伝えた。

強がって、がんばってみても、それではあきちゃんには伝わらないから。

今まで通り、私はあきちゃんに元気に笑顔で話しかける。

そうすることがあきちゃんにとっては一番わかりやすいと思うから。

「食い物？」

「そうだよ。」

「ふーん。」

「他にももらった？」

自然に聞いてみたつもりだけれど、やっぱり気づかれたかな、気にしていること。

「いや。もらったことない。」

「うそだ。」

「ほんと。」

「うそだー。」

「ほんと。」

「うっそだー。」

「本当。」

「うそだー。あきちゃん嘘つきだー。」

そこまで言うときの手が伸びてくるのがわかったので、よけた。

「いつも同じ手にはかかりませんよー。あきちゃん私が繰り返してしつこくなるといつも首くすぐるから」

えっ？

えっ、えーっ。

ちょ、ちょっとこれは……

避けたはずの晃の手は、首ではなく、そのまま背中にまわされていた。

片方の手は頭に。

あきちゃんの制服が目の前にあった。
学ランの、ちょうどボタンの辺りに。
そう。

正面から、抱きしめられていた。

「小ちゃいな。」

「……」

何もいえなかった。

正面から抱きしめられるのは初めてで。
息をすることさえ忘れていた。

「なんか柔かいし。」

「そ、それはお肉っていう意味？」

思わず聞いてしまった。

「たしかに肉だな。これは。」

「ひっどーい。」

そう言ってやっと顔を動かした。

「痛っ。」

「あ、あれ？髪が・・・」

髪の毛が髟のボタンにかかってしまっていた。

「あ、ばか動くな。」

解いてくれているあきちゃん。

あきちゃんの頭がこんなに近くにあってるだなんて身長差があるから、いつも見上げていた。
あきちゃんを。

無表情だから、顔色を伺っていた。
何を考えているかわからなかったから困った。

自分に都合が悪くなると、見上げることを辞めた。
下ばかり向いて、視線を逸らした。
あきちゃんから逃げていた。

でも、もう一度向き合いたくて、
あなたに追いつきたくて、
あなたと並びたくて、
一緒に歩きたくて、
そばにいたくて。
すごいな。

触れば手に届く。

簡単に手が届く距離にいる。

このまま・・・
時が止まればいいのに。

ずっと一緒にいられたらいいのに。
今日の日がずっと続けばいいのに。

「とれたぞ。」

「あ、ありがとう。」

結局自分のボタンを制服から外して解いてくれた。

「それ、取れるんだね。知らなかった。」

「ああ。」

「取り外せるとは便利だね。あきちゃん、今度の学校も学ラン？」

「ああ。確か一緒。」

「そうなんだ。」

聞いたところで自分は高校の制服を着た晃を見ることは出来ないことに気がついて寂しくなった。

「やろうか？」

「え？」

「ボタン。」

「えっ？」

「卒業式の時。」

「うん。い、いいの？」

「べつに。」

「ほんとに？」

「ああ。」

「ほんとに？」

「ああ。」

「ほんと？」

「しつこいぞ。」

「ほんとね。やった〜。」

思いがけない晃からの言葉に、嬉しくてしょうがない顔で笑って

いる。

今思えば、

これが最後の楽しい日・・・だったのかもしれない。

あきちゃんが笑っていて、

あきちゃんが優しくて、

私も嬉しくて、楽しくて、幸せで。

時間よ・・・

どうかゆっくり流れて。

その時が来るまで

どうかゆっくり流れて。

そのまま、家庭学習期間に入った。

あきちゃんに、試験がんばろうね。

そう伝えられぬまま・・・

5

三月十日

久しぶりの登校日。

今日までに一般試験、推薦試験、全ての高校受験が終わり、結果が出ています。

皆それぞれの結果を胸に、新しい進路を手にして集まってきた。

「もーえっ。」

「にの！」

「めぐー！」

「けいちゃん！」

「おめでとー！！！」

思わず三人で抱き合ってしまった。

「良かったね、けいちゃん。」

「受験番号あった時、私泣いたわよ。」

「もえー、俺でも受かった。」

「二人ともおめでとう。いいな、同じ学校だものね。」

「そうなのよ。別に私はにのとは同じじゃあなくても良かったのだけどね。」

「恵子。」

「めぐ、高校生になってもたまには遊ぼうね。」

「うん、うん！」

私は無事第一志望のT校に合格。

仲の良い友達こそいないものの、何人か同じ高校に進む仲間がいる。

にのとけいちゃんは同じ高校。

タケヤんと祐也が同じ高校。

ちなつちゃんとヒロアキ、関くんも同じ高校。

松岡くんは県一、超難関といわれるM校に合格。学校の名誉と先生方は喜んだ。

あきちゃんは？

結果が出なかった者、志望校不合格となった者は、別室で進路指導を受けている。

あきちゃんの姿が見えないのでもしかして・・・心配だった。

もし不合格だったら、こっちの高校に残るの？

そんな自分勝手な想いが頭をよぎった。
嫌な子だね、私。
あきらめが悪いぞ。

この家庭学習期間中、色々考えた。
冬休みよりも長かった期間。
試験に向けて苦しかった夜。

勉強の合間にふとあきちゃんの顔を思い出したりした。
塾の行き帰り、学校への定期相談の日、どこかで会えるのではない
か、きつとどこかであきちゃんを見かけるとはではないか。
そんな期待も叶うことはなかった。

会いたくて泣いた夜も会った。
今はまだ会える距離にいるのだから、
会おうとおもえば会えたかもしれない。

電話をすれば、会いに行けば、タケちゃんにお願いしたら・・・
そんな想いも交差していた。

でも・・・

受験が終った時、先生がくれた言葉。
「過去は振り返ってはいけない。今を生きる。」
そう声をかけてくれた。

試験が出来なかった、もつと勉強しておけば良かった。
あの時こうすれば良かった、そう過去を思い返すのではなく、
過去は過去。

誰にも帰ることはできない。
誰にも変えることはできない。
だから次へ進みなさい。
今を大事にしなさい。
今を・・・

あきちゃんが好きなこの想いを大事にする。

だから無理はしない。

自然に向かってくるもの、それを受け入れようと思った。

だから・・・

例えあきちゃんが東京へ行っても、行かなくても、私はこの想いを持って進んでいくんだ。

ほらね。

会えたでしょ。

「あきちゃん。」

遠く歩く後姿を見つけた。

走っていつて声をかける。

「おめでとう。」

「おまえも受かったか？」

「うん。」

「そっか。」

「うん・・・」

久しぶりに見るあきちゃんは、また少し背が伸びていた。

「別々になるな。」

「え？」

「これから。」

「あ、うん。」

「そだね。」

少し間が空く。

「泣かないのか？」

「えっ？」

「おまえ、泣くかと思った。」

「な、なんで？」

「見てたから。」

その場できょとんとしてしまった。

「え？」

「おまえの事ずっと見てたから。」

「こついうの弱いだろうなって。」

嬉しかった。

あきちゃんが見ていてくれたこと、

あきちゃんが私を知ってくれてたこと、

あきちゃんが・・・

あきちゃんが大好きです。

「泣かないよ、今日は。」

「おめでとうの日だもん。」

そう言って笑って見せた。

不思議と、涙は出なかったんだ。

泣き顔見せるよりも、笑ってる顔を見せたいから。

泣いている子よりも、笑っている子でいたいから。

泣いたことよりも、笑っていたことを覚えていてほしいから。

涙は卒業式までとっておくね。

三月十三日

晴れ。

蓮田中学三年生197名。
卒業。

入場を控えて体育館の裏に待機していた。

「やばい、もう泣きそうなんだけど。」

「けいちゃん。」

「めぐー！」

抱き合う二人。

「おまえらバカか。」

笑う竹田。

ふと前に並ぶ四組に目を向ける。

あ。

晃と目が合った。

「おはよう。」

聞こえたかわからなかったけど、少しの間目が合っていた。

「終わったら皆で写真撮ろうなー。」

にのが言う。

「えー、泣いて変な顔だったら写りたくない。」

恵子の写りたくないという言葉に、晃の言葉を思い出した。

修学旅行の時、あきちゃん激しく写真を拒否していたな。

あの時は無理を言って撮ってもらったね。

ヒロアキと三人で映った写真。

修学旅行か。懐かしいな。

あの頃は、まだあきちゃんをこんなにも好きになるとは思っていなかったな。

こんなにも・・・

卒業式がはじまった。

来賓の挨拶、祝辞、卒業生を送る言葉が続く。

信じられなかった。

卒業だなんて。

静けさを保ったまま、進行は卒業証書授与式へと変わっていった。

校長先生が一人一人の名前を呼ぶ。

壇上に上がり、一礼をする。

卒業証書を読み上げ、手渡す。

一礼をし、壇上を後にする。

一組から始まった授与式は、一人一人、クラスごとに終わっていく。

二組になり、

三組になった。

壇上に祐也の姿が見えた。

祐也。

中学生活で初めて好きになった人。

彼の隣をいつも歩いていたかった。

同じものを見ていたかった。

その想いは叶わなかったけれど、代わりに大切なことを知った。
とても大切なことを教えてくれた祐也。

人を好きになること、

相手を思いやること。

ありがとう。祐也。

三組女子になると千夏が上がった。

ちなっちゃん。

二年生のクラス替えで初めて話しかけてくれた女の子。

小さいけれど笑顔が可愛くて、パワーを持った強い女の子。

一緒に笑って、遊んで、いつも一緒にいた。

間違ったことが大嫌いで、友達でも違うとしっかり言ってくれる。

いつも相談にのってくれたね。

ありがとう、ちなっちゃん。

あなたと友達になれたこと誇りに思うよ。

三組が終わり、

四組になった。

ヒロアキ。

一年と二年の二年間同じクラスだったね。

中学に入って初めて出来た男友達。

部活も一緒に、私のわがままにもつきあってくれたね。

いつもそばにいたから、それが当たり前のようにだったから、私は
ヒロアキが見ていてくれたことに甘え過ぎていたね。

ごめんね。でも、ありがとう。

あなたは一番大好きな友達だよ。

そして・・・

晃の名前が呼ばれる。

「穂高晃。」

「はい。」

返事をした晃。

その声を聞いた瞬間、

一気に涙が溢れ出た。

それまでの何かが切れたかのように。

あきちゃん。

振り返ってみれば色々なことがあったよね。

今だから言えるけれど、はじめはあきちゃんの事苦手だった。

話しかけてもいつも無愛想な態度だし、私がいることを邪魔そうにしていたし。

でもね、落したプリント拾ってもらった時、そんないい加減な人ではないのになって思った。

その頃から少しずつ話すようになって、修学旅行でテレホンカード拾ってくれたのもあきちゃんだったね。

引退試合、突然見に行って感動した。

あきちゃんを好きだと気がついた。

夏休みにはお祭りに一緒に行って、初めて手をつないで。

秋にはお互い想いがズレてうまくいかないこともあったけれど、あきちゃんを想う気持ちを大事にしようと思った。

こんなにも長い間人を好きになったことなんてなかった。

だから・・・

今日までが短く感じる。

でも、これだけは覚えておいてほしい。

あきちゃんと一緒にいて、楽しくなかったことなんてなかったよ。

辛いこともあったけれど、それでもあきちゃんのそばにいたかった。

ずっと、一緒にいたかった。

色々な事が頭を横切り・・・

悲しかった。

再び晃を見る。

壇上から降り、席へと戻る晃の横顔は真剣な表情をしていた。

行かないで・・・

そう思った。

こんなに涙が出るとは思っていなかった。

自分がどう卒業証書をもらったのかさえ覚えてない。

気がつくと卒業式は終わり、教室の中にいた。

「めぐ・・・平気？」

「うん。大丈夫だよ。私は平気だからけいちゃん皆と写真撮っておいでよ。」

「そう。じゃあまた来るね。」

見事に泣き腫らした顔ではさすがに写真は写れない。

中庭に出て写真を撮る者、ペンを持ち色紙にメッセージを残す者、笑っている者、皆それぞれの想いを胸に最後の時間を過ごしていた。

あきちゃんはもう帰ったのだろうか。

卒業式の後、一度も会っていない。

このまま・・・

お別れするのもいいのかもしれない。

会ってしまったら、泣いてしまいそうだから。

会ったら・・・

「おい。」

「おいっ。」

机に伏せていた顔をあげるとなんと目の前にいたのは晃だった。

「あきちゃ・・・」

言葉にならなかった。

泣き顔を見られなくなかったけれど、もうどうすることも出来なかった。

「これ。」

「え？」

目の前に置かれたのはボタンだった。

晃に目を向けると、学ランの上から二番目のボタンが外されていた。

「やる。」

「あ、ありがとう。」

やっとの思いで発した言葉。

「じゃあな。」

「あ、あきちゃん。」

そのまま行ってしまうと思ったが、振り返ってくれた。

「ありがとう。げ、元気でね。」

「ああ。」

「ばいばい。」

「ああ。」

「バイバイ。」

晃が教室を出て行った後、最後の「ああ。」という声がずっと残っ
ていて、

涙がまた溢れてきた。

最初から、最後まで変わらない、あきちゃんの無表情な答え方。

どうして悲しいの？

ボタンもらえて嬉しいはず。

どうして悲しいの？

話せて嬉しかったはず。

ドウシテカナシイノ？

その答えはわかっている。

好きだから。

今日という日がついに来て。

でも、まだ実感がない。

会えなくなるってどういこと？

高校生ってどういうこと？

悩んでも・・・

泣いてもしょうがない。

だって私が決めたことなのなもの。

まっすぐ前を見て進もうって。

この先つらいこともあるだろうけれど、

もっと素直になって、私らしく、歩いていこう。

好きだから。

人が人を好きになつたら、涙はつきものなのかもしれない。
はじめは私のことを見てほしかった。

私に気づいて欲しいと思った。

相手の想いを知ると、今度は私だけを見てほしくなった。

嫌われたくなかった。

拒否されるのを恐れていた。

再びつかんだ喜びも、怖くなって自分から手放してしまった。

それでも・・・

楽しかった。

幸せだった。

会えるのだから。

学校に行けば会えるのだから。

手を伸ばせば届く距離にいるのだから。

はじめて手に入れた恋愛は、

楽しくて、幸せで、素敵で、ドキドキして。

わからなくて、困って、悩んで、辛くて、悲しくて、逃げ出した

りもした。

それでも、大好きな人と過ごした時間は大切な宝物。

卒業。

おめでとう。

おめでたくなんかはない。

お別れ。

でも、忘れられない・・・

きつと、ずっと。

過去を振り返らずに、

前を向いて歩いていこう。

そうすれば、

またいつか会えるよ。

信じてる。

あなたに会えて良かった。
大好きだよ。

「めぐー！」

「もえっ、こっちおいで。」

「皆待ってるぞ。」

「椎名さん、早くー！」

「めぐちゃん。」

「しーな、おせーよ。」

これが私の大切な友達。
これが私の大切な場所。
これが私の大切な時間。
これが私の大切な想い。

思い出にはまだしばらくできそつにもないけれどね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4462m/>

とおい日のうた

2011年10月4日14時24分発行